

# 『川神聖杯戦争』

勿忘草

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この物語は川神で生まれる物語。

現存する川神の『聖杯』を求め七組の主従の戦いが始まる。

今此処に戦いの宴、大舞台の幕が開かれる。

### <注意>

これはコラボ作品となっていて作者様のオリ主がサーヴァントとなりFateの聖杯戦争を戦い抜くといったものです。

その為Fateの原作キャラは出てきません。

# 目次

『プロローグ』	1
『サーヴァントの名前 マスターの名前』	15
『動き出す影 前編』	31
『動き出す影 後編』	42
『最強対最弱』	54
『エマージェンシーコール パターン：M O M O Y O 』	66
『王と爆発』	79
『逃亡を見つめるは虎の双眸』	91
『プロフィール』	102
『同盟と闇鍋』	129
『準備期間』	144
『最強に挑む者たち』	153
『斬撃とバイクと爆発と衝撃波と本気の戦士』	167
『鬼神が倒れる時に光は降り注ぐ』	177
『爆ぜて散るは大輪の華』	190
『槍兵の憂鬱 新たな協力』	200
『騎兵と王の道は違える』	213
『射手と槍兵』	221
『槍兵は去りゆく』	244
『蜘蛛と牙 前編』	252
『蜘蛛と牙 後編』	264

『最後の休息』	278
『暗殺者と刀 前編』	288
『暗殺者と刀 後編』	299
『刀と車輪の舞踏 前編』	315
『刀と車輪の舞踏 中編』	329
『刀と車輪の舞踏 後編』	350
『願いは無く、満たされた器はただひたすらに輝く』	385

## 『プロローグ』

『聖杯の胎動 開かれる戦いの宴』

夏特有の熱っぽい空気を伴いながら太陽が沈む。

綺麗な満月が出てこの辺り一帯の風景が真つ暗闇に染まる。

その時……ある場所で光っているものがあつた。

それは太陽のように燦然と輝いていて夕焼けのように儂げでも有つた。

この物質の名を人は『聖杯』と呼ぶ。

『聖杯』とはかつて『アーサー王伝説』において『円卓の騎士』たちが求めて旅立ち、その内の一人『ガラハッド』が見つけたとされるもの。

それは人々の願いを叶える『万能の願望機』とまで言われた神秘の集大成のような存在なのである。

……そしてその『聖杯』というものは『アーサー王伝説』以外の伝承でも多くありまだこの世に現存する物もある。

またこの『川神』にもその『聖杯』は存在していた。

どこか分からぬ所で光り続け、手に入れた者の願いを待ち焦がれているのだ。

六の魂を捧げた者に頭を垂れるのだ。

当然コレを奪うには正当な闘争が必要となる。

その闘争の名は『聖杯戦争』。

『サーヴァント』と呼ばれる一騎当千のつわものや英雄の霊である『英霊』を召喚し、それを従える『マスター』とペアとなって戦うシステムだ。

『サーヴァント』には七つのクラスが有って、それぞれが適性によって聖杯の座から呼び寄せられるのだ。

七つのクラスと言うのは……

『剣士』

『弓兵』

『槍兵』

『狂戦士』

『騎乗兵』

『暗殺者』

『魔術師』

となっている。

これ以外にもイレギュラーとしてのクラスは有る。

それは『復讐者』だ

剣を携えるサーヴァントは『セイバー』。

弓を番一くつが>えるもしくは銃弾を放つサーヴァントは『アーチャー』。

槍を振るうサーヴァントは『ランサー』と呼ばれる。

この三つのクラスは『三騎士』と呼ばれている。

七つの中でもトップクラスの戦闘力を誇る。

特にセイバーは『最優』と呼ばれていて仮に意図的に召喚できるのであれば、全員がそのクラスを狙う事だろう。

ただデメリットを度外視するのであれば『最強』と名高い狂戦士……『バーサーカー』という選択肢が存在する。

暗殺者のサーヴァントである『アサシン』はその四つのクラスとは違い『スキル』で押すタイプである。

そして騎乗兵のサーヴァントである『ライダー』はその四つのクラスとは違い『宝具』で押すタイプである。

魔術師のクラスである『キャスター』はとてつもない魔力を用いることで、『道具作成』や『陣地作成』によって己の土俵に持ち込むことができる。

魔力のブーストによる強力な魔術を放ったり、その魔力でマスターを強化するなどの

後方支援型のクラスである。

『スキル』はそのサーヴァントが持ちえる技術であり、『宝具』はそのサーヴァントの生き方や武功による伝説を具現化した『武装』の事を指す。

例としてスキルを説明するならば、アサシンは『気配遮断』というスキルで隠密行動や不意打ちに優れている。

アーチャーが『単独行動』のスキルを持ちマスター不在でも動く事ができる。

……とこう言ったように戦い方において方針を考える指針となるのだ。

これがこの『聖杯戦争』におけるクラスの説明である。

そしてサーヴァントの概要だ。

次は『マスター』についての説明となる。

『マスター』に求められる者はさまざまだ。

戦略を組み立てる頭。

共に戦える腕っ節。

逃げを決めることのできる決断力。

令呪を使うことをためらわない勇氣。



コレは聖杯をめぐる七つの主従の物語である。

一人は白と黒を基調とした服を着た少女。

肩口や足の付け根にふわふわの毛皮をつけたかわいらしい物だ。

髪は濃いピンク色でツインテールにしている膝まで伸びている。

彼女は八重歯を見せた少し凶暴性が見え隠れする笑みで目的地へと向かっていた。

一人は黒色の髪を短く切った女性。

美しい顔立ちだが彼女の目には謀略が渦巻いていた。

彼女は笑みを浮かべながら目的地へと向かっていく。

彼女のその微笑みや雰囲気は逆に警戒心をを与えていた。

そのせいだろうか、野鳥や犬や猫はその女性にたいして若干距離を取っていた。

一人は黒を基調とした服を着た女性。

おなかや太ももを大きく露出した格好だ。

女性特有の膨らみが服の基調の色である黒に対して、白い服で覆われているためより

いっそう強調されている。

髪は紫色で片目を隠すようにしている。

彼女はサデイスティックな笑みをうかべて目的地へと向かっていた。

一人は羽織と袴を着て額にバツテンの傷がある白髪の小柄な女の子。

諸葛孔明を思わせる団扇をもち特徴的な笑い声を上げて目的地に一直線へ歩いていく。

その姿はまるで王の行軍を思わせるものであった。

一人は赤いバンダナを頭に巻き、茶色の髪を持った少年のような顔つきをした男性。世間一般で言われる『イケメン』といわれる部類の顔つきをしているであろう。

彼は地面を歩かず軽業師のように木から木へと飛び移って召喚の為の場所へと向かっていた。

一人は長い髪を束にまとめて馬の尻尾を模したような髪型をした女の子。

その女の子は薙刀を持ちこれからの戦いに期待を馳せていて、それを言葉なしに表現できるほど清しい笑顔で軽やかに歩いて目的地へと向かっていた。

一人は燃えるような赤い髪を腰まで伸ばした女性。

右目には眼帯、そして衣服は軍服とこの日本には似つかわしくない風貌をしている。

腰にはトンファアを携えており、ぴりぴりとした殺気を纏っている。

目的地へと向かうその姿は凜としているが恐ろしいものがあつた。

それから暫くして各々が目的の場所へと到着する。

召喚陣を書き、その中心に向かって触媒を置いて手をかざし召喚の呪文を唱え始める。

「閉じながらに満たされてそれを繰り返すこと実に伍度、時は満たされてその時は瞬く間に破却されゆく」

そしてはじめの言葉を言った後は全員が呼ぶための言葉を紡ぎ始める。  
当然決まった言葉なんてなく全員が思い思いに言い放つてゆく。

ピンク髪のスインテールの少女の場合。

彼女は刀の柄を触媒にしていた。

当然彼女はコレがどういったものかは知らない。

第三者が言わなければ絶対に分かる事もないだろう。

しかし自分が決めたのだからきつとこれは大丈夫なものだ。

そんな根拠のない自信を持って彼女は詠唱を始めた。

『最優の称号の証を持つ剣士よ、呼ばれるは同調する者の姿なり』

『汝は主と共に暴れるために有り、主もまた楽しみて暴れつくす者』

『主の言葉に心鳴動し、此処に現れる!!』

黒髪のショートの場合。

彼女は銀の首飾りを触媒にしていた。

首飾りには擦れているが何かしらの文字が書かれていた。

彼女の謀略の目が渦巻く。

そして一気に吐き出すように詠唱を始めた。

『雨の如く乱れ撃て、汝は射手の者、ここに現れるは任務を成し遂げし者』

『汝は私に聖杯を運ぶ者、ここで願いをかなえるとき傍らに付き従う者』

『主は眼前で汝を待つ、いでよ、四神操るつわものよ!!』

サデイスティックな笑みを浮かべる紫髪の女性の場合。

彼女はある指輪を触媒にしていた。

その指輪が何処で出てきたのかは分からない。

ただ分かるのは大事にされているという事実だけだ。

ダイヤの入ったその指輪は少しなんだか哀しい光を放っていた。

『汝は最速の者、汝は確実に堅実に戦って勝利をもたらす者』

『汝が心に抱くは夢、叶えたい思いは愛』

『汝は純なる一つの思いで主を勝利に導く者、現れよ、強き者よ』

バンダナの男性の場合。

彼は何も触媒も持つては居なかつた。

本来ならばやるべきではない、なぜならその召喚の場合は波長が有つたものが呼び出されることになる。

つまりクラス適性さえも無視したとんでもない『サーヴァント』の可能性がある。

しかし彼はその様な事なんて意に介さず嬉々として詠唱を始めた。

『汝は『木行』、『火行』、『土行』、『金行』、『水行』の『五行』を扱う者なり』

『汝は隠れ蓑に潜みて首を狩り、汝は森の中で木を装うように、汝は隠蔽と殺しを成し遂げる存在なり』

『汝は気づかれぬように姿を暗闇に隠す者、しかし今宵月光の元に訪れる!!、いでよ、闇にまぎれし殺意を持った禍々しき者よ!!』

羽織袴の白い髪のをした女の子の場合。

彼女は髪留めを用意していた。

川神一子達とはまた違った大人な雰囲気、髪留めである。

それには何かしら意味があったのだろう。

堅い紐であつたため普通では結んだり解いたりするのが難しい代物だつた、まるで封印を思わせるものだつた。

『汝はその眼を戦いの熱に曇らせて戦闘に狂う者、しかし汝は強者ゆえに虚しき檻に囚われる』

『しかし我は汝を囚わせはしない、我は汝の檻を壊す者、汝が我を重んじるのならば我がお前に戦いを与えよう』

『我は汝の主であり理解者、故に我の眼前へ現れよ『最強』の英霊よ!!』

馬の尻尾のような髪形をした女の子の場合。

彼女は川神水のひょうたんと摘みを乗せるような皿を触媒にしていた。

川神水に縁があるものが本当に居るのかと疑いたくもなる。

しかしそれは純粹な心を持つ彼女には野暮な考えだつた。

彼女は笑みを浮かべて好奇心旺盛な顔で詠唱を始めた。

『汝は騎乗の技能を持つ兵、汝は拳により敵を打破する者』

『私と汝が思い描く戦いの道、それは一致していると願う、信頼の上に積み重なるものと信じている』

『共に夢を見て進んで行く為に……来て！、共に有るべき人!!』

軍服を着た赤い髪の毛の女性の場合。

彼女はドイツ軍の服の切れ端を触媒にしている、紅色に染まったそれは血の色だと感じ取れていた。

そして集中をして息を吸い込む。

そこから一拍置いてよく通るような声で詠唱を始めた。

『汝は『最弱』の称号を持つ者、故に汝は魔たる術を用いる者、汝の術の為に私は動き、私の武の為に汝の術は唱えられる』

『戦場で私は汝の矛となり汝はその矛を苛烈とする、私は汝の盾となり汝はその盾を強く固とする』

『私の武と汝の術にて願いを捧げる為に互いに支えて道を行く、来なさい、私の心に答えしものよ!!』

全員が召喚の詠唱を終える。

すると目も眩むような光が召喚陣から放たれる。

その光がなくなつた後、手に焼けるような強烈な痛みがはしる。

その原因を確かめる為に手を見ると、手には聖痕ステイグマのような紋様もんようが現れる。

発光に続き強烈なつむじ風によって辺りの砂や木の葉が大きく舞い上がり砂煙が起る。

召喚に関する詠唱の速度としては全員が全くの同時であつた。

その為、『マスター』によるクラス適正などの優劣によってどのクラスの『サーヴァント』が出るのか決まるであろう。

ちなみに手に現れた紋様は『令呪』と呼ばれるもので『サーヴァント』に対する絶対命令権である。

それは三画有り、一画につき一度。

つまり三度までならばどのような命令も聞かせることができるのだ。

そしてつむじ風が晴れたとき召喚陣の中心には一人の男、または女性が立っていた。

全員がその姿を見て息を呑む。

『サーヴァント』とは一騎当千の存在である。



その為存在感も威圧感も普通の人間たちに比べ圧倒的にあるのだ。

だからこの反応は何も不思議なことではなくむしろ当たり前のものであった。

それから一拍置いて『サーヴァント』が口を開くのだった。

あるサーヴァントは笑みを浮かべながら。

あるサーヴァントは凜とした顔で。

あるサーヴァントは頬をかいたりしながら。

あるサーヴァントは胸を張り不敵な笑みで。

あるサーヴァントは傲岸不遜に。

あるサーヴァントは肩をすくめながら。

あるサーヴァントは睨みつけながら。

それぞれ行動や態度は別では有るがひとつの言葉を言い放つ。

「確認だけど、お前がオレのマスターで間違いないんだよな？」

「問わせてもらうが貴方が俺のマスターか？」

「一応状況的に考えてみたが俺のマスターはあんたか？」

「貴方が私のマスターね、宜しく頼むわ」

「問おう、貴様が王オレのマスターか？」

「質問だけど君が俺のマスターで合っているのか？」

「問うぜ、あんたが俺のご主人様なんだな？」

それは目の前の存在が己の主か確かめるものだった。

そして召喚の場所から遠く離れた『親不孝通り』での『宇佐美代行センター』である反応があった。

それは全てのサーヴァントが筒なく召喚されたという合図だった。

この反応があるということとはつまり川神聖杯戦争が始まるという事なのだ。

今回監督役となった『宇佐美巨人』は目を押さえながらこの現状にため息をつく。

自分の胃に穴が開かないだろうか、白髪が生えないだろうか、年齢のこともあつてそんな事を考えてしまう。

しかしそんな考えなど露知らず。

今此処に聖杯を求める闘争が始まる。

川神を舞台にしたとてつもない闘争が。

待ち受ける結末は幸せなのか不幸なのか。

……その結末は全員を照らす月と輝き続ける聖杯だけが知っている。

## 『サーヴァントの名前 マスターの名前』

『サーヴァント』の問いかけに『マスター』たちは微笑んでその答えを返す。

かといってその笑みが全員清しいものというわけではない。

あるいは歪に歪んだもの、あるいは怒りを含んだものもあるだろう。

『マスター』たちも息を吸い込み一拍置いて言い放っていた。

「そうだ、ウチがあんたのマスターってわけだ!!、名前は板垣天使、マスターか天って呼ばないと……痛い目に合わすぜ、マジで!!」

名前を名乗るピンク色のツインテールの女の子：板垣天使は最後に自分の呼び方を伝える。

そして間違った呼び方をしたらどうなるかを睨みながら『サーヴァント』に忠告していた。

「そうだよ、私が君のマスター、名前は松永燕って言うんだ、宜しくね」

黒髪でショートの女性……松永燕は微笑みながら手を振って質問に応える。

目の前のサーヴァントを見てすでに謀略を考えているのだろう。

どのように活かせば勝てるか、自分がどのように立ち回るのが効率的か。油断ならないマスターであった。

「そうさ、あんたのマスターだよ、名前は板垣垂巳、呼びかたは好きに呼んで構わないよ」  
紫髪の妖艶な女性……板垣垂巳は舌なめずりをするようにして『サーヴァント』を見る。

頑丈なのか強い男なのか調べる為なのか。

名前どおり蛇のような目でじっくり上から下まで見た後、微笑んでいた。

「その通り、我がお前のマスターだ、我の名前は九鬼紋白である、戦いの間は宜しく頼むぞ、フハハハハハ!!!」

羽織袴の女の子……九鬼紋白は凜とした立ち姿で高らかに笑いながら告げる。

一騎当千と謳われる存在が放つ威圧感や殺気をもつともしない胆力には舌を巻くだろう。

その姿は並々ならぬ器の広さを感じさせると同時に可愛らしいものであった。

「ああ、俺がお前のマスターだ!!、名前は風間翔一だ、宜しくな!!!」

バンダナの青年……風間翔一は元気な声で名乗る。

まるで先ほどの傲岸不遜など気にしていない。

それどころか面白い奴だといった感情が顔に映りこんでいる。

子供のような心の持ち主であった。

「私の名前は川神一子、優しそうな人で助かったわ、宜しくね!!」

馬の尻尾のような髪形をした女の子……川神一子は微笑みながら言葉を使う。

見た目から受ける印象と心からの感想を告げて手を握る。

『サーヴァント』と仲を良くしようとする事は大事な事でもある。

優しい心の持ち主であった。

「私の名前はマルギツテ・エーベルバッハ、主を睨むその態度はあとで肅清するとして……呼び方は『マスター』、もしくははさん付けにするようにしなさい」

軍服を着た赤い髪の毛の女性……マルギツテ・エーベルバッハは先ほどの態度に苦言を呈する、それは間違っていない。

主に対して余りにも敵意を向けるような睨みを効かしていたのだから。

氷のような冷たい視線を『サーヴァント』に向けていたのだった。

そして全てのマスターが名乗るとサーヴァントが顔を上げる。

砂煙で少々おぼろげに映っていたであろう輪郭が浮かび上がる。

目、鼻、口、耳。

時間が経つにつれより鮮明になってくる。

そして目の前に現れた顔を見て色々な反応を示す。

あるサーヴァントは宿敵であるが故の怒り。

あるサーヴァントは苦手であるが故の苦笑い。

あるサーヴァント達は関係ないにせよ楽しいと感じる喜び。

あるサーヴァント達は愛する者であるが故の戸惑い。

あるサーヴァントは知り合いであるが故の親近感。

「貴様が王オレを呼んだか、風間あ!!」

「まさか燕姉がマスターとか……帰って良い?」

「なんだか馬が合いそうなやつでよかった、宜しくな」

「可愛い女の子がマスターなんて、当たりね」

「そんな、なんだって亜巳が……クソつたれがッ…………気持ちワリい……」

「マルギツテさんを睨みつけるとか……危ない、危険が危ない」

「顔見知りのお嬢ちゃんならまだ分かりやすい、良かったぜ」

と一言呟いていた。

しかし次の瞬間全員の顔が引き締まる。

そして己の真名をマスターに伝え始めた。

「王オレの名は霧夜王貴、アサシンのクラスだ。

その矮小な脳に刻んでおけよ、風間」

傲岸不遜にアサシンのサーヴァント……霧夜王貴は言い放つ。

コレが風間翔一ではなく礼儀にうるさいものだったなら、しやれにならない事態になつていたらどう。

彼の言葉をマスターである風間翔一は笑いながら聞いていた。

「俺の名前は黒月龍斗、アーチャーのクラスだ、こちらこそよろしく頼む」

苦笑いをしながらアーチャーのサーヴァント……黒月龍斗は伝える。

苦手意識を持った女性に対しての反応としては普通だ。

彼は速く単独行動がしたいと思うのだった。

「オレの名前は立花虎之助、セイバーのクラスで今回来ている。

マスター、面白おかしくいこうじゃないか」

笑みを浮かべてセイバーのサーヴァント……立花虎之助が言う。

その笑みが出す雰囲気はマスターに対して友好的であり、取り入りやすさを出している。  
る。

しかし目の奥にはちらちらとどす黒い炎が見えていた。

「私の名前は川神千李、クラスはバーサーカー、頼むわね、マスター」

胸を張りながら堂々と言うバーサーカーのサーヴァント……川神千李。



本来ならば宿るはずの『狂化』が彼女には宿らず、意思疎通を可能としている。目には喜びが、顔には自信が満ちていた。

「俺の名前は藤井戒……ランサーのクラスだ……宜しく頼む……」

戸惑いながらランサーのサーヴァント……藤井戒は質問に答える。

動揺を悟らせまいとするがうまくいかない。

目を逸らして深呼吸をして何とかしようとする。

その逸らした目の中には触媒のダイヤが放っていたような哀しい光があった。

「俺の名前は澄漉香耶、キャスターのクラスで現界している。

宜しく願います、マスター」

戸惑いを隠したままキャスターのサーヴァント……澄漉香耶は恭しく頭を下げる。

隠れた顔には笑みを浮かべて、目には凶悪な光を宿していた。

どんな手でも使うといったと暗い思想や感情が体中からにじみ出ていた。

「俺の名前は国吉灯、ライダーのクラスだ……まあ、ゆっくりのんびりやろうぜ、ワン子ちゃん」

両手を広げて満面の笑みを浮かべるライダーのサーヴァント……国吉灯。

慌てて動く必要は彼にとって何の意味もなさない。

願いをかなえなければ最後の一騎にさえなれば良いのだから。

それが彼の考えである、彼からはゆるやかな雰囲気かじみ出していた。

名乗りあつて一段落付いた時にある黒い影がそこにはあつた。

黒い影があるにせよどうやって全員の場合が分かつたのか？

それは感知していたシステムから瞬時に割り出したのだ。

普段はだらけていてもやる時はやる、それが宇佐美巨人と言う男であつた。

板垣天使の所には直江大和が。

松永燕の所には黛由紀江が。

板垣亜巳の所には島津岳人が。

九鬼紋白の所には宇佐美巨人が。

風間翔一の所には師岡卓也が。

川神一子の所には源忠勝が。

マルギツテ・エーベルバツハの所にはクリステイアーネ・フリードリヒがあるひとつの事を聞くためだけにそこにいた。

板垣天使の場合。

「ああん!?、何でお前がそこにいんだよ?」

いきなり後ろから現れた人影に驚く板垣天使。

直江大和だということを確認すると質問を始める。

「参加するかどうかを聞きにきたんだ」

その質問にすぐに答える。

すると天使が笑みを浮かべてその用件に対して即答してきた。

「うちは参加するぜ、好きに暴れられる、こんな楽しい事から降りるかってんだ!!」

それを聞くと直江大和は宇佐美巨人にその旨を伝える。

板垣天使の参戦がこれで決まった。

松永燕の場合。

「あの、松永先輩……」

おずおずと話しかける……彼女の名前は黛由紀江である。

当然それに気づいた松永燕はその声に応える。

「わざわざどうしたの？、言っとくけどセールスはお断りだよん」

冗談めいた言葉を松永燕が投げかける。

しかし黛由紀江は真剣だった、その言葉に対して力の籠った声で一つの質問をしていった。

「いえ、そういう事ではなくこの度の戦いにおいて参加するかどうかを聞いているんです、先輩はどうするんですか？」

「そりゃ参加だよ、家名を高める機会なんでもん、逃す理由が無いよ」

その質問にいつも謀略の笑みで答える松永燕。

しかしその目の奥に静かに燃える闘志が有るのを黛由紀江は感じ取っていた、

「そうですか、それではその確認でしたので、その……頑張ってください!!」

その真剣な目を見たらこれ以上交わす言葉は無い。

そう思った黛由紀江は一言残して去っていく。

彼女は帰り道の途中で宇佐美巨人に松永燕が参加するというのを伝えるのであった。

板垣亜巳の場合。

「おつ、お姉さんじゃないですか」

板垣垂巳に声をかけたのは逞しい肉体をしたマッチョマン……島津岳人である。彼の事を板垣垂巳は少し知っている、その姿を見た時少し微笑む。

「坊やじゃないか、もしかして私に壊されたいのかい？」

その言葉を放った瞬間、藤井戒が止めようとする。

しかし島津岳人はいつもと違つて真剣な顔で一つの質問をしていた。

「今回の勝負にお姉さんは参加するのか？」

「楽しみじゃないか、技を振るうのも自由なんだ、使わなきゃ損つてもんさ」

その質問にサディステイックな笑みを浮かべて答える板垣垂巳。

楽しみで仕方ないのか、意気揚々と棒を回していた。

「成る程な、じゃあ参加の事伝えとかないといけないから帰らないと。」

また会えたら良いっすね、お姉さん!!」

その姿を見て笑いながら島津岳人は去っていく。

宇佐美巨人に伝える事も忘れずにきちんとこなすのであった。

九鬼紋白の場合。

「で……おじさんが直々に来ましたよっ」と

中年でよれたスーツを来たヒゲの男……宇佐美巨人がそこにはいた。

「何故宇佐美先生が我の所に!？」

九鬼紋白は驚く。

同年代ではなくいきなり中年の人が来たらそれは驚く、普通の反応だ。

「だってバーサーカーなんだろ、今降りることもできるんだ、そういう奴には一番偉い人が来るもんだ」

パンパンとポケットをはたきながら言う。

そして普段とは全く違う真剣な顔で質問をするのだった。

「参加するの?、別に無理強いはしない、バーサーカー引いて降りるなんぞ普通だ、扱いが難しいんだからな」

するとその質問に間髪をいれず九鬼紋白は言う。

「我は誓いました、戦うと!!、理解すると言ったのにせぬまま降りるなど有つてはいけな  
い!!」

その凜とした立ち姿と気持ちの籠った声を聞いた宇佐美巨人は苦笑いを浮かべて一言言う。

「まあ、本人がそういうんなら参加だな、バーサーカーなんだから無茶するなよ、監督役

が言うのもお門違いだけだ」

そう言つて背中に哀愁を漂わせて手を振りながら宇佐美巨人は去つていくのだった。

風間翔一の場合。

見えた人影は見知つた顔だった、片目を隠した蒼い髪の毛の少年……師岡卓也であつた。

「やあ、キヤップ」

師岡卓也が声をかける。

すると風間翔一が振り向き笑顔で手を振っている。

「おつ、モロじゃねえか、どうしたんだ？」

風間翔一は何か用が有るから来たのだと判断する。

その考えは当たり前師岡卓也は一つの質問をする。

「キヤップはこの戦いに参加するの？」

「当たり前だろ、この祭りに乗らないなんて男じゃねえぜ!!」

風間翔一は目に闘志の炎を燃やして二つ返事をする。

その姿を見て師岡卓也は微笑んでいた。

「それならこっちから監督役に参加の事を伝えておくよ、頑張つてね」  
そう言つて師岡卓也はその場所から去つていくのだった。

川神一子の場合。

目の前に来た人影は川神一子にとって見知っていた顔だった。

「タツちゃんじゃない、どうしたの？」

「何、サーヴァントを呼んだからな、ちよつと聞きたい事があつたんだよ」

タツちゃんと呼ばれた目の前の男……源忠勝に対しどうしたのかと理由を川神一子は問う。

しかしその理由に答える為の言葉にただ事じゃないと思わせる雰囲気がある。

それには川神一子も一瞬口を閉じて聞く体勢になるのであつた。

「一子……参加するの？」

真剣な面持ちで問いかける。

その視線を受け止めて川神一子は答えた。

「うん、参加する、せつかくの腕試しのチャンスだもの、ここで戦わないと勿体無いわ!!」  
その答えを川神一子が言った瞬間、ほんの少し間が空く。



「出来れば参加つてのはやめて欲しかった、怪我して欲しくないからな」  
間を埋めるように源忠勝は言葉を発する。

きつと真剣な本音なのだろう、薄っぺらい気持ちが見え隠れする事もない。  
そんな純粹に思いやる優しい声で言い放つ。

「でも、お前が決めた事だ、これ以上はいわねえよ」

しかしそれも一瞬だ。

穏やかな笑みを川神一子に向けていつも通りの話し方になる。

「とりあえず無理せずに頑張れよ、鼻肩は出来ないから言葉だけになっちゃうがな」

「うん、負けないわ、頑張る!!」

微笑みながらの応援に川神一子は良い笑顔で返すのだった。

「お前も一子の事任せたぞ」

国吉灯の方へ振り向き一言、源忠勝は言う。

その源忠勝の言葉に親指を上げて応える国吉灯。

そういつたやり取りを交わして源忠勝は去っていく。

当然その最中に宇佐美巨人に参加の旨を伝えていたのだった。

マルギツテ・エーベルバツハの場合。

いきなり物陰から現れる人影に対して構えるマルギツテ。

しかし次の瞬間優しい笑みへと変わりトンプアーを下ろしていた。

「一体どういった御用ですか、お嬢様？」

「ああ、マルさんが参加するかどうかを聞きに来たんだ」

どうやら親しい間柄だったようだ。

参加するか否かの質問に対して顔を引き締め毅然とした態度で答える。

「ええ、参加します、願いが叶うとも言われたものを必ずやお嬢様たちに捧げましょう」

その言葉にクリステイアーネは首を振って一言言う。

「そんなものは要らないんだ、マルさんが無事ならばそれで良い!!」

その言葉の後に澄漉香耶の方へと向いて通る声で一言を発すのだった。

「マルさんを頑張つて守るんだぞ!!」

そう言つてクリステイアーネは去つていくのだった。

これによつて全員が参加の意思を示す。

その瞬間、令呪に再び痛みがはしり強く光り鮮やかな色となる。

そして電話で全員参加の事を知った宇佐美巨人は誰も見ていない所で両手を上げる。

それが『聖杯戦争』開戦の合図であった。

## 『動き出す影 前編』

全てのサーヴァントの召喚。

全てのマスターの参加表明。

この二つがなされた事によりようやく『聖杯戦争』が行われる。

そしてその闘争が始まって一番先に動いたのは……

アサシンのサーヴァント……霧夜王貴であった。

「で……これからどうするのだ？」

素朴な疑問を王は風間オレに問う。

こいつをマスターと呼ぶなど虫唾が走る、反吐が出る、令呪を使っても言ってもやってやるものか。

そしてその疑問に対して風間のやつは当然といわんばかりに答えてきた。

「とりあえずは島津寮に行く、本拠地オレに戻って作戦会議だ」

それを聞いた瞬間、王は驚いていた。

その冷静な判断に。

そしてこれ以上ないほどの落胆を覚えた。

王オレの知る風間翔一はこうではない。

もつと無鉄砲で、もつと馬鹿で、そしてもつと王オレを楽しませる。

これでは凡百の塵芥と変わらんではないか。

俺は無意識のうちに齒軋りをしていた。

「そして少ししたら奇襲する、籠城だとか難しいことなんざ無し、決めるのは大雑把な作戦だけだ!!」

胸を張って笑みを浮かべながら言う。

先ほどとは打って変わって無鉄砲な意見が出たことに驚き王オレは指摘していた。

「キサマ、一旦戻るといったではないか、そんな事をするならば何故戻る必要が有る？」

籠城をするわけでもなく戻って少ししたら奇襲をかけるなど無駄の極みだ。

それならば機会を伺い、確実に倒す為に練りに練るのが道理であろうに。

「だって互いに別行動になったら帰れないとヤバイだろ？」

俺の意見に対して平然とした顔で言う。

まるでそれが当然だというように。

なるほどな、そういうことか。

それが理由ならば仕方有るまい。

それを聞いて王オレは自分の早とちりだった事に気づく。

どうやら先ほど感じたものは王の下らん勘違いだったようだ。

風間翔一は変わってなどいなかったのだ。

それを知って何故か頬が緩む。

しかしそれは王のプライドが許さなかった。

変わっていない風間翔一を見ただけでだらしなく頬を緩めるなど。

こいつの目の前で無様をさらすなどあつてはならない。

王は必死に頬を引き締めていた。

「しかし一体どの塵芥を狙うのだ、風間？」

何とかいつもの顔に戻す事ができた王は誰を標的にするかを聞く。

「当然決まってるだろ、強い奴だ!!」

それを聞いて一瞬頭を押さえる。

こいつは一体何を言っているのだろうか。

王のクラスをちゃんと聞いていたのか？

アサシンだぞ、暗殺者だぞ。

真つ向勝負をしろと……

「貴様、いきなり王に本気を出せというのか？」

その質問に風間が頷く。

苛立ちを感じてしまう。

こいつはこの王を誰だと思っ<sup>オレ</sup>ているのだ？

次の瞬間王は叫<sup>オレ</sup>んでいた。

「つくづく厚顔な男だな、貴様は!!」

しかし怒りながらもその言葉に内心笑みを浮かべる。

強い奴と戦つても負けないという確信があるからこそ、この王に強敵を押し付けるといつた真似をするのだ。

その通りだ、奇襲などなくとも王は勝てる。

クラスなど王からすれば下らぬ事、粗末なものに過ぎん。

所詮この王以外は塵芥だ、踏みにじり蹴散らしてくれる。

「悪いけど、『こうがん』ってどういう意味だ？」

全くこの男は……。

ため息をつくと同時に呆れてしまう。

「貴様は知らんで良い事だ、行くのだろう、案内をしろ」

説明ももはや面倒となり王は腕を組んだまま案内をするように言う。

すると風間の奴は唇を尖らせる、教えるという事なのだろう。

知るか、貴様自身の無知さを恨め。

きつと無知という言葉さえもその矮小な脳には詰まっていけないだろうがな。そんな事をやっている時間も惜しいのだというのに気づけ。

「ほら、速くしろ、もたもたするな」

そう言つて王は風間をせかす。

顔を戻してようやく島津寮とやらに向かつて歩き始めた。

どんな作戦が出るのだろうか。

せめて頭を悩ませずに済むようなものが出ることを王は心から願うのであった。

「それで…だ、どうゆう方向性で戦う？ ワン子ちゃん？」

「んーつと、とりあえず『キャスター』や『アサシン』といった厄介な人たちからいこうと思つてるの」

俺の質問にきちんとした意見を述べるワン子ちゃん。

素直な子は良いね。

こういつた受け答えが一番重要。

意思疎通が難しい奴と組んだらそこで躓いてしまい必ず『バースト』してしまう。

「ほお、んじゃ『セイバー』とか『ランサー』はどうする？」

俺は『三騎士』と呼ばれるサーヴァント達への対処について聞いてみる。

現状だけではなくこういった未来を見据えた質問をしておくことも必要だ。

ゆつくりのんびりとは言ったが……いずれは無視することが出来ない問題になる。

「そこは『バーサーカー』の事を考えたら後回しなの、消耗させる事もできるし急がなくてもいいかなーって」

へえー……猪突猛進なワン子ちゃんにしては随分まともな意見だな。

『バーサーカー』をどう扱うか、これは悩む。

基本ほつときや勝手に魔力が切れてくたばるだろうが、もし倒れなかった時は非常にめんどくさい。

もし俺が優先して三騎士のクラスを倒したとしてもだ、その後の『バーサーカー』への対処をしつかり考えてなきや最悪の展開になる。

最悪の展開になった場合、俺の他に残ってるサーヴァントはバーサーカーを除けば『キャスター』と『アサシン』。

こうなってしまうえば『暗殺者』と『最弱』なんかと手を組んでも意味がない。

三騎士と戦い疲弊している俺とあとの二人は瞬く間に蹂躪され『聖杯』を奪われてしまう。



それだけは避けなければ。

もしバーサーカーと戦うならば万全の状態でなければならぬ。

「良い考えだ。それで、その意見に沿って早速動くか？」

俺はワン子ちゃんの方へ振り向き、笑いながら問う。

するとワン子ちゃんは首を振って一言。

「今日は一旦自分たちの本拠地に戻りましょ、ねっ」

ワン子ちゃんの提案に俺は頷くと同時に心の中で口笛を吹いた。

これも悪くない判断だ、召喚されていきなり闘うのはよろしくない。

しっかりと準備して闘うのがベストな選択。

俺は『ライダー』だ。

なので『騎乗』のスキルを活かせるような物を手に入れたい。

あと酒と摘みと良い女。

良い女はワン子ちゃんですら妥協するとして、後の2つはモチベーションを保つために欲

しい。

「そうだな、なら行こう。俺は霊体化してだが」

一言告げて俺は姿を消す。

理由は至極単純。

ワン子の本拠地と言えば川神院。

川神院が嫌なわけではない、嫌なのは川神百代。

強い奴に所構わず突つかかってくる生きるバーサーカーがああ場所に居る。

はつきり言つて相手はしてられないので霊体になることで居ない振りをする。

幸い『サーヴァント』は飯も睡眠もいらぬ。

なら酒と摘みもいらぬんじゃないかだつて？

それとこれは別問題だ。

まあただ単に隠れるぐらいなら楽なもんだ。

更に言えば川神百代は魍魎魍魎が嫌いだったはずだから、物を頭の上から落とす等の

心霊現象を起こせばいい。

そうすりやビビつて向かってくることはなくなるだろう。

考えがまとまり俺は悪い笑みを浮かべながら、ワン子について行つた。

「体が痛い……」

俺は顔をしかめて呟く。

マスターであるマルギツテさんから肅清を受けたのだ。

無防備な状態で喰らったのはトンファークック。

俺は軽く吹き飛んだ。

距離にして考えれば3メートルほど。

どうにか起き上がるが体に少し痛みを残す事になっていた。

「されたくないければ次からマナーをきちんとする事と知りなさい」

悪びれる様子もなくマルギツさんは言い放つ。

生憎ながら『この世界』のマルギツさんには想いはない。

最初こそうろたえたが冷静になれば至極当然だ。

俺が愛してやまない人は『あの世界』のマルギツさんだ。

決して『マルギツテ・エーベルバツハ』という一括りの人間ではない。

「そうですね、今後気をつけます」

少し棘のあるように言う。

アレはマナー以前に顔も見えない相手なのだから仕方ないのではないかと思う。

「それでは本拠地に向かいます、きちんとしてきなさい」

そう言つて歩き出すマルギツさん。

少し歩いて一度こちらに振り向く。

そして俺との距離を見て一言いつて来た。

「その様な距離を取っていて大丈夫なのですか？」

「はい、数分したら駆けつけます」

俺はその言葉に即答する。

確かに今さっき言ったことは嘘ではない。

走った場合数分もあれば追いつける距離だからだ。

只、普通ならばマスターを守るべきである、そんな中で先に行ってくれと言った。

そして俺は人知れず下拵えをするために、霊体化をして『変態の橋』の下へと降りる。

するとそこでは余りにも醜悪なものがあつた。

ホームレスの老人を殴っている男女が居た。

もはや老人はボロボロになっていた。

助けようとする前に老人は血を吐いて息絶えた。

罪悪感もなく笑っている中、俺は近づく。

そして頭を掴んで俺は『スキル』を発動した。

すると段々目の前で男女がドロドロに溶けていく。

まずは頭の皮が溶ける。

頭蓋が露出していく。

脳には行かずに腕を触る。

腕がどろりとして骨までも白い水のようになっていく。

最後には人同士の境目が無くなりどろりと一つの人のように二人が交わりあつていった。

完全に姿形もなくなる。

気力として吸収したという事だ。

俺は手をはたいてその場所から去っていくのだった。

## 『動き出す影 後編』

「で、これからどうすんだよ……？」

俺は頭をかいて亜巳に聞く。

とは言ってもこの亜巳は、俺が知っている亜巳ではない。

積み上げて来た絆も何も無い初対面の存在なのだ。

指輪を見て苦笑いをする、こんな運命があるのかと。

「当然行動するのさ、それ以外方法があるって言うのかい？」

素っ気無い答えが返ってくる。

全く持つて予想通りだ。

しかし行動すると言ってもどういった方針だというのだ？

「何変な顔してんのさ、勝つ行動っていったら戦う事に決まってるじゃないか」

亜巳が笑みを浮かべてそんな事を言う。

俺ってそんなに変な顔をしていたのか？

そしてその後半の言葉を聞き入れる。

なるほど、積極的に戦っていいこうって訳か。

そりゃこつちも『三騎士』に数えられるクラスの一つである『ランサー』だ。闘わなければ宝の持ち腐れ、無用の長物だろう。

「はいはい……分かりましたよ」

大きな声に対して俺は空返事を返す。

それは確かに悪くはない。

しかし俺は自分の中で抱いた疑問を聞いてみる事にする、どういった戦い方かを聞いてみることにする。

「で、どういった考えで戦うんだよ？」

流石に積極的に行くにしても、発見して速攻で倒すじゃ消耗は激しくてやってらんねえぞ？」

俺は手を広げてその事を言う。

するとかなりの速さで棒が突き出されるのを見た。

俺はそれを軽々と避けて微笑む。

すると睨みつけられながら大きな声で一言いわれる。

「そんなのは分かっているのさ、許可無くしゃべってんじやないよ、その口は許可が有るまで閉じときな」

俺はその言葉を聞いた瞬間に苦笑いする。

それはいくらなんでも横暴じゃないだろうか？

しかしその言葉を飲み込んでこの場は黙っておく。

流石にこの状況で機嫌を損ねたらそれこそ危ない事になる。

「分かった、できる限り言う事は聞く、これで良いだろう？」

亜巳の方へ掌を向けて手を上げて降伏の意味を示す。

それを見た亜巳はサデイスティックに背筋が凍るような笑みを浮かべる。

亜巳は緩やかに棒を下げて歩き始める。

きつと向かうのはこれから戦う為に使う本拠地なのだろう。

「ほら、とつとと歩きな、遅くなったら罰を与えるよ」

こちらと距離が離れているのを見て亜巳が再び背筋が凍るような笑みを浮かべる。

俺は苦笑いをしてすぐに距離を詰める。

「これから前途多難なことが起こりそうだなあ……おい」

俺は口角を上げて亜巳へ聞こえないように呟く。

この戦いの間でどこまでお互いの心は分かり合えるのか。

いつまでお互いの心に疑念は生まれないのか。

いつになればこの心の中の疼きは収まるのか。



俺はそういう思いを持ったまま本拠地へと向かうのだった。

「これからウチとお前は戦いあう仲ってわけだぜ!!」

八重歯を見せたまま満面の笑みでマスターが言ってくる。

それから一拍置いてマスターは戦いの方針を言ってきた。

せつかちだとは思うがやる気満々という事だ。

「お前が策を考える、勝負にはウチも出る、これで良いだろ、暴れまくろうぜ!!」

なんとと言う雑な提案なんだろうかと思った。

作戦はオレが考えて、戦いはツーマンセル。

マスターはマスター、サーヴァントはサーヴァントって考えで戦えるから良いけれど。

「何とか上手い事戦う方法は考えられなかったのか?」

オレは素朴な疑問をマスターにぶつける。

いくらなんでも大雑把過ぎやしないだろうか?

もう少し何かしらあるとは思うのだが。

そう思った次の瞬間大声が飛んできた。

「ウチは頭が悪いんだよ、お前が考えなきや意味ねーんだよ!!」  
逆切れをされる。

頭が悪いことを大げさに言われても困る。

そう思いながら苦笑いをしていた。

「悪いがそんなにオレの戦闘力には期待しないで欲しいな」

オレは一応一言断っておく。

過度な期待を寄せられても困るといなのが本音だ。

「セイバーなんだろうが、剣士って奴なんだろうが

何ビクビクした事いってんだ、ボキヤー!!」

マスターが俺に詰め寄って真剣な目をしたまま罵ってくる。

『セイバー』だから強いに決まってるといった目だ。

『剣士』なのだから弱いわけがないと思ってる顔だ。

とりあえず勘違いだということを正さないとな。

「そんな大層なもんじゃないさ」

俺はため息をついてマスターに言う。

セイバーに選ばれたからと言ってそんな顔をされても困る。

こっちは正統な条件や方法で戦うというよりも、どちらかといえば奇襲や奇策を使っ

て戦うような奴だ。

普通に真つ向勝負で戦ったら良い勝負ができるぐらいのものだろう。

もしかしたら『ランサー』や『アーチャー』に劣っている可能性もある。

そう考えれば『最優』の称号が泣くほどに切ない。

「でも、そういった差は埋めれるんだろ?」

マスターのその言葉にオレは頷く。

こちらが得意なのは個人戦よりも同盟などを組んだ団体戦であり、それがオレの真価を發揮する場面となる。

「勝ち方なんていくらでもあるからな」

これが一番自分にとって良い事だ。

裏切りや策謀といった心理戦を含めた上で戦えばいい。

殴りあつたりするだけの武の比べ合いではないのだから。

「本当か!!、一体どういう方法が有るんだ、教えてくれよ!!」

マスターが興味しんしんでオレに聞いてくる。

せっかちなマスターだと再び思う。

ほんの少しその必死な姿に笑いが込み上げてきた、当然秘密にしておくけど。

「それは始まってからのお楽しみだね」

オレは笑みを浮かべてどういった戦法をとるのか。  
どういった奴と組めば良いのか。

これから先の戦いを有利に進める為に頭を回していたのだった。

「しかし驚きよな、理性を持った『バーサーカー』とは」

我は召喚した相手を見て驚いていた。

『狂戦士』であるはずが狂わずに理性を保っているのだ。

「私の前では狂うような精神干渉は無駄だわ」

我の言葉などどこ吹く風というように言う。

狂ってないのにこれほどの力とはとてつもないな。

「規格外というわけか……我の力でどうにか出来るだろうか」

我はため息をつく。

初めから狂って居ないという事は仮に狂った場合はこれから更に力を食われると  
いう事。

今でもかなり我の体には多大な負担がかかっている。

しかし我は理解してやらなくてはいけない。

満足がなければ、納得がなければ降りたとしても誰も良しとしない。未練を残したままの脱落などそれこそ悲しいだけなのだ。

「『どうにか出来る』のではなく『する』しかないわ、勝ちたいならね」

我の声が聞こえていたのかバーサーカーが言う。

勝ち負けを最優先にするので有ればそうだ。

だが余りにもそれを求めるのは速いのではないかと考える。

「とりあえず相手のことを調べて様子見だな、無茶な事をしないのが一番だ」

その為、我は自分なりの提案をする。

ピンチになればなる程、バーサーカーは我から力を吸い上げてしまう。

仮にそれで我が倒れてしまったら洒落にならぬ出来事だ。

つまり積極的に戦ったりしては自滅の道を辿ってしまう可能性がついて回る。

それをできるだけなくすにはそういった無茶な戦いを控える事。

そのような戦いを控えればピンチになることはまずほとんどない。

何より規格外なのだ、一对一に持ち込んで戦えば十中八九勝てるであろう。

「そんなのつまらないわ」

「なっ!?!」

バーサーカーが我の言葉に反論をする。

一体今の提案の何処が気に入らないというのだ。

お互いが倒れずに勝ち抜くためには問題はなかったと思うのだが。

「私は強い、『最強』のサーヴァントよ、何が悲しくて『最弱』や『暗殺者』みたいなコソコソしなくちやいけないのよ」

これは……我は頭を抱える。

理性があるが故の我侭。

なんと言う扱いづらいものを引き当てたのか。

「それでも集中的に狙われては元も子もないではないか、だから抑えるように言っておるのだぞ!」

我はきちんとした理由を告げる。

納得させてやる為の戦い、満足させてやる為の戦いを考えれば『勝てる』ようにしてやらないとならない。

そのためこの案をいつているのだ。

「集中狙いなんて構わないわ、私に勝てる相手なんて一人もいないんだから」  
そう言つて髪をかきあげる。

一拍置いて我に話しかけてきた。

「とりあえず今日は休みましょう、本拠地まで案内してくれないかしら」

そう言つて我の目の前から霊体化する。

我はため息をつきこれから先の事を考えるのであつた。

「それでどうしたいのさ、燕さん？」

呼ばされていた呼び名を使う必要はないからさん付けで呼ぶ。

自分の心の中でだけ燕姉と呼べば良い。

「戦いのプランは有るよ、でも標的がねえ……」

燕姉が頬に指を当てて考える。

多分だとは思ふがきつと戦いを基本的に避けるといつた考えだろう、そして最後に美味しい所をもつていくと言う実に燕姉らしい戦法だ。

「とりあえず様子を見て相手を決めようかな」

ほら、思つたとおりだよ。

まあ、相手を見極めずに戦うなんてバカのやることだろう、そう考えたら様子見は今できる最善の一手だ。

考えもなしにガツガツいくなんて真似はナンセンスつてわけだ。

「で、仮に選ぶとしたら誰を選ぶの？」

相手の選択によってはこちらも考えなくてはいけない。

長距離の攻撃のない相手とかならば良い、しかし仮に持っていた時は勝手が違う。

近接距離に持ち込まれた場合の対策をこちらも考える必要があるからだ。

「うーん、今の考えでいくならばセイバーとアサシンつて所かな、キャスターとかライダーとかもなかなか面倒だからそつちでも良いかもね」

四人も候補があるのか。

しかしランサーやバーサーカーは放っておいても良いのだろうか？

そんな事を考えていたら悪い笑みを浮かべた燕姉が一番最高のプランを言っていた。

「まあ、理想としてはバーサーカーとセイバーたちが潰しあつてキャスターとアサシンが残るのが一番なんだけどね」

それを聞いた瞬間、俺も笑みが漏れた。

確かにそれがベストなプランだ。

しかしそう簡単にはいかない、だからこそ作戦の構想が重要なのだ。

「とりあえずは互いに相手のクラスが持つ長所や短所を洗い出して、こちらの有利になる状況を作り出す」



燕姉は両手を開いて悪い笑みでこれからの具体的な方針を述べる。

俺はそれに頷いて言葉を繋げる。

「そして俺がその状況から一番効率の良い戦い方をする」

相手の弱点を突くように俺が戦うことで勝率を上げる。

こういつた地味な方法を取るか取らないかだけで勝率は変わる。

「当然援護射撃は出来るときはやらせてもらおうよん」

一拍置いて心強い一言が聞こえてくる。

マスターとしても普通の奴らよりも強い燕姉の援護射撃なら、こちらに隙を作ること

はできるだろう。

「ここまで言いあえば、次は本格的な会議だね」

善は急げって事、私の家もとい本拠地へ行くよ!!」

そこまでひとまず言ったら燕姉が俺についてくるように仕草で示す。

俺は機嫌を損ねないようにすぐについていくのだった。

## 『最強対最弱』

全サーヴァントとマスターが本拠地に戻って夜が明ける。

鶏が景気良く鳴く頃。

それより遡る事、数時間。

暁の時刻からある場所の一角にその男は居た。

「やっぱり不味い……」

供給されているのは良いのだがマルギツテさんの力を必要以上煩わせる必要はない。

俺はあれから朝早くに出て行って再び人を食べている。

悪人が多いここならば喰い放題、まさに天国、桃源郷だ。

当然、味を度外視した場合に言える事だが。

気力の使い道を考えれば自然と笑みが浮かぶ。

「何故独断行動をしたのですか？」

そんな事をしていたら後ろから声が聞こえて俺は振り向く。

そこにはマルギツテさんがいた。

「下準備ですよ、地理を覚えておかなくてはいけないので」

俺は手を広げて清廉潔白を意味するようなポーズを取る。

そんな俺を一瞬見た後マルギツテさんは俺に向かって一言言う。

「戦いに関する心構えは立派だと認めましょう、しかし……」

次の瞬間、喉にトンファーがめり込んでいた。

俺は何かを吐き出すように片膝をつく。

「あなたはサーヴァントとしての自覚が足りません、これは戒めと知りなさい」

そう言つてマルギツテさんが俺を諫める。

勝つ為にやっている事なのだが仕方ない。

見られたくないからこつそりやっているがそれはマスターを危険に晒す事だ。

そう考えて俺は立ち上がる。

「申し訳ありません」

頭を下げて俺は謝る。

マルギツテさんも流石にこれ以上懇々と説教する気はなくしたのか、トンファーを

下げてこちらを見ていた。

「一体、今からどういったように過ごすのですか？」

マルギツテさんがこれからの予定を聞く。

正直な話、今からやる事は一つだけだ。

「結界の構築を始めます、まずはあの橋に行こうかと」

「なるほど、大きな拠点は必要だ、行くとしましょう」

そう言ってお互いに数分の間歩く。

少し時間がたつたら『変態の橋』に着いていた。

俺は着いた瞬間すぐに結界の構築を始める。

理想としては小型の結界を散りばめらせていき、橋自体を大型の結界へとする。

相手を閉じ込めたり自分を有利にするためには、念には念を入れておかなくてはいい  
ない。

「しかし仕事は速いですね、あつという間にこの橋が結界になるとは……」

「急な工事と変わリませんかと言うほど凄くありませんけどね」

マルギツテさんが驚きながらそんな事を言う。

しかし実態は言うほど凄くない。

せつせと作ってはいるが正直一日ではそれほどの効力は発揮されない。

これから時間をかけて気力を注ぎ込めば注ぎ込む。

そうすればするほど強い結界になるのだ。

今のこんな突貫工事の状態では目覚ましい成果を得ることはできない。

せいぜい足止め程度。

もしくは一回限りだが大きなダメージを与えるぐらいだ。

「ふむ……では本日はもうこれで終わりですか？」

「いえ、ここからまた色々な所に作ります」

これ一つでは心もとない。

まだまだ河原や『親不孝通り』の『チャイルドパレス』といった有用な建物や場所がある。

そこに作って自分の陣地を作って有利な状況を作り続ける。

当然その場所から本拠地までの転移ができるようにしておかなくてはいけない。

ちなみにこの『変態の橋』にはすでに施してある。

「とりあえず今から仕上げの工程をして『変態の橋』については今日の分は終わらせるか」

俺はそう呟いて大きな結界にする術式を描いていくのだった。

しかし次の瞬間どこかでとつともない量の『気』を感じる。

そして僅かに風を切るような音が聞こえたのだった。

私は目を閉じてサーヴァントの気配を感じ取っていた。

そして気配を感じると同時に目を開けて笑みを浮かべる。

「……見つけたわ」

私は起きた後、昨晚のマスターの言葉を聞かずに単独で行動をしていた。

目的は当然私以外のサーヴァントを殲滅する事。

そんな事を考えていた探索の中で感じた気の力。

クラスは分からないけれど紛れもないサーヴァントの気配だ。

気の力を感じた方向はおおよそ掴んでいる。

これは『変態の橋』の場所だ。

私は目的地に向かって一直線に進んでいく。

風を切り、音になり、瞬く間にその距離は詰まっていく。

「段々近くなっているわね」

近づけば近づくほどその気配は強くなる。

そしてそれから僅か数秒。

私は目的地へと到着した。

「さて、誰が居るのかしら？」

目的地についたのは良い。

しかし誰が中に居るのかを視認できない。

一体どういった仕掛けなのかしら？  
そう思つて入ろうとする。

しかしその瞬間手が弾かれる。

「これは……結界かしら？」

全く……小賢しいわね。

この程度の気力で練られた結界では意味などない。

無駄な足掻きだというのに。

力の差というものを。

圧倒的な存在だということを。

その体、その心に教えてあげるわ。

「ハッ!!」

声を発して結界を両手で抉じ開ける。

小さな結界の集合体が壊れていく。

それはとてつもなく爽快だった。

そして相手の領地に入つて一言いう。

当然その顔には満面の笑みを浮かべておいた。

「ちよつと遊びましょう」

目の前の相手が脆弱だと知りながら私は相手に問いかけた。

私の玩具おもちゃにはなれるでしょ？

ただ壊されるだけの悲しい玩具でも私の退屈は晴らしてくれるでしょ？

私は口角も上げて相手に歩み寄っていくのだった。

近づいてくる私に気づいたのか、相手は警戒心丸出しで構えていた。

俺は警戒心をむき出しに相手を見ている。

結界を破ってきた相手の言葉に対して俺は苦笑いをする。

「駄目だと言っても聞かないのだろうか？」

俺は苦笑いをしながら相手に質問を投げかける。

この力の奔流は紛れもないサーヴァントだ。

一般人でここまで至るなど一握りだろう。

「当然よ、貴方は獲物だもの」

笑みを浮かべてまるで当然といわんばかりに女は答える。

別にそれはどうでも良いのだが驚いたのはその容姿だった。

この女は川神百代と瓜二つの姿だ。



目鼻立ちだけで言えば見分けはつかない。

しかし違いは確かにあった。

髪の毛が交差していないこと。

女性特有のふくらみの僅かな違い。

ただ一番目を引くのは川神百代を凌駕する力の大きさ。

それを感じ取った時、背筋に冷たいものが走り抜ける。

これは人の形をした怪物だった。

これは人の形をした災害だった。

今からやることは化け物退治だ。

俺は全力で戦う為に八極拳の構えを取った。

「身構える必要なんてないわよ」

「はあっ？」

こちらが構えた瞬間に変なことを女は言い出す。

俺は一瞬間の中で疑問符が浮かぶ。

こいつは一体何を言っているのだ？

気づけば俺は素っ頓狂な声を出していた。

「だってすぐに貴方は消えるんだから」

そう言つて女は駆けて来る。

速い。

風を切つて押し寄せてくる。

こちらが見ているのは残像だろうか？

そう考えている時には相手は懐に居た。

「くっ!!」

拳が当たるのを感じる。

とてつもない衝撃だ。

衝撃が背中を突き抜ける前に俺は後ろへ飛ぶ。

だが想像以上だった。

衝撃が体中を震わせる。

後ろへ飛んだ後に転がって地面へと逃がした。

八極拳を使う暇さえもあの一瞬にはなかった。

「なかなか上手じゃない」

こちらの必死な状態を見て笑う女。

俺は相手の強さに苦い笑みをこぼしながら苛立ちを胸に募らせていた。

「随分と上から目線だが……足元見ないとつまずくぜ」

ゆらりと立ち上がって俺は言う。

相手の態度に一言物申すがそれはどうでも良い。

正直な所少しでもさっきの攻撃の痛みを抜いておきたいのだ。

「貴方が弱いだよ、だから下に見られるの」

この女……こちらが弱いからいけないと思っっているのか？

お前の目線での評価なんて参考にはならない。

災害に評価された所で意味なんて有るものか。

「才能がないからここまで差がつくのよ、悲しい人」

手を開いたり閉じたりしながら女が言う。

俺はその言葉に疑問を抱いた。

才能って言うのは誰にだってあるものだ。

でもその大小は俺たちでは操作できない。

それを補う為に自分の中にある才能を最大限に引き出すために努力をする。

ただお前の才気があまりにも大きくて他人の者が小さく見えるだけの話だ。

この女の才気に俺の才気が劣るのは認めよう。

それはいまさら考えても覆しようのない事実だ。

だが……

「俺を舐めるんじゃねえ!!」

怒りの叫びと共に踏み込む。

その踏み込みでわずかに橋が揺れていた。

相手との距離が詰まる。

腕を伸ばせば届く距離だ。

その間合いで息を吐く。

気は練られて一撃を叩き込む準備ができる。

繰り出された女の拳を逸らす。

その距離で更に強く踏み込む。

「『裡門頂肘』!!」

一気に気を爆発させるように肘を突き出す。

そして大きな声と共に気合を入れた一撃を放った。

しかし手応えは感じられない。

何故だ?

何が起こった?

その答えは目の前に有った。

そこには俺の『裡門頂肘』を片手で受け止めた女が居た。

「所詮貴方はこの程度なのよ」

そう言つて女が動く。

俺の肘から手を離される。

腰が捻られて少しずつ体が逆方向へとむいていく。

そして一気に速度を乗せた一撃が放たれる。

気づいた時には目の前に拳が有つた。

「ガッ……」

俺は裏拳をくらい吹き飛ばされる。

頭がぐわんぐわんと揺れる。

それでも俺はゆっくりと確実に立ち上がる。

そして笑みを浮かべてどんなもんだと視線を送る。

しかし想いとは裏腹に膝がぐくぐくと笑っていた。

対峙するのは『最強』と『最弱』。

始まりの戦いはあまりにも兵力差を感じさせるものだった。

そして同時刻、別の場所でもう一つの戦いは始まっていた。

## 『エマーゼンシーコール パターン：MOMOYO』

これは『最強』のサーヴァントと『最弱』のサーヴァントが戦った同時刻の戦いである。

「美女がここに居るってのは良い……」

俺は口の中を感じる違和感を取り除くために、口をもごもごさせて一拍置いてから地面に吐きだした。

そこには血が混じっている。

ちっ……口の中切れてーら。

「その美女に似合わない暴力的な野郎が連れとは……紳士じゃないとモテないぜ？」

そう言っただけが目の前にいるお兄さんを睨みつける。

まあ、相手さんは俺に良い印象なんて抱いてないだろうな。

何せ初対面で連れの女性をナンパするような奴だ。

そんな奴に良い印象を持ったなら、そいつは特殊な感覚の持ち主だ。

するとお兄さんは指を豪快に鳴らしながら……憤怒の表情むき出しでこう言ってきた。

「人の女に色目使うのが悪いんじゃないかねえのかよ……クソツタレが」

言いたい事は言えたのか、勝手に構え始めた。

ん？……これどっかで見たこと有るな……

確かワン子ちゃんと一緒に川神流じゃないか？

「決めさせてもらうぜ、川神流奥義『大蠍撃ち』!!」

「ちっ!!」

俺は前転をして避ける。

懐に潜り込む、そして顔面めがけてカウンターを叩き込む。

手応え有りだ。

しかし次の瞬間大きな声が聞こえてきた。

「効くわけ無えだろうがあッ!!」

耳に響く、やかましい奴だな。

カウンターを受けても相手は怯まずに攻撃を放ってくる。

これは流石に俺も苦笑いをしてしまう。

とりあえずは距離を取って体勢を立て直してみるか……。

始まりは他愛のない散歩からだった。

亜巳と一緒に歩いていたらいきなり前を歩いていた男が、軽薄そうな声で亜巳に話しかける。

そして手を引いて行こうとしたところに横つ面を殴ってやった。

それが戦いの始まりだった。

「ダメエよ、さつきから調子に乗りすぎだ」

距離を取った相手に俺は攻撃を放っていく。

川神院の奥義もその中には入っている。

相手もひよいひよいと避けていく。

「さつきからちよこまか、ちよこまかと……ッ」

イライラしてくるがそこは抑えなくてはならない。

深呼吸をして一度落ち着く。

「一気に潰すッ……オラアアア!!」

足に力を込めて踏み出す。



ちよこまかと動いていた奴の顔が近い。

俺はその顔面に向かって奥義を繰り出す。

「川神流奥義『無双正拳突き』 ツ!!」

腰を捻り火の噴くような一撃を繰り出す。

「くっ!!」

男の奴が後ろに下がるが無駄だ、俺の方が速い。

再び踏み込んで拳を振るう。

「逃がしてもらえないなんざ、思ってたんじゃねえぞ!!」

そう言つて拳を振るつた瞬間。

男の奴が俺の拳を避けていた。

そして目に映つたのはカウンターを叩き込もうとする拳だった。

「何……速くなつただとツ!」

俺は後ろに下がって距離を取つた。

相手の動きが心なしに速くなっている。

追いつける速度だったはずが一瞬の間にカウンターを取られそうだった。

「はあ……驚いてしまった訳だが……まあ、他にも俺には俺の戦い方つてもんがあんだよ」

速さで決着をつけようとしたミスは確かに危ない。

亜巳に愛想を尽かされるかもしれない。

亜巳の機嫌を損ねたらそれこそ俺の戦いが終わる。

何故かそんな予感がする。

「随分とまあ味な真似をしてくれたじゃねえか、ええ？……こいつで終えだしめ」

俺はそう言つて気弾を放つ。

威力は抑えて速度は速くする。

あの男にに手痛い一撃を食らわせるためには欲張つてはいけない。

「おっと!!」

男の奴が笑いながら飛び上がる。

飛び上がったことで気弾を避ける。

しかしその瞬間、俺は笑みを浮かべていた。

「こいつを待つてたんだ!!、いけやあ、『リング』ウ!!」

俺は今出せる最大奥義を放つ。

良い速度と角度で舞い上がっていく。

確実に相手を捕らえたという手応えがそこには有った。

「ぐあああああ!!」

空中で動けない男に直撃する。

大きな爆発を起こす。

煙を上げながら男の奴が落ちていく。

これで勝負は決まった。

そう思っていたのだが次の瞬間俺の背筋に恐ろしいものが駆け抜ける。

薄ら寒いものと何かしらの嫌な予感が体を包む。

煙が晴れるとき俺はその薄ら寒いものの正体を身をもって知るのであった。

こちらに相手の大技が直撃したのは危なかった。

一瞬だったが意識が遠のいたぞ……。

しかし俺の往生際の悪さが意識を繋ぎ止めてくれていた。

「良い隠し玉持つてるじゃん」

首をコキコキと鳴らして相手を見る。

相手は煙から俺が出てくるとは思っていない。

何故ならば見事にあの攻撃が決まったと思っっているから。

それはやってはいけない事だけ。

「それじゃあ行くかねエ!!」

俺は駆け出す。

狙いは煙の方向。

そこから出ることでお兄さんの動揺を誘う事が出来るだろう。

「しゃあああああ!!」

「なっ、どうやって!?!」

咆哮をあげて煙の中から俺は勢い良く出る。

すると案の定お兄さんの驚く顔がうかがえた。

ザマー見やがれ。

構えてはいるものの驚きで僅かに反応が鈍ったのは問題だったな。

「警戒するにせよ……そうあからさまに驚いちゃいけないぜ!!」

一時的に筋力を増強して攻撃をする。

さつきは脚力を上げたがこの距離ならばデメリットによる能力減退も関係ない。

「はあああつ!!」

雄叫びと共に攻撃を絶え間なく繰り返す。

左肘撃ち。

右正拳突き。

左上段蹴り。

右下段蹴り。

左手刀。

右前蹴り。

右肘撃ち。

左中段蹴り。

右上段蹴り。

左下段蹴り。

左正拳突き。

右中段蹴り。

数える事、実に十二回の攻撃。

火の噴くような一撃一撃。

さらに目にも止まらない連打。

それを相手に撃ち込む。

お兄さんはじわりじわりと後退をしていく。

俺は仕返しとばかりに大技を放つ。

飛び上がって体を捻り、顔面に向かって勢い良く蹴りを出す。

飛び後ろ回し蹴りという奴だ。

足が顔面にめり込む。

ハッ、変な顔だ、笑ってやろう。

なかなか爽やかな音が聞こえる。

そしてその勢いのまま足を振りぬく。

お兄さんはそのまま地面を滑るようにして倒れこんだ。

流石にこいつは効いただろう。

そう思ったが……次の瞬間余りにも恐ろしいものを目にした。

「はあっ!!」

背中から飛び上がるようにして起き上がるお兄さん。

まるで痛みを感じていないかのように平然と立つ。

先ほど俺がしたように首をコキコキと鳴らしてこつちを見る。

その顔には僅かに笑みが浮かんでいた。

まだまだこれからだというように。

今までなんてウオーミングアップなんだというように。

俺はそれを見て……

全く面倒な相手だと思った。

普通ならここいらで引けば良いのに。

そつちが売った喧嘩なんだとしても降りれば良いのに。  
変な意地を張らないで倒れておけよ。

すると唐突に何かしらの気配を感じる。

俺はその気配を察知して振り向く。

向かい合っていたお兄さんもその方向を注視していた。

風きり音がけたたましく聞こえてくる。

確実に近づいているのが察知できたのだった。

私はジジイから聞いていたことなど完全に無視をしていた。

聞いた所によると、強い奴らが七人もこの川神に現れて争うというのだ。

ジジイは無関係だから首を突っ込むなと口うるさく言っていたがお構い無しだ。

しかしそんなものを聞けば私の戦闘衝動が疼く。

ただこの衝動を止めようとは思わない、それが自分の性分だからだ。

何処に居るのか気を察知していたら丁度大きい奴が二つあった。

一応橋の方にも気は有るようだが大きさがいまいち分からない。

何かしら妙な細工が施されているのだろう。

気の察知を乱す細工ができるというのも驚きだな。

仮に察知できなかったほうが小さかったならば意味がない。

私は二つの大きな気の方へと向かって行った。

風を裂いて。

音になって。

一刻でも早くその場所を目指す。

景色がめまぐるしく変わっていくのも良い心地だ。

「お前ら……私も混ぜろよ」

およそ僅かの瞬きの回数でその場所へと私は到着するのだった。

満面の笑みで私はその男達二人に向かって言葉を発していた。

・  
・

現れた存在を見て俺はため息をつく。

お兄さんの方も頭に額を当てて嫌な顔を浮かべる。

「マジかよ……」

「そいつは勘弁だつて」

俺とお兄さんが二人してやめてくれと、懇願するような声色で言葉を発する。



せめてこの戦いに参加しているバーサーカーとか言うのなら納得は出来る。だがこいつはダメだ。

サーヴァントですらない存在じゃないか。

それは自然災害と思われている女。

それは人間ではないであろう女だった。

流石の俺もこいつを良い女と思える自信が今は無かった。

構えて最大限の警戒をする。

いつこちらを攻撃してくるか分からない。

そして俺は苦笑いを浮かべるのだった。

流石にこれは予想外だと心の中で思った。

二人が苦笑いを漏らす理由。

それは流星と見まがうほどの速さでこの地へ降り立ってきた存在であった。

この聖杯戦争において最悪の不確定要素。

『武神』川神百代。

その強さは人ではなく自然災害として数えられる。

今『最悪』の場所が二つ出来るのだった。

## 『王と爆発』

「ハア……ハア……」

あれから何分経っただろう。

体の節々が痛む。

息をすることさえも辛い。

防御結界を張れば拳で破られて。

こちらの一撃は軽々と受け止められる。

相手はつまらないと言ふような顔でこちらを見ていた。

「もうお終いかしら?」

手を振りながらいつてくる女。

速く来いと催促するように。

全部の力を出せというように。

それを完膚なきまで打ちのめしてやるといふ目をしてる。

「うがああああ!!」

吼えて進んでいく。

馬鹿の一つ覚えのように。

ただ愚直に、真っ直ぐに踏み込む。

それしかないのだ。

目指すところは懐。

相手の中心。

そこだけ狙う。

例えこの体が朽ちるとして。

例えこれから先戦えなくなるとして。

それだけは決して変わらない。

「よく吼えるわ、それこそが弱い証拠よ」

再び片手で受け止められる。

そのまま地面に叩きつける。

首が締め付けられる。

「もう飽きたわ……」

冷たい目で言い放つ女。

ごりごりと音を立てていく。

段々と頸動脈が閉まる。

血の巡りが悪くなり視界が白くなる。

「消えなさい」

最後に見える景色が青空となるのか。

嫌だと思つてももはや体が動かない。

このまま静かに朽ちるだけだ。

俺は目を閉じて空を見ることをやめた。

しかし次の瞬間拘束が緩む。

何故かは分からない。

足音が聞こえる。

その方向へと首を向けるとそこに居たのは二人。

その内の一人は傲岸不遜に微笑む男。

そしてもう一人はバンダナを付けた男……風間翔一だった。

風間の奴が橋の所で面白い事が起こっていると云っていた。

その理由は勘などというまったくもってわけのわからないものだった。

しかしこの寛大な王は<sup>オレ</sup>その言葉を聞き入れてやった。

これでも何も無ければありとあらゆる罵詈雑言をこいつに向かつて吐いてやろうと決めていた。

しかし着いた時に目の前に映っていたのは言葉通りの場面であった。

ただ王としては面白みなどなかった。

髪の毛が馬の尻尾みたいになつた奴が一方的に鬻られている。

見たところ鬻つているやつは王をとてつもなく不快にさせる女と瓜二つな奴だった。

こういつた鬻つたりすることはこの王の専売特許だ。

「貴様オレとオレときがこの王を差し置き一番首をとろうなどおこがましいわ」

王は手を前にやりその女を吹き飛ばす。

倒れていた男は息も絶え絶えにこちらを見る。

普段ならば慈悲をくれてやる所だが気が変わった。

今は目の前の女へ償わせるのが先だ。

あの女と瓜二つというだけでも反吐が出る。

あやつはこの王が殺さねばならん。

一度の死では生ぬるい。

この王の怒らせた価値は万死に値する。

「塵芥よ!!、この王の力、とくと思い知るが良い!!」

そう言つて我はただ緩やかに。

威圧感を体に漲らせて女の方へと向かつていく。

女はその緩やかな動きに合わせて動く。

当然のごとくすぐに追いついて王オレの顔めがけて拳を振るう。

しかし王オレは掌を向けて女に向かつて気力の衝撃波を出す。

女は吹き飛ばされそうになるのを堪える。

王オレとしてはその動作で産まれる誤差の分だけあれば十分であつた。

「先刻の奴と違い反動を有効活用したのだ、それに気づかんとはな!!」

衝撃波の反動で女から距離を取る。

攻撃が当たらずに苦い面をする。

愉快なものだ。

おおよそ簡単に勝てると思つていたのだろう、愚かな女だ。

あの倒れていた塵芥と王オレを一緒にするな。

近接が得意な奴は無茶をする。

しかしこの王オレは遠距離が得意だ。

無茶などしない。

いつも勝利の道を考えて緻密に繰り出す。

その過程で敵の苦痛に歪む顔を見て楽しむ。

そして最後はこちらが満面の笑みで勝利を掴む。

当然その笑みには相手を見下したような視線と苛立たせる雰囲気も加味されている。

「くっ!!」

相手が怒りをむき出しにこちらへ向かってくる。

愚かな事だ。

そんな足場にも気を使わぬ馬鹿な攻撃、風間でもできるぞ。

「跪け、女!!」

地面の方へと衝撃波を放つ。

地面にひびが入り女が躓く。

女は丁度片膝を付き王オレに傳く形となった。

「はあっ!!」

王はその傳いた位置にあつた顔に向かつて衝撃波を放つ。

睨みつける視線が気に入らぬ。

女が景気よく吹き飛ばされたのを見て笑みがこぼれる。

そして追撃の一撃を放とうとした次の瞬間であつた。

「むっ?」



一瞬体に違和感を感じる。

体が少し重くなつたような程度 of 感覚。

その理由を王はすぐに解明していた。

「いかな、氣の消費が激しすぎた」

王は反動による勢いが無くなつてきている事に気づいた。

今まで反動を活かして避けてきたが次は無いだらう。

多分追いつかれて手痛い一撃を見舞うことになる。

後退する際にこの女の速度を考慮して衝撃波を大きくしてきたのだ。

それが知らず知らずのうちに消費する理由になつていたのであらう。

どうすれば良い？

このままではいずれ手痛い一撃を喰らう。

そうなれば機能が大きく低下するのは免れない。

そんな事を頭の中でぐるぐると考える。

すると倒れていた男が立ち上がり王のそばに歩み寄つてきた。

そして王の前で屈辱的な言葉を一つ呟いたのであらう。

「流石に逃げた方がいいんじゃないのか？」

俺はそう提案する。

理由はとても単純だ。

俺もこの男も限界が近い。

本来ならば一緒に逃げるメリットなんてものは無い。

しかし俺は助けてもらった。

脱落しそうな所を、まさに危機一髪の状況から助けられた。

この男からすればただの気まぐれだったかもしれない。

しかし一度そういう事をして貰ったということは返さなくてはいけない。

ただ、その提案をしたときの男の顔は凄まじいものだった。

正直背筋に冷たいものが走り抜ける。

自分のプライドとこの状況の危険度を天秤にかけている。

そして一拍置いた後に男は俺にこういつてきた。

「貴様の言うとおりに逃げるのではない、その逆だ

奴を逃がしてやろうではないか、寛大な処置をするのもまた王の素晴らしい所よ」

とりあえずここから退却するってことで良いんだな。

「じゃあ……やるか、せつかく作つたのに一日経たずに壊すってなんか嫌だけどな」

俺は詠唱を始める。

結界に一気に気力を送り始める。

結界の要領が越え始めているのを感じ取る。

これで準備は完了した。

後はあいつに追いつかれないように橋の出口に向かうだけ。

「さて……追いつかれるなよ」

「誰に向かつて言っている、貴様ごときに心配される王<sup>オレ</sup>ではないわ!!」

お互いに言葉を言い合って男と俺は走り始める。

相手の気配がじわりと大きくなってくるのを肌で感じる。

生死を賭けた追いかっこが始まる。

「許さないわ、叩き潰してあげる!!」

怨嗟と怒りの入り混じった声で追ってくる。

速いのは認めるが……

「この状況で俺たちに向かつて一直線に突っ切ってみるよ!!」

俺はそう言っ指を鳴らす。

すると大気がうねる。

結界が光り次の瞬間……

「ぐわっ!!」

爆発を起こす。

炎と爆風で更に距離が開く。

それに振り向くことなく何度か何度も爆発させる。

延々と走り続けて出口に辿り着く頃には煙がもうもうと立ち上っていた。

「最後に大きな花火だぜ!!」

そう言つて指を鳴らす。

すると出口を除いた橋全体が光り始める。

次の瞬間、橋を結界にしていた術式が発動して大爆発を起こした。

橋は壊れずに済むがとてつもなく気力を食う大技だ。

せつかく今まで食べてきた奴の分までお釈迦になつてしまった。

俺は速くしなくてはいけないと思ひ橋の出口で男を抱える。

キヤップとマルギツテさんもそこには居た。

マルギツテさんは今からする事が分かつたのかうなづく。

キヤップもその顔を見て微笑んでいた。

「今から二人とも俺たちの本拠地に来てくれ」

「なつ、貴様!! この王に気安く触るでないわ!!」

その反論も効かずに俺は本拠地へと転移する。もはや男もここまでできたら抵抗もしなかった。

最後だけ女の睨む視線が見える。

俺と男はざまあみろという顔でその顔を見返していた。

そして僅かに感じた視線の方向に向かって睨み返すのであった。

誰かに見られた感覚はあるがさっきの大爆発を思い出す。

「あんなの有りかよ……」

あの橋全体を結界にして爆発させる。

規模がでかすぎる。

あれに巻き込まれたら俺では勝てる気がまるでしない。

しかし後ろを振り向くと燕姉はなにかしら淡々とノートに書いていた。

「あの大規模な爆発から考えて結界と予測

つまりあのポニーテールのサーヴァントは『キャスター』と仮定する

そして途中乱入していた少年はきつと消去法から『アサシン』でしょ」

燕姉は対戦相手の情報を逐一まとめていた。

その速さにはやはり感心してしまう。

「しかしこれで大概相手の情報が割れたね

そして主な攻撃についても分かった

キヤスターが『八極拳』

アサシンが『衝撃波』だ」

「そしてそれを相手取れるのはきつと『バーサーカー』だね」

俺が戦い方について言うのと燕姉がああ煙に包まれたサーヴァントを推理する。

これで今日一日だけで俺達は自分たちを含んだ四騎のサーヴァントの情報を手に入れた。

戦って肌で感じるのも良い。

でもこうやって作戦を立てて自分たちの戦い方を良く知った上で相手を選ぶのも決して悪くはない。

勝ちたければいかにずるく、賢く、強く見せるかだ。

相手を油断させた所で首を取るのもこの戦いでは正当化されるのだから。

「次からは弱点ついてこずるく楽しくやっていくよん!!」

燕姉が窓から見える月に向けて呟いていたのだった。

## 『逃亡を見つめるは虎の双眸』

これは別の所の戦いである。

川神百代の襲来からある程度の時間が経過していた。

「この……女ツ、なめてんじゃねえぞ、クソがあツ!!」

俺は女に向かって攻撃をする。

さっきまで男とやりあっていたせいで疲れが全身に回ってくる。

「いい女だがこいつは少々いただけじゃないぜ」

男の方も俺と一緒にになって女へ向かっていく。

お互いにそれほど深刻なダメージは受けていない。

だがそれも時間の問題だ。

「どうしたどうした、二人がかりでこんなものか!!」

俺達の攻撃を受け止めて笑いやがる。

舐め腐った態度しやがってツ、だったらやってやらあツ!!

「喰らえってんだツ! 『リング』ウ!!」

さっきの男とは違っていきなりぶっ放す。

小難しい事なんざやめだ。

そのむかつく笑顔を歪ませてやんよッ!!

「これは釈迦堂さんの……くっ!!」

後ろに下がって『リング』をやり過ごす。

そんなんで俺から逃げると思ってたんじゃねえぞッ!!

「倒れろやア!!」

腹に一撃をぶち込む。

良い感覚だ、腹の中身が持ち上がって手応えがある。

「もう一丁おおっ!、齒ア食いしばれよっとおおッ!!」

こめかみに蹴りを放って蹴り飛ばす。

勝手に乱入したんだからしつかり痛い目にあってもらわねえとな、割りにあわねえんだよ。

「くそっ、星ごろ……、がっ!!」

「撃たせる訳が……ねえだろうがよオ!!」

大技を撃つ暇も与えてやらねえ。

こつちが不利になるような真似なんざするかってんだ。

「川神流奥義『致死虫』!!」



女がかなりの数の光弾を放ってきやがる。

それを捌いていこうとした瞬間俺の手を女が掴んでいた。

「貰った、川神流奥義『人間爆弾』!!」

そしてそのまま手を掴んだ状態で女が爆発する。

当然俺も巻き込まれる。

吹き飛ばされて一気に戦況が変わる。

自爆して自分は回復ってただの範囲攻撃じゃねえかよ。

「さて……まだ終わってないぞ」

女が良い笑顔でこちらを見ってくる。

当然構えは崩さずに力を漲らせている状態だ。

こっちは痛くもない技を喰らっているんだ、まだまだやれるぜ。

俺も構えて次の攻撃に備える。

それはそうとあの男はさつきから何やってんだ？

そう思っただけ振り向くと男は距離をとって、面倒だというような面してやがった。

そしていきなり虚空に手をかざして何か呟き始めていた。

「これ以上は付き合つてらんねーわ」

俺は宝具の開放をして逃げることを決意する。

正直お兄さんは見捨てたいんだけど……あの綺麗なお姉さんはほっとけない。

残念だけど主従関係だから両方助けなきやならない。

それにだ、仮にお姉さんが泣いたら目覚めが悪くなつちまう……フェミニストなんだ俺は。

「唸れよエンジン、廻れよ車輪、振り切るは女王が如く優雅な姿なり

その紅き美貌にて眼を奪え、怪物も青ざめる速度にて震え上がらせよ

今、此処に馳せ参じろ『紅の女王』!!』

俺がそういうと何処からともなくバイクが現れる。

今日も調子が良さそうじゃないか、女王様。

なお、その間にお兄さんは川神百代と戦っていた。

ほぼ互角に渡り合っている時点で色々とおかしい。

一体もう何が何だかわからない。

何？ あのお兄さん川神の血筋でも引いてるのか？

「まっ、逃げちまえば良いんだけどね」

そう言つてエンジンをふかす。

よし、良い音だ。

あつという間に準備ができる。

予想通り今日も女王様は絶好調、フイーリングも最高だ。

あとは振り切れたら万々歳つてとこだ。

「乗れ、ワン子ちゃん!!」

その言葉を聞いたワン子ちゃんは急いで乗った。

流石に緊急事態だと感じ取ったんだろう、良い判断だね、花丸あげても良い。

「あんたも逃げたほうがいいぜ、乗りな」

お姉さんにも呼びかける。

こんな事態なのだから、さっきまで敵だったとかそういうのは関係無し。

それに美女をほっとくなんて選択肢は俺の中にはない。

「あんたの言う事なんて聞くもんかい、放つて置いておくれよ」

俺はその言葉に対して悪い笑みを浮かべる。

拒絶の言葉なんかで俺を止める事なんて出来ねえよ、実力行使させてもらうぜ。

「乗らないなら無理やり乗せる、弾丸ツアーに一名様追加でのご案内だ!!」

お姉さんを抱えるように持ち上げてバイクの後ろに乗せる。

肌触りもGOODだね。

こりやあますます良い女だ。

「離しな、変な所触ろうとすんじゃないよ!!」

お姉さんが暴れる。

そんなに暴れるとそれを理由に色々と触っちゃうぞー。

もがくお姉さんなんかどこ吹く風だ。

俺はお兄さんに大声で呼びかけた。

「お兄さん逃げようぜ、マスターは回収してっからよ!!」

そう言うとお兄さんは苦い顔をしながら霊体化をする。

一瞬だけ川神百代の顔がこわばる。

ザマーみやがれ。

俺がハンドルを捻ると『紅の女王』が一気に加速をする。

勢いよく走っていき川神百代との距離を開ける。

俺達は紅の弾丸となっていた。

しかしこんなところで諦める武神じゃない。

当然のように川神百代が追いかけてきた。

風を裂く音がもう一つ聞こえる。

少しづつ近づいてくるのが肌で感じられる。

この速度についてくるとか……これは流石に笑えない。

怪物だろうけど流石に度が過ぎるぞ。

そんな事を考えていたらお兄さんが実体に戻って何かを呟き始めた。

「『私は強き者、汝の気力を、汝の異能を強き眼差しで封じる者

汝に与えるは重みなり

汝重みにてわが眼前に跪け

汝畏まりて我に一慄くおののけ

弱きは朽ちて強きは退く、我が眼光から逃れる事叶わず

『一強者の畏怖くプロヒビテッド・エリアへ』!!』

一気に川神百代の動きが鈍る。

それにあれだけ溢れていた気が感じられなくなってきた。

ん……恐らくお兄さんは川神百代の『気』を封じたんだな。

これならば問題なく振り切れる。

更に速度を俺は上げ始めていた。

「このままなら振り切れるな……しかしなんだかむず痒い感覚があんなあ？」

なんか今視線を感じたんだが……気のせいかなええ？

一応感じた方向に視線を向ける。

気のせいならいいがちよつと薄気味悪りーな。

双眼鏡で見られていた事に気づいたのか一瞬こつちを見ていた。

「勘が良い奴だな、アイツ……」

相手の視線を感じてオレは言う。

「バイクって事はアイツって『ライダー』なんじゃね？」

「正解だ、マスター」

宝具を見て分かったのかマスターが呟く。

更に付け加えるのであればあのもう一人の男の方は『ランサー』だ。

理由としては白兵戦の強さと速さから推理が出来た。

ちなみに当然の事だがマスターも双眼鏡を持っている。

それによつて橋の方向を見てもらつていた。

『ライダー』と『ランサー』が逃げる際に大きな爆発音と煙が上がったのをマスターは確認していた。

あんな大規模な事をやる馬鹿が居るとは正直予想外だった。

しかしそのお陰で『ランサー』と『ライダー』以外に『キャスター』の存在が確認できた。

地味にこれは大きな事である。

「しかしまあ……仮定した場合あと一人今回闘いに参加していない奴が居るな」  
きつと自分たち以外にもこういつた傍観を決め込んだ相手は居た筈だ。

そう思つて双眼鏡で色々くまなく見て居たら、予想通りノートを取っている男女が居た。

間違ひなくアレは俺たちと同じ様に傍観をしていた証拠だ。

そうじゃなければあんなところで別の方面をジロジロを見るわけがない。

ましてや研究してますよといわんばかりの行為だったらバレバレだ。

おおよそ自分たちだけが傍観していると思つていたんだろう。

それは甘い考えだ。

お前らと同じ考えを持つ奴つて言うのはきちんという。

「情報を掠め取らなきや勝てるものも勝てなくなるぜ」

オレはそう言つて微笑む。

戦つて調べるのも悪くはないが正直それは博打だ。

そんな無茶は強い奴らに任せれば良い。

「で、これからどうすんだ？」

マスターがオレに聞いてくる。

そうだな、これからの予定としては……

「ランサーが一番まだやりやすいかもね」

白兵戦で気を使えるあたり凄いやと思うが弱点がある。

見ている感じが攻撃のペース配分が下手なのだ。

大技だつて気弾の予備動作がなくても当てる方法があつただろう。

それに何処かしら余裕を出していたのが分かる。

最初にカウンターを取られそうになっていたのが良い例だ。

ライダーは普通に面倒だ。

速くなつたり、攻撃の威力が上がつたり、耐えられる様になつていたりと途中途中おか

しなほどの動きを見せていた。

スキルによる一時的な増強なのか、手を抜いて戦つたりしていたのか？

川神百代との交戦では増強を上手く出来なかつた所を見れば多分前者の方だろう。

それらを踏まえたらランサーの方が幾分かはやりやすい。

「そうか、マスターは亜巳姉だけど、別に亜巳姉を狙うわけじゃねえもんな

それならウチだつてやってやるぜ!!」



マスターは元気よく言う。

まあ、確かにマスターを延々と狙うわけではない。

できるだけサーヴァントを効率よく倒すのが目的だからな。

「とりあえず今日の所は戻って……騒がしくなりそうだな、マスター」

オレはこの後の家の中を想像すると笑えてしまう。

只でさえ人が多いあの家に二人も増えるんだから。

まあ、サーヴァントが全員霊体化すれば一人だから問題ないか。

オレは頭をかきながら立ち上がってマスターと一緒に家に向かうのだった。

# 『プロフィール』

名前： たちばな 立花 とらのすけ 虎之助

登場作品：『真剣で私に恋しなさい！S』  
『西方恋愛記』  
作者：youkeyさん

年齢： 16歳

誕生日：2月22日 うお座

血液型： B型

身長： 168cm

体重： 65kg

一人称：オレ

あだ名：トラ

職業：天神館2年1組

好きな食べ物：バターたっぷりのホットケーキ

好きな飲み物：川神水的なノンアルコールの芋焼酎のようなもの（一杯で酔いつぶれる）

趣味：虎グッズ集め

特技：奇襲

大切なもの：大友 焰

苦手なもの：ライオン 高貴な威光

天敵： 国吉灯 黒月龍斗

尊敬する人：祖父

クラス：セイバー

パラメータ：

筋力：C 耐久：C 敏捷：B 気力：E 幸運：E― 宝具：C

クラス別スキル

『対気力』：E

気の攻撃に対する抵抗力。

一定ランクまでの攻撃は無効化し、それ以上のランクのものは効果を削減する。

サーヴァント自身の意思で弱め、有益な力を得る事も可能。

なお、気力によって強化された武器や、気力によって作られた武器による物理的な攻

撃は効果の対象外。

また彼自身が上手く気力を扱えないのでセイバーとしてはありえない低さになっている。

『騎乗』：B

様々な乗り物を乗りこなす技能。

Bランクで魔獣・聖獣ランク以外を乗りこなす。

その勇敢な操縦はまさに『タイガー』。

スキル：

『先制攻撃』：C

戦闘で先手を取る技能。

彼の場合は奇襲、不意打ちの成功率が向上する。

『花火職人』：B

火薬の取り扱い、及び花火作成の適正。

このランクならばすぐにでも現場で働ける。

『援護技能』：C

共に戦う仲間を支援する能力。

このスキルのランクが高ければ高いほど、仲間はステータス以上の能力を発揮でき

る。

しかしその反面自分は個人戦で実力を発揮できなくなってしまう。

宝具：

『えんしゅうこてつ洲虎徹』

ランク：C 種別：対人宝具

折れず、曲がらず、よく切れる。の評判を受けて破壊不能の概念を得た刀。

刀作りの伝統も、芸術性も持たない正真正銘、人斬りのためだけに作られた刀であるため、人間に対して攻撃力が向上する。

名前：黒月くろつき 龍斗りゅうと

登場作品：『真剣で清楚に恋しなさい！』 作者：ユニバースさん

※現在は暁の方で連載しております。

年齢：16歳

誕生日：8月18日 しし座

血液型：O型

身長：178cm

体重： 69 kg

一人称：俺

あだ名：龍斗 龍斗くん

職業：高校生

好きな食べ物：そば 魚介類

好きな飲み物：炭酸水

趣味：機械弄り 項羽弄り

特技：家事全般 燕ほどではないが器用さを要求されることなら割となんでも

大切なもの：葉桜清楚（項羽）

苦手なもの：納豆

天敵：松永燕（精神的に） 無理やり納豆を食べさせてくる人間 立花虎之助

尊敬する人：自分が認めた人は割と誰でも

クラス：アーチャー

パラメータ：

筋力：B 耐久：D 敏捷：B 気力：E 幸運：C 宝具：C

クラス別スキル：

『単独行動』：C

『アーチャー』のクラス特性。

マスター不在・供給なしでも長時間現界していられる能力。

マスターがサーヴァントへの供給を気にすることなく自身の戦闘で最大限の力を使うことができる。

あるいはマスターが深刻なダメージを被りサーヴァントに十分な供給が行えなくなった場合などに重宝するスキル。

反面、サーヴァントがマスターの制御を離れ、独自の行動を取る危険性も孕む。

Cランクならば1日の現界が可能。

『対気力』：D

気の攻撃に対する抵抗力。

一定ランクまでの攻撃は無効化し、それ以上のランクのものは効果を削減する。

サーヴァント自身の意思で弱め、有益な力を得る事も可能。

なお、気力によって強化された武器や、気力によって作られた武器による物理的な攻撃は効果の対象外。

スキル：

気の運用：A+

気を効率的に使う技術。

。 気力のランクを大きくカバーして大技であつても二回までならば基本的に使用できる。

心眼（偽）：B

直感・第六感による危険回避。

虫の知らせとも言われる、天性の才能による危険予知。

視覚妨害による補正への耐性も併せ持つ。

宝具：

『つくもなす九十九髪茄子』

ランク：C 種別：対人宝具

気を溜める事が出来るバングル。

そこから溜めた分の気までなら引き出すことができる。

貯蔵する速度は速く一日の間で最大奥義『四神』を使用可能とする。

白虎ならば四回分、朱雀なら二回分、青龍は六回分、玄武は十回分。

それぞれ使うとなればその分運用は難しくなる。

朱雀が一回、白虎も一回、また青龍も一回分程の量までが限界。

なお、これはマスターの気の供給で補うこともできるが、膨大な量のため微々たるものである。



『逆賊の最期』  
ラスト・リベリオン

ランク：B 種別：対軍宝具

自らの宝具を壊すことによつて残りの貯蔵気力をすべて使い増幅させ、一撃限りの光線を放つ。

この技はマスターからの気の供給は使えないので、威力は残つた貯蔵気力に大きく影響される。

これを使つてしまうとスキルである『気の運用』は気力のパラメータがEのため、マスターからの気の供給なしでは意味をなさない。

名前：藤井 戒  
ふじい かい

登場作品：『真剣で強者に恋しなさい!』 作者：うなぎパイさん

年齢：No Data

誕生日：No Data

血液型：No Data

身長：182cm

体重：87kg

一人称：俺

あだ名：アズマ

職業：学生

好きな食べ物：ガリガ○君

好きな飲み物：梨系統

趣味：他人をイジる

特技：見た技を覚える

大切なもの：自分の女、家族（居候）

苦手なもの：父親

天敵：父親 川神千李

尊敬する人：無し

クラス：ランサー

パラメータ：

筋力：A+ 耐久：B 敏捷：B 気力：A 幸運：D | 宝具：B

クラス別スキル：

『対気力』：C

気の攻撃に対する抵抗力。

一定ランクまでの攻撃は無効化し、それ以上のランクのものは効果を削減する。  
サーヴァント自身の意思で弱め、有益な力を得る事も可能。

なお、気力によって強化された武器や、気力によって作られた武器による物理的な攻撃は効果の対象外。

スキル：

黄金律：D

人生においてどれほどお金が付いて回るかという宿命を指す。

Dランクの場合、『その日暮らしを免れて時に大金を手にする』程である。

カリスマ：B

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。

Bランクであれば国を率いるに十分な度量である。

加虐体質：B

戦闘時、自己の攻撃性にプラス補正がかかる。

これを持つ者は戦闘が長引けば長引くほど加虐性を増し、普段の冷静さを失ってしまう。  
う。

攻めれば攻めるほど強くなるが、反面防御力が低下し、無意識のうちに逃走率も下がってしまう。

心眼（真）：B+

修行や鍛錬によって培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

戦闘続行：A

名称通り戦闘を続行する為の能力。

決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能。

宝具：

『強者の畏怖』  
プロヒビテッド・エリア

ランク：B 種別：対軍宝具

気、宝具などの特殊なものを消し、出せなくする。

発動条件は一人でも目を合わせる事であり効果の時間は、自分より弱い者には一時間、強い者には三十分程度。

この効果は発動した戒本人が死なない限り効果の時間を越えるまで続く。

これを発動すると威圧の圧力が場に加わる

また発動していた時に目を合わせていない者でもこの圧力は感じる。

またその圧力の影響は戒より弱い者には強く、戒より強い者には弱くなる。

『愛パスしストき人との指輪リング』

ランク：B 種別：対人宝具

契約を交わした際にこの指輪を触媒にしていたマスターの元に移動する。

マスター以外の人が所有していた場合は移動が出来ない。

名前：川神かわかみ 千李せんり

登場作品：『真剣で武神の姉に恋しなさい！』 作者：炎狼さん

年齢：17歳

誕生日：8月31日 おとめ座

血液型：O型

身長：175cm

体重：53kg

スリーサイズ：B100 W58 H89

一人称：私

あだ名：千李先輩、センちゃん

職業：高校生

好きな食べ物： おにぎり

好きな飲み物： お茶（緑茶）

趣味： 読書 鍛錬

特技： 殺気を出すこと ビームを出すこと 破滅

大切なもの： 仲間 家族

苦手なもの： なし

天敵： ヒューム・ヘルシング 藤井戒

尊敬する人： なし

クラス： バーサーカー

パラメータ：

筋力： B 耐久： A 敏捷： A+ 気力： EX 幸運： D 宝具： B

クラス別スキル：

『狂化』：—

『バーサーカー』のクラス特性。

理性と引き換えに驚異的な暴力を所持者に宿すスキル。

身体能力を強化するが、理性や技術・思考能力・言語機能を失う。

また、現界のための魔力を大量に消費するようになる。

ランクが上がるごとに上昇するステータスの種類が増えていく。なお、今回のバーサーカーにとっては狂化は精神干渉に近いものらしく通用しなかった。

その為消失している。

スキル：

単独行動：C

マスターの魔力供給なしでの行動。

通常であれば、Cランクならば1日程である。

しかし戦闘を行った場合は著しく時間は短くなる。

殺気：EX

気力を含んだ睨みによって行動を制限するスキル。

発動すると空白の時間を作り出すことができる。

ランクが高いほど空白の時間が長くなる。

このランクであれば時間にしておよそ『刹那』ほどでは有るが止める事ができる。しかしその自分分の体に負担が大きく殺気を使った後の数秒間は気力が使えない。そのため逃走用として使うこともある。

千里眼：B

遠方にいる敵の索敵。

目で見える場合は一点しか見ることができないが気力を千季を中心とし、球のようにすることも可能。

ただし球にすると大まかな場所のみの索敵のみしかできず、精度は格段に下がる。目で見える場合の最大索敵範囲はおおよそ1km程。

球の場合は150mほど。

宝具：

『鬼神降誕』  
きしんこうたん

ランク：A 種別：対人宝具

封印を解除することにより封印していた気力を完全に解放する。

解放された気により千季のステータスは全てワンランクずつアップする。

名前：国吉くによし灯あかり

登場作品：『真剣で私に恋しなさい！』 Junk Student 作者：り  
せつとさん

年齢：17歳



誕生日：8月1日 しし座

血液型：O型

身長：174cm

体重：91kg

一人称：俺

あだ名：灯 変態 塵屑

職業：学生

好きな食べ物：サラミ

好きな飲み物：コーラ 川神水 ビール

趣味：ギャンブル ナンパ

特技：バイクの曲芸乗り

大切なもの：自分のペースを守ること

苦手なもの：納豆 ブスばかりいるファミレス

天敵：母親 束縛する女 黒月籠斗

尊敬する人：祖父

クラス：ライダー

パラメータ：

筋力：B 耐久：A 敏捷：D 気力：C 幸運：C 宝具：A++  
クラス別スキル：

『対気力』：E

気の攻撃に対する抵抗力。

一定ランクまでの攻撃は無効化し、それ以上のランクのものは効果を削減する。

サーヴァント自身の意味で弱め、有益な力を得る事も可能。

なお、気力によって強化された武器や、気力によって作られた武器による物理的な攻撃は効果の対象外。

『騎乗』：D（A）

様々な乗り物を乗りこなす技能。

Aランクでは神獣ランク以外を乗りこなす事が出来る。

しかし、彼はバイクにさえ乗れば良いのでこのランクにダウンしている。

スキル：

身体ブースト：A

一時的に幸運、宝具以外のステータスを一段階上げるスキル。

また部分的に『筋力だけ上げる』や『敏捷だけ上げる』といった強化も可能。

しかし強化を解くと元のステータスから一時的に二段階下がる。

戦闘続行：A

名称通り戦闘を続行する為の能力。

決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能。

心眼（エロ）：B

女性が相手だった場合に限り、次の行動を直感で感じ取る。

しかし確実に当たるというわけではない。

宝具：

『<sup>レッドクイーン</sup>紅の女王』（バイク名）

騎兵たる由縁のバイク。

空を飛ぶことは出来ないが、どんな荒道でさえ高速で駆け抜けることが出来る巨大な

モンスターバイク。

状況、状態次第では水上、垂直の壁を走ることも可能。

『<sup>マキシマム・ドライブ</sup>駆け抜ける蹂躞二輪』

ランク：B+ 種別：対軍宝具

『<sup>レッドクイーン</sup>紅の女王』での蹂躞走法。

スピードが出てれば出てるほど相手を巻き込む人数が増え、威力も上がる。

『<sup>クレイジー・ダンス</sup>轟く籠手・奮う具足』

ランク：A 種別：対人宝具

全部でゆうに100kgは超えている灯専用の超重量武器。

普段は真名を隠すために装着せずにいる。

これを装着する事で相手の防御体勢を崩しやすくなり、更に相手の耐久を1ランク落とす。

また相手の武器、鎧等の防具を破壊しやすくなる。

しかし破壊不可の概念がある場合は破壊することは出来ない。

『制覇の方程式』<sup>シヨウダウウシ</sup>

ランク：A++ 種別：対人宝具

クレイジー・ダンス装備時に発動可能。

殴打、脚撃による灯の最強の連撃。

初撃がクリーンヒットすることで正式に発動。

(初撃は殴打、脚撃どちらでも良い。

相手を一瞬でも怯ませることが出来たなら発動)

この宝具が発動している間、相手の耐久を強制的にEまで落とす。

またスキル『身体強化』のバックアップがあれば威力は更に跳ね上がる。

名前：霧夜<sup>きりや</sup> 王貴<sup>おうき</sup>

登場作品：『真剣で王に恋しなさい!』 作者：兵隊さん  
年齢：15歳

誕生日：12月25日 やぎ座

血液型：AB型

身長：162cm

体重：49kg

一人称：王（オレ）

あだ名：凶王、馬鹿王

職業：元霧夜カンパニー御曹司 川神学園2年S組

好きな食べ物：諸事情によりなし。以前はチョコレート

好きな飲み物：諸事情によりなし。以前はワイン

趣味：殲滅、奸計

特技：お金持ち、発明

大切なもの：自分自身

苦手なもの：自分自身、暗い場所

天敵：霧夜エリカ 風間翔一 立花虎之助

尊敬する人：なし（本人談）

クラス：アサシン

パラメータ：

筋力：E 耐久：E 敏捷：D 気力：B 幸運：A+（本人の自己申告） 宝具：—

クラス別スキル：

『気配遮断』：—

『アサシン』のクラス特性。

自身の気配を消す能力。

完全に気配を断てばほぼ発見は不可能となるが、攻撃態勢に移るとランクが大きくなる。  
が。

本来ならば高いランクを有しているのだが性格が災いしてしまいこのスキルは失われている。

スキル：

黄金律：A

人生においてどれほどお金が付いて回るかという宿命を指す。

Aランクの場合、『一生金に困ることは泣く、大富豪でも十分やっていける』程である。

カリスマ：D（A）

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。

Aランクなので本来ならば人として最高のカリスマ性を誇る。

しかし属性が反転しているため大幅にランクダウンを起こしている。

また、Dランクは一軍を率いるには破格といったレベルである。

心眼（真）：A+

修行や鍛錬によって培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

気力放出（衝撃）：A

武器や自身の肉体に気力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させるスキル。

気力によるジェット噴射。

しかし衝撃波として放出されるため身体能力の向上は無く相手への攻撃に特化している。

慢心：A+

本人の心構え。

王貴が同等、もしくはそれ以上の相手と認識しない限り常に手加減をする。  
A+もあれば、相当の慢心マスター。

宝具：―

適正クラスではないため使用不可。

名前： 澄漉すみろく 香耶きょうや

登場作品：『真剣で猟犬に恋しなさい!』 作者：勿忘草

年齢： 17歳

誕生日：6月1日 ふたご座

血液型： A型

身長： 179 cm

体重： 87 kg

一人称：俺

あだ名： キョーヤ

職業： 川神学園 2―S 一人暮らし

好きな食べ物： 麻婆豆腐



好きな飲み物：コーヒー

趣味：将棋 鍛錬 読書

特技：株

大切なもの：己の意思

苦手なもの：裏切り 一子の涙

尊敬する人：マルギツテ・エーベルバツハ

天敵：霧夜王貴 立花虎之助 国吉灯 源忠勝 川神一子 風間翔一

クラス：キヤスター

パラメータ：

筋力：D 耐久：E 敏捷：D 気力：B 幸運：C 宝具：B

クラス別スキル：

『陣地作成』：C

『キヤスター』のクラス特性。

魔術師として自らに有利な陣地『工房』を作成可能。

このスキルのランクが高ければ高いほど良い環境を作る事ができる。

結果の作成に特化している為『工房』を作成するのが困難なランクとなっている。

『道具作成』：—

『キャスター』のクラス特性。

魔力を帯びた器具を作成可能。

しかし家事スキルが高いためこのスキルは消失している。

スキル：

八極拳：A+

中国拳法における1つの拳法。

その理念は『二の撃ち要らず』である。

習得するのがとてつもなく難しいスキルである。

このランクならば習得から更に一段階踏み出した熟練者といえる。

心眼（真）：B

修行や鍛錬によって培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出

す戦闘論理。

心眼（偽）：—（A—）

直感・第六感による危険回避。

虫の知らせとも言われる、天性の才能による危険予知。

視覚妨害による補正への耐性も併せ持つ。

今回はキャスタークラスの結界を使用しているため消失。

残酷な掌たなごころ：A

人間を気力に変換するスキル。

その方法は溶解となる。

変換した気力は陣地構成に使われる。

本来の殺戮の力がキャスターのクラスでよって捻じ曲がった結果である。

家事：A++

家事能力の高さを表す。

このランクだとマスターのために良い生活環境を作り出す事ができる。

これは長い間の家事によって培われたスキルである為、もはや呪いのようなものである。

宝具

『吾戰場ヲ知ル者』

ランク：B 種別：対軍宝具

自分が入っていた結界の気力を媒介にして発動する宝具。

自分の気力と媒介にした気力を使用するため非常に強力な結界となる。

この宝具は発動の前に既に結界に入っていた『自分以外の』者を対象とする。

心眼スキルによってその結界の中に居る人間の行動を予測する。  
この宝具は気力が尽きる。

または大ダメージを受けて維持が出来なくなるまで維持される。

## 『同盟と闇鍋』

あの橋を爆破して逃亡をした翌日。

俺はある男達と一緒に七浜の駐屯地に居た。

「お前ら、おはよう」

俺は目の前であくびをしている二人に声をかける。

一人は傲岸不遜な態度をしている男。

もう一人はバンダナを付けている男。

「貴様、この時間に起こすとは阿呆か？」

「眠すぎるんだけど……もう一回寝ていいか？」

二人が不満を俺に漏らす。

どれだけ朝に弱いんだよ。

普通なら十分起きる時間だろうに。

俺達『サーヴァント』にとって『食事』と『睡眠』は必要ない。

なのにこの傲岸不遜な恩人は眠っていたのだ。

そして起こせば罵倒される。

どうしようもない我侭男である。

「とりあえずご飯にしようぜ」

そう言つて俺は二人を引つ張る。

当然不満を言われたが無視しておいた。

そつちの都合で遅くなつたらたまつたものではないからな。

「で……どうするのだ、『キャスター』？」

男の方がクラス名をずばりと言い当ててくる。

まあ、あれだけ派手な真似をすれば看破されるだろう。

しかしこちらにも相手のクラスが何なのかはわかっているのだが。

「予定はこれから話し合うんだよ、『アサシン』」

衝撃波の連打から見て考えられるのは『キャスター』だ。

しかし同クラスはいない。

そこから消去法で考えた場合はおそらくではあるが『アサシン』だ。

当然忍ばずに結界に入つてきた時点で、かなり疑念が浮かんだがもはやそこらへんしか当てはまるものが無かつた。

「くくつ、この王のクラスを当てるとは……少しは褒めてやる」

眠そうな眼のまま俺を笑う『アサシン』。

とりあえず食事にしよう、そう考えて誘ったがアサシンから拒絶の声が聞こえた。  
「……王たるこの王に、貴様ら塵芥が食す物を食べるか？」

随分と付け上がるではないか」

まあ、それはその通りなんだが……。

それを言うアサシンは霊体化してしまった。

「それなら俺も食わない、サーヴァントは大丈夫だからな」

俺もそう言つて霊体化をする。

キヤップとマルギツテさんの食事が終わるまで俺達は言葉を交わさずに突っ立って  
いた。

「とりあえず食事は終わったようだし本題に入るか」

俺がアサシンの方へむいて本題に入ろうとする。

するとアサシンは用心深い視線となってこちらを見ていた。

「何を企んでいる？」

「企んでいるとは人聞きが悪いな、『同盟』を組んで欲しいんだ」

俺が真剣な顔でそう言うと、アサシンはとてつもなく驚いた顔でこちらに顔を向けて  
言葉を発する。

「貴様、この王オレに対等になれというのか？」

こいつは一体何を言っているのだらうか。

そういつた雰囲気さえも顔で表現している。

「あの女に、『バーサーカー』に勝つ為に力を貸して欲しい」

俺は頭を下げてアサシンに頼み込む。

しかし次の言葉は氷を連想させるほど冷たいものだった。

「勝つためか、下らんな、王<sup>オレ</sup>一人で十分だ」

「いや、ここは乗つてもいいんじゃないのか?」

冷たく突き放すアサシンの言葉にキャップがすかさず反論をする。

すると次の瞬間アサシンは怒りを露わにしてキャップに突つかかっていた。

「風間、王<sup>オレ</sup>一人では不服か!」

それは自分の力だけで『バーサーカー』を打倒すると宣言しているようなものだった。

どれほどまで俺と同盟を組みたくないのか。

オレはアサシンにあの時の事を言った。

「あの時つてガス欠を起こしたよな、アサシン?」

「ぐぬぬ……」

そうなのだ、アサシンは前回の戦いでガス欠を起こした。

つまり俺もアサシンもあのバーサーカーに単体で勝つのは非常に難しい。



それを覚えているからこそアサシンも少し考えているのだ。怒りのままに言葉を発してもこのアサシンは聴い。

天秤にかけて本当に重要であるものを選び出す力を持っている。

「どうしてもお前が必要なんだ、分かってくれ…本当の気持ちなんだ……」

俺は真剣では有るが情けないほどの声で懇願する。

こちらの真剣な顔を見たアサシンはもはや諦めるように息を吐き出した。

そしてとてつもない顔でこちらを見て言葉を放ってきた。

「仕方なくだ、本当に仕方なくだぞ」

全く持つてこの王も人生でここまで塵芥に讓歩するなど思つてなかつた」

自分より下の者と組むという悔しさと怒りで顔は歪んでいる。

今にも地団太を踏みそうだ。

しかしやはりバーサーカーを倒したい気持ちが勝つたのだろう、俺と同盟を組む事を選んだ。

一度逃げおおせた時にどちらが欠けても危なかつたのを知っているからそれも考えた上の納得なのだろう。

「ちなみに対等な関係ではない、俺が下でアサシンが上だ」

それだけはきちんとしておくべき事だ。

あのバーサーカーに対して大きくダメージを与えたのはあくまで『アサシン』。俺は逃走を手伝っただけ。

それで平等な立場だとぬけぬけと抜かす真似はしない。

「ほほう、それなりに分かっていたか、それで良いのだ

貴様如きが王と対等オレなど有り得ぬ事よ」

俺の発言に少しは気をよくしたのかアサシンは椅子に腰掛けいかにも偉そうな態度をとる。

俺は苦笑いを殺して目を真っ直ぐに見てその言葉を決定付ける一言を放った。

「それで良い、そういった関係の方が俺たちには合っている」

そう言つて俺が笑う。

互いにバーサーカーを倒す為に、互いに屈辱を晴らすために。

今此処に不平等な立場では有るが『同盟』が生まれたのだった。

昨日あれから逃亡した俺はお兄さんたちの本拠地に居た。

逃げ帰った頃には男女のコンビが帰ってきていた。

そのコンビは活発そうなお嬢ちゃんと腕白そうな少年だった。

「この少年の視線……あの時感じたものと似ているねえ」

俺は気になっていたことを呟く。

確証がないからどう仕様もねえけどな。

その日は夜も遅かったので話し合いも無く全員がぐつすり寝る。

俺も流石に夜這いするような程、性根は腐ってないので眠りについた。

そしてそれから朝方に起きた俺は首をならして伸びをする。

話をしようとしたがお兄さんが起きてこない。

お姉さんが居ても独断ではダメだ。

できるだけ速く話し合いをしたかったのだが主従の両方が居ないと意味が無い。

「まあ、襲撃がない限りは時間が有るし問題ないのかもね、行動に問題があるけどよ」

俺はそう言つて霊体化をして時間を過ごす。

だらけていたらしいの間にか夕暮れ時になる。

そしてそんな時間になってからお兄さんが起きてきた。

俺は質問しようとするが食事の準備の為に全員がせわしなく動き始めた。

これじゃあ質問なんて出来やしないね。

俺には俺の都合があるように相手にも都合が有るのだ。

「で、これはどういう訳？、理由聞かせてくれないかな、サンングラスのお兄さん」

俺はコンロを持ちながら鍋を持っている兄ちゃんにちよつと聞いてみる事にした。

答えは決まってるんだろうけど気になっちゃうもんは仕方ねえ。

すると兄ちゃんは俺の方を向いてこう言ってきた。

「わからねえのか、鍋をするんだよ」

やっぱりそうだよねー。

鍋使つて出来るもんなんて限られてるもんな。

ただ問題はそこではない。

見た感じ鍋に何でもかんでもぶち込んである。

「魚とか肉とかが有るけど野草とかもあるもんな」

食べられる野草なんだろうがしやれにならない。

毒草を食べてりタイアなんて笑い話にされるだけじゃん。

「じゃあ電気消すよ〜」

「えっ!?!」

青い髪した背の高い良いお姉さんが間延びした声で言ってくる。

ナイスおっぱい!、ナイスバディ!、こいつは生唾ゴクリだ。

闇鍋なんかじゃなくて、こつちを食べたいなあ。

「じゃあ、食べるか、楽しそうだな」

そう言つて兄ちゃんは箸を取る。

楽しくないよ、これは危険なもんさ。

そしてそれが合図だというように全員が箸を取つていく。

「んっ?」

今一瞬見えたあの手は多分少年の手じゃねえのか?

もしかしたらとんでもない事をしてきてるかも知れねえ、気をつけよう。

そう思つていたら電気が消える。

本当ならこれに乗じて適当な言葉囁いて、ゴートウベツトなんだがそいつはやめだ。

しかし『闇鍋』とか大丈夫なのか?

相手に良い機会を与えるだけじゃねえか。

「ワン子ちゃん、掴まず電気つくまで待つときな。ちよつと嫌な予感がする」

そして数分後電気がつく。

そこには少し顔を擧めて震えてたお姉さん達が居た。

やつぱり何か仕込まれていたか。

俺の言葉通りワン子ちゃんが何も掴んでいない状態でした。

ナイスだ、花丸どころか『スーパードール』をあげようじゃないか。

そう考えていたら箸をこちらに渡してくる少年がいた。

「掴んでないなら何かとつたらどうだ？」

少年が一言真剣な顔で言う。

流石に俺が馬鹿でも痺れるものを食うはずが無い。

ここは上手い事やり過ぎそう、これで上手く酔い潰せれば万事解決だ。  
俺は川神水の入った瓢箪を向けて一言誘ってみる。

「なあ、あんたは飲まないのかい？」

そういうと少し飲もうとするが手を引つ込める。何だ下戸か？

そして冷静な顔になって一言言ってきた。

「冷めるのはよくないからな、掴んでないにせよ食べれば良い」

また、そういうことを言う。

強引なのは良くない、紳士じゃなきや嫌われるぜ。

俺は強く断る為にもう一度川神水の瓢箪を突きつけて語気を強めて一言言った。

「飲めよ、これは宴会だ」

そう言つて睨みつける。

こちらが喰いたくないと言っているのだから許容して欲しい。

もし強引に食べさせるのであればこっちは川神水を飲ませてやる、アルハラとか言う  
なよ？

「やめとくよ、あんたもそんなに嫌なら別に良い」

そう言つて相手の方も箸を渡すのをやめる、これで一応問題は回避したな。結構強引だった所を見ると何か仕込んでいた可能性が十分ありえるぜ。

そう言つて相手の方も箸を渡すのをやめる、これで一応問題は回避したな。結構強引だった所を見ると何か仕込んでいた可能性が十分にありえる。

「飯時に悪いと思うがちよつと俺達は外に出るわ

ワン子ちゃん、行くぞ」

俺はそう言つてワン子ちゃんの手を引つ張つて家から出る。

あの中身に何も盛られていないというのは楽観的に物を考えるのは良くない。

何でもやろうと思えば出来る、なぜなら一緒に逃げたとはいえ相手の本拠地なのだから。

「ねえ、あんな事して良かったのかしら？」

ワン子ちゃんが申し分けなさそうな顔で俺に言ってくる。

何を言つてるの、最高の行動だよ。

俺はそれを示すように頭を撫でてやっていた。

やべえ、さらさらした髪の毛の手触りって凄いわ。

そう考えていたら家の扉が開いて一つの人影が出てきた。

それはさつきまで俺たちに食事を勧めていた少年だった。ゆつくりとこつちの方へ歩いてきて少年は一言呟いた。

「勘が良いのか、用心深いのか、良く回避したな……」

やっぱりそういう事だったか。

少々おかしいとは思っていたが大胆な真似をする奴だねえ。

いきなりそういった事をするのは予想外だったもんな。

「用心するのが普通だろお、しかしまさか下戸なんてな」

俺はきちんと後者の意味の方で伝える。

勘がいいならもう少し上手くするつての。

そして俺は意外だといわんばかりに少年に向かって言う。

「お互いが牽制し合っているとは驚きだ」

少年の方がそう言つて俺を見る。

こちらとしてはそんな考えは無く、本当に飲まないのかどうか聞いたつもりだったんだけどな。

「で……今日の起きてこなかった事について、もしかして気づいてたりする？」

「オレだつて気づいてた、あんたなら尚更気づいてたはずだろ」

少年に質問をする。



いつもの俺とは違つて至極真剣な顔だ。

やるときややる、そうじやなきや俺はただの屑だ。

「そりや分かつていたさ、あのお姉さんとお兄さんが懇ろねんじになつてたのはな、どういふ経緯でそういうのになつたかはわからねえけどよ」

起きてきた時の顔を見たらそういう行為に至つていたというのは分かる。

別にそれは悪いことじゃねえ。

いい女が居るんだ、獣になつちまう男がいねえとも限らねえ。

でも俺達はそういう事をするべきじゃない。

あのお兄さんだつて気づいてるはずだ。

「いつか必ず別れが来ちまうものなのにな……」

幾ら戦いに残つていても最後にはそうなる、そうしなくては願いが叶わないのだ。

マスターに願いが無い場合は最後の一人になれば良いがそんな酔狂な人はいないだろう。

俺達はいくら想い合つていても必ず別れなければいけない運命を背負つている。

それをお兄さんは快樂というもので一時的に忘れようとしている。

一番重要な事を後回しにするなんて絶対にしてはならないことだ、現実を直視するべきだろう。

「そう考えりや女々しい男よりはあんたの方が良いねえ」

そう考えた時、俺はお兄さんへの興味を失っていた。

当初組む予定だったお兄さんよりこちらの方が良いと思えた。

一服盛る度胸があるというのも良いし、頭もよさそうだ。

オレを真つ直ぐ見てくるサーヴァントに良い笑顔と答えを返す。

「オレも警戒心の有る男の方が組んでみたい」

あんな簡単に食って引つかかるような奴より、用心深いこちらの方と一緒に行動した方がよっぽど有意義だ。

その言葉に気を良くしたのか満面の笑みで手を差し出してくる。

「オレもその手を握り返す。」

「俺は『ライダー』のサーヴァントだ、お前さんは？」

既に知っているクラスを明かしてくる男に対してこちらは何も言わずにこの場から離れようとする。

しかしそれは出来なかつた。

とてつもない力でオレが動けないようにしていた。

「つれないことはやめようぜ……なっ」

こいつ、まさか『ランサー』の時に使っていたスキルをこんな所でやっているのか？  
オレは諦めて仕方なくクラスを明かす事にした。

「オレは『セイバー』のサーヴァントだ、宜しくな」

自分の口からはあまり言いたくないがああ状態では無理も無かった。

ようやく力が抜けて手が離れた。

とりあえず強力な戦力が手に入ったというのは理解できた。

オレはもう一度あの場所へ踵を返すのであった。

## 『準備期間』

同盟が生まれた翌日。

王は臉を擦りながら朝も速くから川原へと歩いていく。

その理由は再びあの馬鹿がこの王を速く起こしたからだ。

「とりあえずこの河原を結界にしよう」

「結構広い範囲じゃねえのか」

そう言つてあの馬鹿なキャスターは術式を展開し始める。

風間が何かしら言っているが王には関係ない。

次々と結界が組み上げられているのが分かる。

前回よりも敷地を大きく、更に時間をかけて強大にするつもりなのだろう。

「しかしサーヴァントでもここまで酷いものは……」

「やかましいぞ、塵芥……ところで、キャスター」

女の言葉など無視して王は欠伸をしている、当然怒りも含めてだ。

昨日に続いてまたこのような真似をされて黙っているほど甘くは無い。

「どうしたんだ、アサシン？」

一心不乱に構築している阿呆が振り向いてこの王に声をかける。

「何故昨日よりも早い時間にこの王を叩き起こした、流石に見過ごさんぞ……」  
王は掌を向けてこいつに衝撃波を放とうとする。

しかし次の瞬間キヤスターの奴がこんなことを言ってきた。

「一刻を争うからな、仕方ない」

「まあ、あいつが言うのも最もだぜ、昨日でさえ辛かったからな」

真剣な目でこちらに言ってくる。

風間は王の言葉に賛成する。

まあ、あの女がいつ襲来してくるかは分からんからな。

だが次の言葉は王を侮っているかのような言葉でもあった。

「流石に放つて行動して無防備な状態を晒させるわけにはいかないよ」

確かに王は朝に弱い、それは認める。

だがその程度でこの王が負けるわけが無いだろう。

そう思うと王は苛立った声でキヤスターに言葉を放っていた。

「まあ、キヤスターの言うとおり二人とも熟睡をしておりましたからね」

「女、いいからとりあえず黙れ」

キヤスター……まさか王が負けると思っているのか？」

王が怒りの声を上げると苦笑いする、そして一拍置いてからキャスターは返答をしてきた。

「流石にあのバーサーカーを考えたらすぐ首を縦に振れる自信がないな、あれ以外なら首を縦に振るけど」

「つまりバーサーカー以外には勝てるって思っているみたいだ、誇れっ!!」  
こいつ……正直にも程がある。

風間も機嫌を取るような言い方だが別にそういうものを求めていたわけではない。

あの女を例えに出してしまうのは仕方が無い、互いに面倒な奴と最初に当たったからな。

あの時は王が助けなければこいつは助かっていない。

つまりそう考えれば本来ならば同盟などではなく王の為に跪き忠誠を誓うべきだろうに。

「そうか、だがこんな朝早くからやる必要は有ったのか?」

王は疑問に思った事を聞く、別に時間によって気力が増えるような事は無い。

それならばお互いがきちんと行動できる時間帯にいけば良い話ではないか。

「前回は朝早くから構築したのに襲来されたんだよ」

成る程な……、つまりそれより速くに構築して少しでも強固にしておこうというわけ

か。

「あれは酷かった……時間的には速かったのですが見事に壊されましたからね」

「次は負けられんがどういった方法だ？」

王は<sup>オレ</sup>どういった構図を立てているのかを聞いてみる、流石に何も考えてないとは言わんだろう。

「今度は最初から気づかれるような物ではなく俺の仕草で発動させるようにした

他人も普通に入れるから疑いはしないだろうし、発動していないから壊される心配も無い」

ふむふむ、それはいい考えだ。

初めから怪しき丸出しなど『見つけて下さい』と言っているようなものだ。

そんな事をするのは馬鹿だな、そして貴様は前回それをやっていたから馬鹿というわけだ。

「しかし、それでもあのバーサーカーに勝つには爆発する小型結界が必要だけだな」  
そう言つて笑うキャスター。

逃げる前提でなくても確かに攻撃手段は必要だからな。

まあ、王は<sup>オレ</sup>奴から逃げてなどいない、奴を逃がしてやったのだからな。

「あの女に勝つて高らかに笑ってやろうではないか」

王はその事思をい浮かべて一言呟く。

あんなにも真剣にあがく滑稽な姿を見れば少しばかり感心する。

それに王は寛大だからな、多少の事は目を瞑つてやろうではないか。

無論あまりにも度が過ぎればあの女よりも前に散らしてやるがな。

あの女の命を今度こそ散らしてみせる。

できる限り無様に、惨めに王を楽しませられるように。

あの顔が歪み、四肢も無残に傷つき這い蹲つた時にその頭を踏みつけてやる。

王オレはその瞬間が早く来る事を願い笑みを浮かべるのでだった。

あれから一日経って朝早くからオレ達は大きな工場の中に居た。

何故ならばライダーとの同盟を組んだのだ、それで勝つ為にお互いの戦い方を活かす

方法を考える必要がある。

そのため工場で会議をしつつお互いの動きを見たりしていた。

ちなみにランサーについては痺れが取れていたことも有つて戦うのはやめておいた。

そしてランサー自身が聖杯戦争に対して全く思い入れが無い事から危険度としては

低く見積もっている。



ライダーとの同盟で倒せる以上はそこまで大きな問題でもないだろう。

「しかしこのサーヴァント、偉く気前がいいぜ、態々見せてくれるんだもん!!」  
「本当だ、オレに宝具を見せるなんてしていいのか?」

マスターは宝具を見て興奮している。

オレは純粋な疑問から目の前のライダーに質問をする。

一度双眼鏡で見たが迫力が凄い。

それだからこそ易々と見せて良いのかと思った。

「ライダーが見せるって言ってるなら私は止めないわ」

「構わねえよ、あの川神百代にも既に見られてる

それに……いつかは全員に見せるかもしれないことだ」

ライダーのマスターは俺たちが見ることに嫌な気持ちは無かったのだろう。

ライダーも別に見られて困るはずが無いと言っている。

宝具の名前は『レッドクイーン紅の女王』というらしく、目に優しくない紅色の大きなモンスターバイクだ。

それにライダーが跨って瞬間に加速をしていく。

けたたましい音を立てて工場を軽く一周したあとに降りてこちらへ振り向く。

「なんかお姉様から逃げた時より速くなってない?」

「マジだ、女王様の乗り心地があの時と違うんだが……どんな手品を使った？」  
ライダーとライダーのマスターが驚いた顔で言ってくる、やはり気づいたか。  
オレは共に戦う相手を援護する事ができる。

今は真剣な戦いではないから効果は薄いがそれなりに成果はあったようだ。  
「いや、別にこれといった仕掛けは無いよ、でも感じはどうだった？」

良い方に傾いているはずだが一応聞いてみる。

悪いほうに傾いているならば付け入る隙が出来ておいしいからな。

「感じは良くなっているが、これって俺だけが受ける恩恵なのか？」

それは違う。

共に戦う相手だから一人だけの強化ではなく大勢の強化も可能だ。

とは言っても一緒に戦ってくれる相手がいるかが問題点になるんだけどな。

「とりあえずはこれで速度を生かした戦法が取れるのが一つだ」

オレはスキルを使って戦法の一つを挙げる。

当然穴はあつて常時宝具を展開するには気力が必要になる。

タイミングを間違えれば途中で殴り合いに近い真似をしなくてはならない。

結構シビアなものだ。

「もしくは俺の身体ブーストとそっちのスキルを重ねて接近戦に持ち込むか」

ライダーがスキル名を明かしてこちらに提案する。

しかしこちらにも穴があり制限時間付きの爆弾を抱えるようなものらしい。ならば却下するしかない。

「やっぱ俺が単騎で援護を待つよりか、ツーマンセルで行ったほうが良いかも知れねえな」

ライダーが顎に手を当ててそんな事を言う。

確実性はそちらの方が有るだろう、どちらが欠ければバランスは崩れてオレの脱落も確定する。

ライダーを囷にしようと思ったがここは仕方ない、いざとなれば令呪で逃げてしまえば良いや。

「それでいくのは良いけどお互いの息が合っていないからそこを重点的にしないと」

そう言ってオレはほくそ笑む、当然だがこの提案は建前だ。

こういった事をした中でライダーの弱点を見つけ出す。

ランサーと戦った当事者の話を聞きだせれたら更に最高だ。

勝つためには建前をいえる度胸、切り捨てる非情さだ。

「そうだな、そこが上手く出来なきゃ一泡吹かせる事も出来ねえや」

ライダーはそれを快諾する。

馬鹿な奴だと思つてはいけな、相手もこちらの事を探らない訳ではないのだ。時々こちらを見る目が鋭くなるから油断が出来ない。

「まあ、それも嫌だし……コンビネーションが出来るようにするか」

そう言つてお互いが想定した上で川神百代を倒す為に動いてみる。

しかしどうあがいても勝てる図が思い浮かばない。

気弾や瞬間回復、更に基礎的な能力の差。

どれをとつても並のサーヴァントより性質たちが悪い。

「これは骨が折れる作業だな」

勝つ為に頭をフル回転しなくてはいけない。

他の奴らに任せようにも限られてくる。

オレはこの強大な相手に対して重くため息をついたのであった。

一つの同盟は淡々と作業に没頭して勝とうと言う熱を上げる。

一つの同盟は強大な敵を如何に倒すかと苦心する。

ただ彼らは知らなかった。

その熱と苦心が最大に高まる、今から二日後とてつもない戦いが起こる事を……

## 『最強に挑む者たち』

二つの同盟が生まれて早くも二日が経った。

四組の主従がお互いの戦い方や戦法、スキルでどう倒すかを考えている時。

唐突にその戦いは始まった。

「それにしても楽しくないわね」

私は誰にも聞こえないような声で呟く。

マスターはお稽古か何かしらで今はいない。

『千里眼』をやっても誰も視認できる距離や球の範囲に入らない。

弱いからなのかもしれないけどやはり立ち向かってくるぐらいはして欲しい。

そう考えて歩いていたら一人の女性とぶつかる。

ぶつかった時に見えたその姿は私と『瓜二つ』だった。

私はその存在を知っている、『川神百代』。

『武神』と謳われる最強の女子高生だ。

しかし名前をいきなり呼ぶ事はしない、初対面の人間の名前を呼ぶなんて下手したら不審者扱いをされる。

例え世界規模で有名でも節度は守らないとね。

「貴方、何者かしら？」

白々しいが私は百代に話しかける。

一拍置いて百代が振り向いて私を見る。

一瞬驚いた顔をしていたけれどすぐにそれは笑みに変わる。

「私の名前は川神百代だ、あんたは？」

百代の笑みは子供のよう純粋で、そして壊れそうなほどに危うさを感じさせるものだった。

その気持ちは分かるわ、『自分自身』に出会えたようなものだから。

戦いに楽しみを感じる者としては確実に抱く夢。

それは『自分自身』と戦う事。

「私の名前なんて良いわ、やる事は一つしかない、それを分かっているでしょ？」

そんな私の言葉を聞くと笑みを浮かべて百代が『気』を放出する。

確かにその量は凄まじく天さえも衝いていた。

私はそれを感じて喜びを感じはしなかった、むしろ落胆していた。

もしかしたら満たされないだろうという事を心の中でだが感じさせられた。「それだったら私でも出せるわよ!!!」

そう言つて私も『気』を放出する。

その量は百代を平然と凌駕する、さて……始めるわよ。私は駆け出す。

百代も同じ様に駆け出す。

最初の攻撃は激突を互いに選ぶ。

「ハアッ!!」

体をお互いにぶつけ合う。

大地が揺れて僅かに相手が後退する。

力比べは私に分があるようね。

まあ、気の量から察して全部私が勝つでしょうけど。

「川神流奥義『無双正拳突き』!!」

奥義をぶつけてくるけれどそれでも私には届かない。

「川神流奥義『無双正拳突き』!!」

同じ技同士がぶつかる。

轟音を立てて風が吹き抜ける。

威力は同等のようだけれどもまだまだ私はこんなものじゃない。

「こんなので勝てると思ってるのかしら？」

笑みを浮かべて私が一言呟く。

その言葉に苛立ったのか向かってくる。

弱いから弱いと言ってるようなものなのに何で怒るのよ。

私が間違った事を言っているわけじゃないのに。

「『致死虫』!!」

多くの光弾を放つ、その量は確かに凄い。

だけれど私の前ではそんなものは無駄だわ。

「『星殺し!!』」

一発の大きな光線の前に意味なんてないという事を教えてあげる。

太くて大きいレーザーが一薙ぎにしていく。

全ての光弾が霧散して煙を上げている。

「くっ!!」

「隙だらけね、『大蠍撃ち』!!」

流石に一方的だったのか隙が出来てしまっていた。

隙が出来たから腹に思い切り奥義をぶち込む。



捻れを加えて一気に気に乗せてやった。

百代は吹き飛んでいき地面に背中をつけていた。

「こんなものは通用しないぞ……『瞬間回復』!!……なっ!?!」

回復をしているのに顔が歪んでいる。

その種明かしは簡単な物だ。

「瞬間回復に使うであろう気より多い気の一撃を叩き込めば良い話よね」

今さっき瞬間回復をする際に気を多く含んだ一撃を叩き込んでいた。

その為回復が十分に行われなかったのだ。

「まだまだいくわよ」

私は笑みを浮かべて歩を進める。

百代は立ち上がり呼吸を整えて構えなおす。

「ハアツ!!」

さつきよりも速い速度で私へと向かってくる。

気合が有れば勝てるなんてことは無いわ。

その事を体に、心に刻み付けてあげる。

「『虹色の波紋!!』」

百代は手刀の奥義をを繰り出してきた。

おそろくないなせないであろう技。

仮に受けとめても、ダメージを受けそうなほどの気の量だ。  
「くっ!!」

避けて次の攻撃に備える。

しかし次の瞬間見えたのは笑みを浮かべた百代だった。

「今のはフェイントだ、『無双正拳突き』!!」

「なっ!?!」

百代は避けるのを見越して手を握りこんでいた。

私が避ける方向に向かって放たれた一撃。

その一撃は脇腹に突き刺さって私を吹き飛ばした。

「はあっ…:今のは効いたわね」

肋骨や骨への損傷は無かった。

『気』で防御を固めて置いてよかったようね。

「ようやく一撃をいれたぞ、休ませないぞ、そらそら!!」

百代がそう呟いて攻撃を仕掛ける。

『無双正拳突き』の乱れ打ちが襲い掛かってくる。

捌くには余りにも多い量ね。

さっきの攻撃で少し動きが鈍い。

「休ませないって言ってるだろ!!」

動いて防いでも何発か当たる。

動きが鈍いこの体にはかなりの辛さだ。

一刻も早くここから逃れないといけないわね。

「くっ!!」

この連打から逃れるのはカウンターを取るのが速い。

私は冷静に攻撃を見極める。

そして僅かな綻びを見つけ出して手を伸ばしていく、捕まえてこの流れを止めて見せる。

「よしっ、捕まえたわ!!」

「残念だったな、そいつは畏だぞ」

手を伸ばして拳を捕まえると、私は一気にカウンターを叩き込もうとする。

しかし百代に対してカウンターを取ろうとした腕を逆の腕でとられる。

そして笑みを浮かべた大きな声で技名を言っていた。

「喰らえ、『人間爆弾』!!」

百代が自爆技を放つ。

百代を中心にして爆発が起こり爆風が巻き起こる。

「ゴホゴホ……しかし甘いわ!!」

吹き飛ばされた私は咳払いをしながら場所を探る。

この程度のダメージならばまだ問題じゃないわ。

それにその量の煙では私の『千里眼』からは逃げられない。

何処にいるかなんてバレバレよ。

「『星殺し』!!」

「私も……『星殺し』!!」

場所から技名を言う声が聞こえた。

百代がこっちに対して星殺しを放つ、その方向はずれていなくて的確なものだった。

私もそれに対抗して星殺しを放つ。

普通ならこんな状況で放つような技ではない。

隙を作ってから一気に相手を倒す為に放つ技だ。

互いにぶつかり合って轟音を立てて煙が上がる。

一気にここで攻めていく。

私はもう一度星殺しの構えをして叫ぶように言葉を発した。

「もう一回、『星殺し』!!」

私は星殺しを連射する。

流石に連射は無理だったのか、そのまま無防備に喰らってしまう。

煙を上げているのを見て勝利を確信した。

「まだまだあ!!!」

しかし百代がその確信を裏切るように迫ってくる。

ここまで粘るとは思わなかったわ、それならば最大の技でこの戦いを終わらせてあげる!!

「最大の技……『震皇拳』!!」

体内で気を爆発させる拳。

私の莫大な気を使うことによってその威力はとてつもないものとなる。

突っ込んできた百代の腹に食らわせる。

その代償に無双正拳突きを見舞うが、勝負が決まったという手応えに揺らぎは感じなかった。

吹き飛ばされた百代は気絶をしていた。

『気』が内部破壊をして更に拳そのものの衝撃が押し寄せるこの技。

瞬間回復をしようとしても間に合わないし立ち上がるのも難しい。

最高の状態なら耐えられたでしょうけど、あれだけ疲労しては難しいわ。

「私の勝ちね、でもまだ消化不良って感じだわ」

気は消費したけれどまだ余裕はある。

まだまだ戦うには十分な量ね。

私がそう言うとは何処からか風を切る音が聞こえる。

『千里眼』で探つたら気配がすぐ近くにまで来ていた。

そしてそれから数秒の間、待つて現れたのは……

あの時に橋を爆破させた男と私を吹き飛ばした男。

「久しぶりだな、バーサーカー、あんなに気を放出したら嫌でも気づいてしまうぞ」

「塵芥の分際で随分と暴れたな」

指を鳴らして私を見る男と相変わらず偉そうに言う男。

まさかあの女性の戦いがこんな状況を呼び出すなんて……。

しかしそんな事は些細な事ね、むしろ来てくれたのだから全力で潰してしまえば良い。

「楽しませてくれるなら誰でもいいわ……」

貴方たちはあの日と同じ様にまとめて相手にしてあげる!!」

そう言つて気力を放出して私は近づこうとする。

しかし次の瞬間私の横からとてつもない衝撃が襲い掛かる。

私は無防備なまま横に大きく吹き飛ばされる。

吹っ飛び前の一瞬見る事が出来たがその正体は大きな紅色のバイクだった。

『マキシマムドライヴ駆け抜ける蹂躞式輪』!!

女王様からのプレゼントだ!!

そしてこれで終わりだと思ふなよ?」

紅色のバイクに乗っていた男が大きな声で言ってくる。

バイクを消してこちらをジロジロと舐めるように見ていた。

「トウラトウラトウラー!!!」

その視線を何とかしようと考えていたら上から声が聞こえる。

その影は速く落下をしてくる。

衝撃で体が上手く動かない私は必死に体をよじった。

「くっ!!」

ギリギリのタイミングで体を捻って避けるが腕を斬られる、かなりの深さだ。

腕に熱さが走り、体の中にまで痛みが響いている

「避けるなよ……でもまだ終わらないぜ」

そう男が言う、するとその視線の向こうでは薙刀を持った女の子が回転して向かってくる。

「許さないわ……川神流奥義『大車輪』!!」

速度はあるけれどこれならば避けられる。

そう思つてよけた先には女の子の大きな声が響いてきた。

「その避けた先こそ危ないぜ、ヒヤッハー!!」

怒涛の連撃に肝を冷やした私は頭を下げて回避をしようとする。

しかしそこであのキャスターが意地の悪い声で言葉を発していた。

「頭ぐらい上げろよ、見ないと避けられないぜ」

指をぱちりと鳴らしたら爆発で僅かに頭が上がる。

そしてあの女の子の大きな声が後ろから聞こえてきた。

「チャー・シュー・メーン!!」

ゴルフクラブで頭を殴られる。

衝撃で頭がチカチカする。

しかしそれだけではなくそのチカチカしている中に速い膝蹴りが顔面に入っていた。

「どんなもんだ、モモ先輩の仇だぜ!!」

声は聞こえるけれど目が上手く見えない。

すると次は脇から持ち上げられる、一瞬間を舞うと一撃が入ってきた。

「次は私の番です、『トンファーマールシユトローム』!!」



宙を舞う私に何回もの攻撃が叩き込まれる。

身動きが取れないまま暗闇の状態で体を地面に叩きつけられる。

起き上がろうと力を込めたその瞬間にあの傲岸不遜な男の声が耳に聞こえてきた。

「王<sup>オレ</sup>が命じる、這い蹲るがいい」

頭の上から思いつきり衝撃波を食らう。

体が地面にめり込んでいく。

「あああつ!!!」

声を上げて起き上がろうとした瞬間、足元が光る。

この瞬間私は再び結界に入っているのだと思い知った。

「上手くいったな!!」

「ええ、こんなに綺麗にはまるとは思わなかった、これで多少は有利に働くでしょう」

女性と男性が喜んでいる。

しかしそれは一瞬で視線はバイクでの乱入者たちに向かっていた。

私も気になっているから聞いてみる事にした。

「あなた達は何で此処に来たの?」

私は起き上がって相手の方を見て質問をする。

いきなりの乱入なのだ、理由はあるはずだ。

「川神百代をナンパする為だよ、言わせんな」

バイクに乗っていた軽薄そうな男がさも当然だというように答える。

「しかし、ナンパは予想外な形で失敗か……」

なあ、アンタに聞くけど今から勝負なんてやめて俺と良いことしないか？

めくるめく世界へ招待してやるからさ？」

腕を組んで堂々といかがわしい事を言う。

それを遮るように腕白そうな刀を持った少年が言葉を発した。

「元々は川神百代をイレギュラーから引き摺り下ろすつもりだったんだよ

まあ、これは少し予想外だけどサーヴアントのようだし結果オーライだ」

刀をきつちりと構えてこちらに真剣な視線を送ってくる。

私はそれを見て笑みをこぼして言葉を言う。

「なら来なさい、今のは所詮不意打ちよ

真つ向勝負で戦えば貴方たち如き、私の相手じゃないってことを思い知らせてあげる

!!

私は気を放出して迎撃する為に構えるのだった。

## 『斬撃とバイクと爆発と衝撃波と本気の戦士』

俺達はバーサーカーに対して構えたり各々の場所に着く。

相手はそれなりにダメージを受けているみたいだがそれでも侮れない。

「アサシン、とりあえずは攻撃をくらわないようにな」

「阿呆が、王と貴様を同じにするな」

俺がアサシンに声をかける。

するといつもの声色でこちらに言ってくる。

どうやら精神的なコンディションもお互い問題が無い。

「いくぜ!!」

俺は先に駆け出す。

俺ができる限りひきつけてそこで王貴が衝撃波を叩き込む。

攻撃は爆破をさせて逸らしたり八極拳の技術がある。

手段が有る俺が盾役になったほうがやりやすいのだ。

「貴方が来るの……前と同じようにしてあげる」

バーサーカーが笑みを浮かべながら構える、俺を真っ直ぐに見ているがそれは愚策

だ。

なんせここには四組の陣営がいる。

そしてそれら全てがお前を狙っている、俺一人にかまけててはいけないぞ。

「あーらよつと」

男……どう考えてもクラスはライダーだな。

ライダーがバーサーカーを攪乱する。

速度が乗った状態ならばさっきのように吹き飛ばされるだろう。

それが分かっているからかバーサーカーは当たらないように動く。

しかし注意力が散漫だな、ライダーの本当の目的はお前への攻撃じゃないぞ。

「自分から間合いに来てくれるとはな!!」

俺は踏み込んで一撃を放つ。

ライダーのサポートのおかげだ、やはり全員がバーサーカーを倒す事に集中している。

バーサーカーは後退して避けるが、その先に待機していたのは別の男……刀を持っているからセイバーだろう。

「背中ががら空きだぜ!!」

躊躇いも無く背中に刀を振り下ろす。

バーサーカーは飛んで避ける、しかしその判断も間違いだ。

飛び上がれば回避は出来ない、そしてここは俺の作った結界だ。何の対策もやっていないわけが無いだろう。

「爆発しろ!!」

指を鳴らすと結界の上部が爆発する。

その爆発は跳躍していたバーサーカーに直撃した。

前回と同じだと思ったら痛い目にあうぞ。

「がっ……」

落下をしていくバーサーカー。

まだまだ攻撃は終わらない、そんな無防備な状態で防げるのか？

「吹き飛ばが良い、塵芥」

アサシンが衝撃波を放つ。

バーサーカーは防ぐ事ができずに吹き飛ばされていく。

そして吹き飛ばされて結界に背中がつくと俺は指を鳴らす。

「ぐわああああ!!」

再び爆発する。

結界に体の一部が触れてしまっていたら俺の合図一つで爆発する。

当然無差別ではない。

「ここまで見事に嵌まると笑うなどではなく哀れに見えてくるな」

アサシンがその姿を見て神妙な顔で呟く。

流石に四人がかりだしな、一方的になるのも無理は無い。

それに準備万端でも有るがいつもに比べて体が軽いのだ。

「お前ら気抜くなよ？ あのお姉さん、目が死んでない」

ライダーの声が聞こえる、大丈夫だ、それは分かっている。

相手がこちらを睨んでいるんだから。

「おおおお!!!」

吼えてこちらへと走って来る、しかしその速度よりも俺が指を弾くほうが速い。

爆発が起こり再び吹き飛ばす。

「獣同然の振る舞いだな、這い蹲れ」

更にアサシンの衝撃波で地面にめり込んでいく。

そのまま地面に這い蹲るかと思ったがそう上手くはいかなかった。

相手は筋力を活かして跳ね上がって起き上がる。

「足元注意ってわけだ」

「川神流奥義『蛇屠り』!!」

だがその起き上がった瞬間、セイバーの刀とライダーのマスターの薙刀がバーサーカーの足を切り裂いていた。

「俺たちのことも気にかけてくべきじゃないのか？」

セイバーがそう言つてバーサーカーの方を見る。

腕と足がやられている今の状態ではいくら睨みつけても怖くない。

「この距離なら外さねえぜ、ボキチャー!!」

更にセイバーのマスターから後頭部へゴルフクラブの一撃を喰らう。

頭がぐらぐらとしていることは間違いないだろう。

「グッ……」

何とかして立ち上がろうとする、しかしそれさえもこちらが許すことは無い。

もう既に追撃が始まっていた。

「トンファークック!!」

マルギツテさんが一撃を叩き込み僅かに浮かせる、そして間髪いれずにアサシンの衝撃波がバーサーカーを襲う。

「飛んでいけ、哀れな女よ!!」

手を前に出し笑みを浮かべて放つ。

そのまま吹っ飛んでいくバーサーカー。

そこへ横つ面に殴りつけるライダーのバイク。

その顔にはやる時はやるといった真剣な顔だった。

「どんなもんよ!!」

バイクの直撃を食らったバーサーカーは吹っ飛んでいく。

その瞬間を狙ってキャップが走りこむ。

「もう一発だ!!」

後ろ回し蹴りが顔面に入って更に吹っ飛んでいき結界へと背中が当たる。

俺はその瞬間爆発をさせてバーサーカーを別の方向へと吹き飛ばす。

するとその軌道には丁度セイバーが待っていて、バーサーカーを斬る為に振りかぶっていた。

「貰ったぜ!!」

脇腹をセイバーが切り裂く、血が少し飛び散った。

バーサーカーは言葉を発する事も無く再び地面に落ちる。

バーサーカーはもはや成す術がない。

「ああああああ!!」

しかしその考えを裏切るようにバーサーカーは叫びながら一気に距離をとる。

足が傷ついているはずなのに良くできるもんだ。



「許さない、ここままでやるなんて許せないわ……」

なんかお門違いな事を言っている、前回俺をあんなにぼろぼろにしたくせに自分がやられたら許さないって馬鹿らしい。

勝負事だから傷ついて当たり前だし、さつきまで意気揚々と『まとめて潰す』とか言っていた奴の台詞ではないだろう。

「……『本気』でいくわ、今度こそ貴方達全員を完膚なきまでに叩きのめしてあげる」

一瞬俺たちをその言葉に首をかしげる。

一体全体この女は何を言っているのだろうか？

確かバーサーカーとして狂ってはいない、本気を出す事は出来るはずだ。

ただ今まで手加減されていたという現実にも全員の表情、もしくは目の色が変わる。

俺は怒りのこもった目で、アサシンは呆れたというような目でバーサーカーを見ていて、ライダーは静止を促す顔を、セイバーは苦笑いをそれぞれバーサーカーに向けていた。

そんな俺たちの感情や行動を知らずにバーサーカーは言葉を続ける。

「貴方達に勝てるならばマスターなんて安い代償よ

所詮マスターなんて私たちに気を渡すだけで戦闘では要らない存在じゃない

それなら沢山の気をくれるだけの頑丈な置物の方がよっぽどましだわ」

バーサーカーの発言に全員が怒りを感じる。

俺達はマスターがいてこそ存在できる存在。

マスターがいなければただの幽霊でしかない儂い存在だ。

「貴様のような自己中心的な塵芥がいるから問題なのだ、他人の事を考えろ」

その怒りからかアサシンが珍しく一番先に相手を非難する。

しかしその言葉に俺は苦笑いを浮かべていた。

「アサシン、お前が言えた事じゃないと思うぞ」

まあ、マスターを蔑ろにする発言をした以上俺もこいつは許せんがな」

指を豪快に鳴らして俺はバーサーカーを睨みつける。

只でさえ強い奴というだけでマスターから気力を吸い上げているはずだ。

それなのに感謝もなく使い潰そうとするなんて下衆の極みではないか。

「良い女でも性根が腐ってんならいらん」

今から全力で悪趣味な面に変えてやるから覚悟しな」

ライダーも首を鳴らして腕を組みバイクから降りている。

流石に女好きでもタイプじゃない奴がいるか。

「今の言動は悪いけど見過ごせないな、とりあえずは他のやつらにやられた後で首を落とさせてもらう」

セイバーも剣を構えて睨んでいる。

さつきまでの発言からは感じられないほど熱くなっているようだ、  
「『鬼は降り立ってこの身に宿る、人から鬼へ、鬼から神へと私はなる  
振るうは暴虐、成すべき事は破壊、今此処に誕生の産声を上げる  
鬼神降誕』!!」

俺たちの怒りなど何処吹く風でバーサーカーは宝具を開放する。

開放した瞬間吹き出る気が体を包む。

どうやら機能が低下した分を気の強化で補うみたいだ。

「傷は治らないけれど強化をしたらこの程度問題じゃないわ

貴方たち全員襪襖切れの様にしてあげる」

天を衝くでは済まず空を割るほどの気力に俺は背筋を冷たくする。

今まで感じた事のない気力に頭が警鐘を響かせている。

俺はこれはまずいと思ひ即座にマルギッテさんに声をかける。

「ちよつと……宝具使わせてもらっていいですか?」

俺の切羽詰ったその言葉にマルギッテさんは頷く。

ここまで来たらもはや出し惜しみなど言つてられない。

そんな事やっていたら脱落してしまう。

俺は許可が出た事に喜びすぐに宝具の準備をする。

よく見てみるとあちらでもライダーやセイバーがマスターたちと相談していた。手や足を振り、感覚を確かめてこちらに余裕の笑みを向けてくるバーサーカー。これから本当の戦いが始まるのだった。

「鬼神が倒れる時に光は降り注ぐ」

オレは苦笑いをしたままバーサーカーを見ている。

威圧感が殺気といったものがこの空間をびりびりさせている。

「しかし、これはちよつと危ないかもな、小細工させて貰うか」

そう言つてロケット花火をバーサーカーに向かつて飛ばす。

バーサーカーはそれを手を伸ばして掴んでいた。

握り潰しているがその一瞬だけで今のオレには十分だった。

「ハアツ!!」

その一瞬を活かしてオレは一気に接近する、そしてその勢いのまま頭へ刀を振り下ろした。

「フン!!」

しかしその一閃に対して冷静に真剣白刃取りをするバーサーカー。

だが、両手がお留守だぜ？

最初からこれが狙いなんだよ!!

「食らつとけ!!」

すぐにオレは片手を離し、刀からロケット花火に持ち替えてバーサーカーの口に放り込む。

火花が口の中で弾けていく、バーサーカーは刀を取り落として後退をしていた。

「さて、主導権を取れ……!？」

その言葉を最後まで言う事はできなかった、

バーサーカーが異様な速度でこちらへ向かってきていた、逃がさないというように狩りをする者の目つきだった。

「はああああ!!！」

後退はできたものの拳が突き刺さる。

刀を盾にすればいいのだが間に合わなかった。

その一撃は尋常ではなくオレを一回転させるほどの威力だった。

「がっ……」

息を吐き出すが汗が止まらない。

肋骨が折れているのが分かる。

「頭を踏んでおしまいにしてあげるわ」

不敵な笑みを浮かべて少しずつオレに向かってくるバーサーカー、これは絶体絶命だろう、そう思ったときにバーサーカーへ飛び掛るように挑む影があった。

「させるものかよ!!!」

無茶な事をする影の正体はキャスターだった。

結界を爆発させてバーサーカーを吹き飛ばし、オレの方向から遠ざけていく。

煙を上げてけたたましい爆発音が何度も響き渡る、それだけで連続で放つているというのが伺えた。

「無駄なのよ!!」

しかしその行動も虚しくバーサーカーが駆け出していく。

煙が晴れた瞬間、キャスターが力いっぱい地面に叩きつけられる。

多分どこかの骨はいっただろう、それだけは間違いない。

そして首根っこを持ち上げられて息をできないように結界へ押さえつけられていた。

「いいからそいつらから離れろつての!!」

ライダーが憤怒の顔でバーサーカーへ迫る。

速度も完全に乗っていたし不意打ちとしては最高のタイミングだ、しかしバーサーカーはそれを見て微笑んでいた。

「それは厄介ね、壊れなさい!!」

バーサーカーがキャスターを離して飛び上がる、そして次の瞬間ライダーのバイクに向かつて飛び後ろ回し蹴りを繰り出していた。

バイクと足の激突。

とてつもない轟音を響かせて煙が上がる。

「ぐああつ!!」

ぶつかり合いは残念な事にバーサーカーに軍配が上がったようだった、その損害はとてつもないものでバイクとライダーをまとめて吹き飛ばしていた。

よく見るとバイクは少しへこんでいてヒビも入っている、宝具を壊すなんてやばすぎるんじゃないのか。

「いつつ……こりやもういくしかねえな」

そう言つてライダーが距離をとる、キャスターも手を合わせて詠唱を始めた。

二人とも宝具の開放か、そりやあれだけ痛い目に合わせられたらこつちも切り札を切るよな。

まあ、オレの場合は真名開放がそれほど必要ないからいいんだけど。

『我は奏でられた戦いの唄に合わせて踊る者』

重き外装と裏腹に心軽く、軽き心の中に情熱の炎を灯す

今ここで始まるは狂いし舞踏、『轟く籠手・奮う具足』!!!」

『汝らは今宵籠の中の鳥となる』

この籠の中では我が耳には汝らの鼓動を我が目には汝らの所作を



我は汝らの全ての把握する籠の主、『吾戦場ヲ知ル者』!!」

二人の詠唱が終わると景色が変わる、これはキャスターの奴だろう。

対象は多分さつきまであの結界に入っていた奴らだ。

きつとあの結界を媒介にして自分の気力を上乘せした大結界を作ったのだろう。

そしてライダーは何か武骨な籠手と具足を装着していた。

その重さが尋常ではないと分かっているがバーサーカーのような奴には最適なのかもしれない。

頑丈なだけの宝具ではないのだろう、何かしらの仕掛けが有るはずだ。

「お前はもはや逃がさない」

「女王様の仇を取りたいからな、ガラにも無く燃えちまっているんだよ」

キャスターが首を鳴らして真っ直ぐにバーサーカーを見ながら言ったのける、ライダーも構えてバーサーカーに言葉を発していた。

「何をやっても無駄なのよ!!」

そう言つてバーサーカーは駆け出す、さつきの俺達を捕まえた時とほとんど変わらない速度だ、速すぎるぜ。

「ライダー、左だ!!」

「オツケー!!」

バーサーカーがライダーに向かって左フックを繰り出す、キヤスターの奴読んだの  
らうか？

いや、そうじゃないな、きつと宝具だろう。

これは先読みをするための結界で、この結界の中に居る奴ら全員が対象となっている  
はずだ。

「残念でしたー!!」

避けたライダーは拳を握りこむ、そこをサポートする為に俺は動き出す、逆の方向か  
らアサシンの奴も来ていた。

「喰らえ!!」

ロケット花火をバーサーカーの頭上に向けて放つ、計算通りの方向へと向かってい  
ている、アサシンもその方向を見て笑っていた。

「何処に向かって撃っているのかしら!!」

バーサーカーが笑って俺たちの方へ向かってこようとする、上の気配にも気づけない  
なんてどれだけ余裕ぶっているんだ？

「無論今笑っている愚かな塵芥の方向だ

受け取れ、玉<sup>オレ</sup>からの贈り物だ、泣いて喜ぶがいい!!」

衝撃波によって強引に軌道を変えるロケット花火がバーサーカーに当たって炸裂す

る。

火花と衝撃波で目が碌に見えていないはずだ、ここでやらないと次の機会を作るのは難しいぞ。

「いくぜ、制覇の方程式!!」

想像以上の速度にバーサーカーの表情が変わる、驚きか怯んでいるのかは分からない。

ライダーの一撃がバーサーカーのわき腹へと当たる、オレたちのように折れはしていないだろうがそのままライダーが振りぬいて殴り飛ばした。

「決まったア!!、お前の耐久は今の攻撃でこれが発動してる間『最低』になるぜ!!」

その言葉を聞いた瞬間、オレの背筋に怖いものがはしりぬけた。

強制的にキヤスターたちと同じぐらいつて事は俺の刀でもかなりの痛手になる、そんな仕掛けだったなんて恐れ入ったぜ。

「ハアツ!!」

その言葉を耳ざとく聞いていたのかキヤスターが一撃をぶち込む。

その一撃にバーサーカーが吹っ飛ぶ、よろめく程度だった筈なのにこれとは効果覿面だな。

「まだまだ続くぞ!!」

衝撃波の追撃が入る、キャスターの次にアサシンは叩き込んでバーサーカーにペースを掴ませないようにする。

しかし、次の瞬間キャスターが大きな声でアサシンに呼びかけていた。

「アサシン、足を気をつけろ!!」

「ハッ、それを見抜けぬ王<sup>オレ</sup>ではない!!」

キャスターの呼びかけに軽口で返すアサシン、足を畳んで対策をしてたようだ。

不敵な笑みを浮かべている。

「はああああ!!」

そして衝撃波で地に着く前にバーサーカーは手を伸ばしていた。

アサシンの足に拳を叩き込む、畳んでいたおかげで握り潰されることは無かったがあれでは折れているかよくてヒビだろう。

アサシンは痛みから汗を噴出すが不敵な笑みを変えずに衝撃波をコントロールして着地をした。

「防御してこれとはな……この痴れ者が!!」

キャスター、こいつを浮かせる!!」

アサシンが怒りのままキャスターに命令をする。

キャスターも笑いながら結界を爆発させてバーサーカーを浮かせる。

「受け取るがいい、ライダー  
王と僕からの贈り物だ!!」

アサシンがライダーの方向へバーサーカーを吹き飛ばす、その行動に対してライダーは親指を立てて応えていた。

「任せろ!!」

そこからはとてつもないラッシュが始まる、筋肉がビキビキと音を立てて唸っていた、耐久が最低の状態であんな筋力で殴られたら只じやすまないだろう。

瞬き一つも許されないほどの速度で叩き込んでいく、そしてこれで終わりというように腰を捻った。

しかしキャスターがそれを遮るかのように大きな声で警告をしていた。

「ライダー、顔に来るぞ!!」

その言葉を信じて箆手で防御をするライダー、確かによく見てみるとバーサーカーは頭を振って勢いをつけているのが分かる、そして次の瞬間攻撃を繰り出していた。

速さが尋常じゃない、あれを見てからとなるとかなりきついものがあるだろう、キャスターの奴が止めさせてでも防御を促すわけだ。

「フンッ!!!」

連撃の合間に箆手に向かって頭突きをするバーサーカー、箆手で防御をして難を逃れ

る。

しかし箆手自身に僅かなヒビが入ってしまった、ライダーはこの展開に顔をゆがめていた。

「おいおい、こいつも少しイカレたのかよ……でもこれで終わりだ

華は譲るぜ、セイバー!!」

拳の一撃を叩きこまれてバーサーカーは吹っ飛ぶ、何とか着地を成功させようと踏み張り地面を足につけるがその瞬間キャスターの悪い笑みが見えていた。

指を鳴らして爆発を起こし、一瞬ではあるが立ったままの姿勢を保たせた、最後の場面でのいい補助だ。

「トウラトウラトウラー!!!」

最後にオレが後ろからバーサーカーの霊核を突き刺す、深々と貫かれた胸から大量の血が流れている。

「距離を取れ、セイバー!!」

キャスターの言葉にオレは反応する、一瞬見えたのは勢いをつけようと腰を捻るバーサーカーの姿だった。

「あああああ!!!」

離れた瞬間に肘打ちが放たれていた。

キャスターが言葉をかけてくれなかったら洒落になってなかった、全部の肋骨が押し折られてたかもしれないな。

「ハの……」

俺はもう一度霊核を狙いにいく、突き刺した後に捻って粉々にしてしまえば流石にこれ以上は戦えないはずだ。

「次で本当に終わらせてやる!!」

オレの突き刺すのに合わせて全員が動いていた、バーサーカーの抵抗をキャスターが読んだんだろう。

頭突きでオレを狙う瞬間にアサシンが衝撃波で頭を下げさせて、ライダーがそこで顔面にとび蹴りを入れる、そしてキャスターが一撃を腹に叩き込む。

三人の攻撃がバーサーカーの動きを一瞬止めたその時にオレは突き刺した。

「これで終わりだ、この……化け物め!!」

刀をそのまま捻ってバーサーカーの抵抗をあと三人が止めていく。

数秒か数分かは知らなかったが何度も捻っていく、するとバーサーカーの力は抜けていき片膝をついた。

それを見て俺は刀を引き抜く、少しずつバーサーカーが光の粒子へと変わっていく、ようやくこの戦いが終わった、そう考えると安心したのか自然と息が漏れる。

「さて……それじゃあこいつを解除しますかね」

ライダーがガチャガチャと音を立てながら籠手や具足を消していく、それにしても凄  
い能力だったよな。

「俺も解除……!？」

キヤスターがそう言つて掌を合わせる、すると少しずつ景色が元の場所へと戻つてい  
く。

こうして見ると結界つて凄いいものだよな、そして完全に戻る前の一瞬の間にいきなり  
キヤスターの顔が青ざめる、一体何が見えたのだろうか？

「全員身を守れ……攻撃が来る!!」

手を振つてオレ達に呼びかけるキヤスター、その顔の色から全員がただ事ではないと  
感じていた、その言葉通りマスターを庇うように刀を構える。

ライダーも庇うように前に立ち、アサシンも手をかざしていた。

『『四神』が一つ、『白虎 虎砲閃』!!』

エネルギーのレーザーが主従に対して降り注ぐ、この映像が見えたからこそキヤス  
ターは青ざめたのだろう、無理も無い。

「くっ!!」

刀で防ぎこの一撃をやり過ぎず、キヤスターはすぐに抱えて安全な場所へと移動して



いた、アサシンは衝撃波でレーザーを相殺していてライダーはその耐久力を活かし掌で受け止めていた。

「とりあえず全員無事みたいだ……」

全員が肩で息をする中、煙が徐々に晴れていく。

全員マスターと自分の身は守れたがどうやら大団円とはいかないみたいだな、そんな事を考えていたら人影が見える。

完全に煙が晴れた時にそこから現れたのはボディースーツを着た男性と、学生服を着た女性だった。

## 『爆ぜて散るは大輪の華』

全員がどうにかやり過ぎた時に現れたのは一組の主従だった。

『氣』で狙撃した所を見ると『アーチャー』クラスだろう、しかしこのようなタイミングとはな。

「楽しんで四騎脱落だね、こりゃあ美味しいね」

女性がそんな事をいつている、今の状況は確かに危ない。

「やっちゃってよ、アーチャー」

そんな事を考えていたら、女性が声をかけてアーチャーの背中を叩く。

するとアーチャーは構えてこちらに攻撃を仕掛けてきた。

『四神』が一つ、『白虎 虎砲閃』!!」

再びレーザーが襲い掛かる、さつきとは違って本数は減ったが直線状に放たれている。

その攻撃はさつきの様に受け止める時間を与えることは無い、全員が避けに徹する。

「くっ!!」

全員が攻撃を避けるが地面や河原への被害を見ると身震いを起こす。

心の中に敗北や脱落を予感させるほどに状況は悪すぎる。

さっきのバーサーカーとの戦いで俺は肋骨がやられている、セイバーも肋骨がやられている、ライダーは宝具が崩壊していて、アサシンは片足がやられた。

さらに付け加えるなら全員ガス欠が近い、全員が満身創痍になっているのだ。

そこに加えてこの奇襲。

ここから導き出す手は……これしかない。

「俺が足止めをするか……」

誰かが脱落する引き換えに全員を逃がす事。

俺が残つてこのような真似をする理由は……今の俺の気力では転移する結界を作る事ができない、仮に作れてもアーチャー達はそんな暇を与えない、確実に足手まといとなってしまう。

それに加えて足が折れていない、疲れそのものも少ない、気力もあまり無い、そんな三拍子揃った俺がこの役目を勤めるのは当然の事だ。

正直まだこいつらと一緒に居たかったがもうそんな悠長な事は言つてられない。

「マジすまん……こつちの事は任せてくれ」

俺の気持ちを汲み取つたのか、既にライダーが『レッドクイーン紅の女王』を出していた。

マスターもマルギツテさん以外の全員が乗り込んでいた、その傍らにはアサシンとセ

イバーもいる。

「貴様……大儀であつたぞ!!」

「ありがとう、本当にありがとう」

アサシンとセイバーも本能で分かっている、俺がここで脱路する決意をしていることを、二人は一言言つて俺の方を見ないように顔を背けた。

それでいいんだ、お前らならこれから先どうとでもなる、残るといふ選択をしなかつたお前らにこつちがお礼を言いたい。

俺はあいつらの方を見ることなく親指を立てる。

そしてライダーのバイクが一気に加速して全員見えなくなつていく。

ライダーがギリギリとはいえ気力を持っていたのが幸いだつたな。

音が聞こえなくなると俺は腕を下ろした。

「何で君は令呪で逃げようとしなかつたの?」

女性が俺に向かってその様な言葉を投げかける。

確かにそいつは正論だ、そうすればわざわざ脱路する可能性を増やさずに済んだらう。

だがそんな理屈で動いている訳じゃない、俺はあいつらを逃がすと決めたのだ。俺の『意思』が俺に命じたのだ。

「俺が決めたことだ、その意思を曲げることは無いだろう」

それに逃げてても結局お前らの狙撃に怯える事になる、それが嫌だ

何でお前らみたいなの臆病者に怯えないといけねえんだよ」

あいつらに怯える顔は似合わない、あいつらに似合うのは笑った顔や怒った顔だ、それを絶やさないとすれば足止めぐらいという事ではない。

俺に叶えたい願いは無くても、ただ胸を張れる戦いをするだけだった。

だからマルギツテさんを傷つけなければそれで俺の役目は十分なのだ。

あいつらに連れてやるならば俺の命なんて安いものだ、聖杯を悪用するような奴らでもなかったしな。

「でも言葉も交わしていない奴らの為にそこまでやる義理なんてあるの？」

願っても何もかも捨てる価値があいつらに有るの？」

女性が再び質問を投げかける、合理的な考えばかりしているからなのだろう、俺の言葉も行動もこの人にとってはおかしな事だと思われているみたいだ。

「あるさ、言葉がなくても行動があった、時に行動は千の言葉よりも雄弁だ

価値だってあった、信用してあいつらの為に捨石になっても良かっただけの価値がな」

あの戦い一つで俺はあいつらを信用した、単純なのかもしれない。

しかし信じないでいるよりも信じたほうが良い、あいつらが俺を救おうとしてくれたり、俺の言葉を聞いて共に戦ってくれた。

それだけでも、俺にとっては十分な『宝』であり『誇り』なのだから。

「どうせ、あんたは『勝算』がどうかいいたいんだろうが、そんなもんはクソくらえだ、絶対にあいつらに追いつかせはしない、あとは盛大に咲くか散るかかってだけだ！」

合理的に戦う人間は平然と可能性を口にする、俺にとっては勝てるから戦うとか勝てないから逃げるとかではない。

勝つ為に戦うのだ、『可能性』なんてものより俺の意思がそれで良いというのならば、それに従って戦おう。

俺は駆け出す、相手は三騎士が一人『アーチャー』。

やるべき事はこいつを通さない事、そしてあいつらが勝てるように弱らせておく事。

「令呪によって命じます、『六感を研ぎ済ませなさい』」

重ねて命じます、『倒れてはいけません』

最後に命じます、『全てを尽くしなさい』」

駆け出した俺にマルギツテさんが令呪の三画全てを使って命令する。

閃きが頭の中で駆け巡り、心の中に諦めない気持ちの火が付き、体に力も漲ってくる。

「はっ!!」

一步踏み出して攻撃を仕掛ける、するとアーチャーが気を開放してこちらの攻撃を迎え撃とうとしていた。

『『四神』が一つ『玄武 羅生門』!!』

『氣』を使つて自分への攻撃を軽減しようとしているようだが……八極拳が恐ろしいものだという事をその目に、その心に教えてやる!!

「門を打ち開くが八極の理念なり、破ッ!!」

散らしていこうとするアーチャーに一撃を放つ。

強化された八極拳は相手の想像以上の威力を生み出しているのだ、その一撃は軽減すること許さずアーチャーに後ずさりをさせる。

「マジかよ、やるなあ!」

「隠し玉が多いようだな、驚いた」

後ずさりをしたアーチャーは笑いながら再び気を放出する、少しずつ性質が変わっていき、少しするとバチバチと火花のような音を立てた電気がアーチャーの体から出ていた。

「じゃあこれはどうだ!、『四神』が一つ、『青龍』!!」

電気を纏うアーチャー、それが体の中に入り込んでいく、つまり電気信号を活発にして身体能力を強化しているのだろう。

「まだまだいくぞ!!」

速い。

身体能力が上がっているとはいえこれは凄すぎる。

気づいた時には懐へ飛び込まれていた。

「くっ!!」

「もう既に『楔』<sup>くさび</sup>は打ち込んだ」

攻撃を何とか受け流して距離を取る、速さも重さもかなりのものだ、しかし今言った楔とは一体なんなのだろうか？

「奥義『麒麟』!!」

距離が一瞬で詰められてしまう、一体何が起こったのだろうか？

しかしそんな事を考える暇もなく俺は踏み込んでいた。

「『鉄山靠』!!」

アーチャーの拳とオレの背中が激突する、ぶつかり合った所を中心にクレーターができて、お互いが後退をして距離を取る。

「粘らないとダメなのに…熱くなる!!」

「折角の初陣なんだ…倒させてもらおう!!」

俺は構えて歯を食い縛る、熱くなっていた自分に喝を入れて戦い方を変えていく。



少しでも多くの時間を稼がないといけないのに何をやっているんだ、俺は頬を叩きアーチャーを睨んで誘導するのだった。

そしてあれからどれ程の時間がたっただろうか。

何秒？

何分？

何時間？

己の全てを、死力を尽くした。

もはや何も残されていない、普通ならそこまでやれば報われる。

「ハア……ハア……」

しかし、現実は無情なものだった。

強化をされていたからこそ粘る事が出来たし力を削ぎ落とす事もできた。

だがそれでもアーチャーの首を取るには至らなかった。

「まさか貯蔵していた分の半分も使わされるとは……しんどいなあ」

「呆れるほどの粘り強さだったね」

肩で息をしているアーチャーに驚きの顔を浮かべているマスター、まさかここまで

長期戦にもつれ込むとは思わなかったのだろう。

「これ以上は付き合つてられないし、仮に『ランサー』に見付かったらきついし帰るよ、アーチャー」

女性はこれ以上のリスクを冒すのは良くないと感じたのだろう、そう言つてアーチャーに霊体化をさせる。

「行つたか、怪我は無かつたようだな、マルギツテさん」

アーチャー達が去つて行つた後、俺はマルギツテさんに話しかける、表情を変えずに凛とした姿で俺を見ていた。

「ええ、しかしお嬢様に聖杯は渡せませんでした」

怪我の無い自分を見るが同時に果たす事のできなかつた任務に顔を顰める、普段ならば任務の遂行がゆうにできる存在なのだ、悔しさもひとしおだろう。

「ですがこれで良かったのでしょうか、誰かを見捨ててまで手に入れたものをお嬢様に渡すわけにもいきません」

一拍置いて俺の行動について誇らしげに笑みを浮かべるマルギツテさん。

確かに義理を重んじるお嬢様に不義理な事で産まれた聖杯を渡しても返されそうだな。

「それもそうですね、そしてどうやらそろそろ別れのようにだ……」

本当に楽しかった、これであいつらの役に少しでも立てただろうか。

あいつらの中の一人に聖杯が渡る事をひたすらに願おう、あいつらに幸有ることをただ願おう。

最後に笑みを浮かべたまま俺は意識を彼方へと放つのであった。

聖杯戦争五日目……

遂に脱落者が出る。

それは『最強』のサーヴァントと『最弱』のサーヴァント。

残りは五騎。

ようやくこの戦いに火が付きはじめるのであった。

## 『槍兵の憂鬱 新たなる協力』

二騎のサーヴァントが脱落した翌日。

ある場所では標的を誰にするかという会議が始まっていた。

「いい加減動いていくけど狙うのはアサシンだね」

「いや、俺はライダーを狙うほうが良い」

俺は亜巳の意見に反対をする。

アサシンならば別に後々でも良い、それよりあのライダーだ。

今思い出しても気分が悪くなる、よりによって亜巳にナンパをしやがったんだからな。

あの野郎の腕を折るのも良いがそれだけじゃ足りないな、二度とナンパなんてできねえように歯を全部へし折って、さらに動けないように足も折っておけば問題ないしせいせいするだろ。

「確実に勝つには面倒な相手を狙うのが先だ、譲歩できるのはアーチャーぐらいさ」

亜巳は頑として譲らない、しかしこっちも引く気はない、ライダーと言えばライダーだ。

もしくはあの刀を持って居る奴だ、薬を盛られた借りは返さないと気が済まねえ。

「面倒な奴らは勝手に消えてくれる、絶対にそれなりに強い奴らの方が優先だぜ

今なら弱つていたつておかしくはないんだからよお」

俺の意見を言う、令呪で従わされるならともかく、そうじゃないなら俺の言う事を聞いてもらいたい。

こつちだつて三騎士と呼ばれてる『サーヴァント』だ。

『最速』の称号を持つ存在だ、弱いわけがねえ、強いに決まつてんだよ。

本来なら積極的に行くつもりが薬を盛られた事により慎重になつていて、川神百代が襲撃してくる事を想定していたのがそれに拍車をかけていた。

これからは前線に出て戦う時だ、それなら少し体をほぐす為の標的としては、私怨を含めてライダーを選ぶのが良いに決まつてるだろうがよ。

ほぐすにしても、アサシンとかキャスターじゃあ流石につまらないからな。

そう思つて睨みあつている時に扉が叩かれる、俺は亜巳に言われて不本意ながらその扉を開ける。

するとその扉の向こうに居たのは久しぶりに見るツラだった。

「テメエ……」

「何日ぶりだつて、ランサー？」

俺の目の前に居たのは闇鍋の時に薬を盛りやがった憎い野郎だった。

「なんでテメエらがここに来たんだ？」

わざわざそつちから殺されにでもきたか？

……もしそうだって言うんならすぐにも望み通りにしてやるぜ」

歯を軋らせてこちらを睨んでくるランサー、一体何を怒っているんだ？

こつちの策に対して疑う事もしないで平然と食べ物をお口に入れたそちらの責任だろ  
うに。

それで恨まれているとしたら完全に逆恨みだ、むしろあの時に脱落させなかった事を  
感謝して欲しいくらいだね。

「ここはマスターの家なんだ、戻ってくるのは当然の事だろ」

当然そんな事は言いはしない。

それを言つて戦う事になったらまず勝てないからな、しかも負傷してる状況だし。

オレは冷静になつてきちんとした理由を述べてこの場で争いが起こらないように言  
葉を選ぶ。

「良い手土産だつて有るんだ、アーチャーの武器とライダーのもう一つの宝具

そしてサーヴァントの脱落って言うお話がな」

この行為はライダーに対する裏切りと言ってもいいだろう。

しかしこの交渉は成功させておきたい、その為にはきわどい部分までの情報を与える。

まあ、言うだけ言ってから断られないように慎重に進めないといけないからいきなりペラペラ喋らないけどな。

「へえ、良い話じゃないか、聞かせてもらおうか

で……お前、誰を殺すって言ってたんだい、天に言ってたなら……分かってんだろかね？」

オレ達の話聞いていたのだろう、ランサーのマスターが顔を出してオレ達を招き入れてくれる。

しかしその後に関こえた冷たい声に空気が凍り背筋に冷たいものはしる、きつとランサーのあれが失言だったんだろう。

家族に対して優しい人間は言葉だけでもその発言した相手に敵意を向けるからな。

まあ、オレには関係ないし距離を取っておく。

そして良く考えればオレのマスターの家でもあるんだから、こんな手土産の事なんて言わなくても入れてくれただろうな。

「よし、話そうぜ」

しかしそんな雰囲気も気にも留めず、マスターは家に入るといきなり大きな音を立て座る。

そして机を叩いてすぐにでも話し合いを始めようとしていた、流石にいくらなんでもそりやないだろう。

オレが喋るんだから急かすのはやめてくれ、この情報はせっかく交渉の材料に使うつもりなんだ、それを駆け引きも無しに開示するのは交渉下手か馬鹿のやる事だよ。

「教えてもらおうじゃないか、その有用な情報って奴をね」

向かい合わせに座るオレとランサーのマスター。

教えてもらおうと言葉を発した瞬間、オレは手を前にやって悪い笑みを浮かべる。

「いや、ただでやる訳にはいかないんだ、あんたならわかるだろ、世の中そんなに甘くないぜ」

遮ってオレは一言言う、慌てたように食いつかず冷静に聞いて引き出そうとするのはいいんだが、そんな簡単に言うほどこちらも甘くはない。

ここは間を作ってランサーのマスターが話すのを待つ。

「へえ……何か条件でも有るのかい？」

そりやあそうだと、こんな重要なものをそう簡単にやるわけがない。



それに条件と言ってもお前らの首をよこせとか本末転倒な事を言うつもりはないから安心して欲しいな。

「条件はアーチャーを倒すのに協力すること、情報だけで嫌ならこちらから交換条件を上乗せしてもいい」

これがオレ達の要求。

単純な戦力の増強である、戦うための前準備というわけだ。

「先ず情報だけで魅力的だけどねえ、気になるから聞くけど一体何を上乗せするのさ？」  
「どうやら感觸の方は良かったみたいだ、今の状況ならもしかするとこの破格の条件を出せば簡単に協力してくれそうだな。」

「上乗せする条件は……聖杯だ」

オレは真剣な顔をしてランサーのマスターに言う。

余りにもふざけた条件だ、普通ならばこの時点で自害を言い渡されていただろう。

だって一番の望みをみすみすと手放すということなんだ、喉から手が出るほど欲しいものなのに要らないなんて言えば、それはマスターへの裏切りに直結していると言っても過言ではない。

現にオレのこの条件にランサーとランサーのマスターも驚いている、オレのマスターは顔を変えることもなくこっちの言葉に耳を傾けていた。

「聖杯も譲るしこちらが持つている情報も渡す

その条件としてアーチャーを倒すのに協力して貰おうってわけだ」  
もう一度条件を言っつて畳み掛ける。

ここで気持ちを緩めてしまったら相手に逃げられるだろうからな、これどころか思いとどまっつて欲しい。

「流石にそんな破格な条件を突きつけられたら少し疑っちまうね」

口に手を当てて考え込むランサーのマスター。

流石にこんな破格の条件だったなら裏があると思うだろう、オレだつてこんな条件を出されたら真つ先に疑うぜ。

でもこつちの真剣な気持ちを伝えてしまえば嘘ではないとわかるだろう。

「こつちは伊達や酔狂でこの条件を出しているわけじゃない

真剣な場なんだ、それだけは分かってもらおうぞ」

これだけの札を切つて真剣な態度を見せたんだから流石に警戒心を緩めてもらわな  
いとな。

ここで一押しがないと少し辛いな、オレは少しだけ苦い顔をする。

「亜巳姉に聖杯はやるからさ、うち達と協力してアーチャーの奴を倒してくれよ!!」

そう考えていた時にマスターが頭を下げて頼む、ナイス援護射撃だ。

流石に肉親が頭を下げたのを見るとランサーのマスターも良心が働いたのだろう、口に当てていた手を下げて警戒心を緩めていた。

「こっちは戦力が欲しい、あんたらは聖杯が欲しい」

お互いの目的が一致している、悪い話じゃないだろう？」

オレは前を向いてさらに一押しする。

今の俺達がアーチャーと再び戦っても勝てることはない、そのためなら同じ『三騎士』に

協力してもらおうしかない。

「はあっ……天までこんなに必死に頼むんなら流石に姉としては断れないよ、一応聞いておくけど本当にくれるんだね？」

あとで『やっぱりなし』は私には通用しないよ、天、に嘘ついたら分かってんだらうね」

「当たり前だぜ、そんな事で亜巳姉に嘘つくほどウチも腐ってねえよ」

ため息をつくようにしてランサーのマスターは頷いてこの協力関係を了承した、その横でランサーが顔をしかめているのが印象的だった。

オレのマスターに対して確認を取る。

オレは欲しいものなんてなくてマスターもうんうん言っていて考えていて決まらなかつ

たのだ。

それなら手に入れた場合は一番うまく使えそうな人に渡せばいいという結論になり、考えた結果がマスターの肉親でもあるランサーのマスターだったのだ。

「もう一つ要求が通るならばオレ達にとどめを刺させてくれないか？」

オレは協力してもらおう以外にもう一つの約束を取り付ける、ずうずうしい願いでは有るがこの約束が重要なのだ。

「それくらいならお安いご用さ、こっちはきちんとやるからそつちも失敗しないでくれよ」

「任せてくれよ、亜巳姉がいれば負ける気がしねえぜ」

ランサーのマスターがオレの追加した条件に二つ返事をしてくれる。

オレが笑みをこぼしているとマスターも満面の笑みでこれなら負けないといった嬉しさを表情で表していた。

一応これでこれで交渉の方は素晴らしい形で成功する事になった、後はあの二人に話して早まらないようにしておかないとな。

ライダーはアーチャーが女性陣を泣かせる原因を作った事、アサシンは前から狙っていたキャスターをアーチャーに横取りされた事が理由で相当怒っていた。

「二段落したけど忘れていないだろうね？」

あんたが知ってる情報を交換条件として教えてもらうよ」

そんな事を考えていたら声をかけられる、そういえば交換条件のことが有ったな。

共闘を約束してくれた事に舞い上がってすっかり忘れていたぜ。

「そうだった、それでは……まず何が聞きたい？」

こちらから必要以上に言う必要は無い、相手が聞きたいものにだけ対応すれば良い。

こちらが調子に乗ってボロを出さないようにする事と必要以上の情報を与えない事が重要だ。

同盟についてボロを出したりしてここでやられても文句は言えないからな。

「聞くんだったらライダーのもうひとつの宝具って奴だろ、それ以外に興味なんざねえよ」

ランサーが首を突っ込んでくる、こいつ……こっちはマスターの方に聞いているのに面倒な奴だな。

「ならあんたは霊体化でもしときや良いじゃないか、こっちが聞きたいのはアーチャーの武器、そして誰が脱落したかだね、ライダーの宝具は一番最後で良い」

ランサーのマスターがランサーに対して冷たい言葉を放つ。

こっちはあくまで従者、主を押しつけてまで聞くのは一番無益に近い部分。

明らかに自分本位なものだったからな、マスターが怒るのも当然だろう、あの反応が

普通だ。

「ならまずアーチャーの武器……と言っても情報が少なくて、明らかなのは『気』による狙撃だな

武神には劣るけどかなりの威力を誇る光線を撃っていた、さらに漁夫の利を得ようとするあざとさも持ち合わせていて厄介だ、そこに気をつけた方がいい」

知っている情報の提供と言ってもアーチャーの攻撃方法から考えられる武器だ。

もしかすればあの光線以外に白兵戦用の武器を持っていてもおかしくはないだろう、警戒する必要があるな。

オレの勝手な予測で相手に不信任感を抱かせてはいけないから、この考えは言わないでおこう。

それに仮にランサーのマスターが聴ければそれ以外の事に気づいているはずだ。

「なるほどね、じゃあ次は誰が脱落したのか教えてくれないかい？」

次の質問については息を整えてからオレは言い始める、ちよつとアーチャーの武器の時に息継ぎ無しで言ってたからな。

「それじゃあ言うけど……脱落したのはバーサーカーとキヤスターだ

遠目で見たがキヤスターはアーチャーにやられてしまっていた

そしてもう一人の脱落者であるバーサーカーはライダーと戦って脱落した

オレはその戦いを見てた時にライダーのもう一つの宝具を見たんだ

オレは戦いが終わった後に傷だらけの状態になったバーサーカーに近づいていくと目の前で片膝を付いて消えていった

これがオレの知っている脱落の一部始終ってわけだ」

この言葉を聞いて気分を良くしたのか、にやりと音がするほど口角が上がっていた。

そりゃ『最強』と『最弱』の厄介な二人が真つ先に脱落したとなれば喜びも倍増するよな。

オレだってランサーの立場だったら笑みを漏らしていただろう、それだけは断言できる。

「それは大助かりだね、ライダーもなかなかやってくれるじゃないか」

ライダーにランサーのマスターから賞賛の声上がる、それを聞いているランサーは面白くないといったような顔だ。

自分達が有利になっているというのに、それを感情的なもので打ち消して良い方向に考えないのは馬鹿のやる事だぜ。

「まあ、残りはライダーの宝具なんだけど一体なんなんだい？」

ランサーの我侭を通す為に聞いてくるマスター、面倒くさそうな声なのも無理はない、聞かれた以上は一応この情報も言っておかないとな。

「籠手と具足のワンセットになつていた、効果は耐久力に影響を与えるみたいで頑丈そうなバーサーカーを吹っ飛ばしたり連続で攻撃を叩き込んでいた、オレが見たのはそれだけだ」

これで全ての情報は開示した、ここでオレは一応確認をする事と警戒の意味合いで質問を投げかけてみる。

「で……協力してくれるよな？」

仮に協力しないならこちらでも実力行使するぜ」

そう言つてオレは刀とロケット花火を取る、一方的に情報だけを貰うようならここでロケット花火を使う。

煙や火花で騒動を起こしてランサーのマスターを人質に取つてこの場をやり過ごす。

「わざわざ天が頼みに来たんだ、他人ならいざ知らず家族相手にそんな酷い真似はしないさ」

笑つてこちらとの約束について言う、それに対してランサーは仕方が無いといった顔だった。

こいつ……ライダーの首狙いすぎだろ、どう考えてもアーチャーの方が危険度が高いのに。

オレはため息をついてアーチャーとの戦いについて考えるのであった。



## 『騎兵と王の道は違える』

ランサーとセイバーの交渉と時を同じくしてある家の部屋では男が溜息をついていた。

「ハアツ……」

気の貯蔵量が半分減った俺はかなり考えさせられる事になっていた、キャスターを倒した事で仇討ちにくる奴らがいるかもしれない。

「三人がかりだったとしたら、節約だとか言ってもらえないし困ったな」

気の貯蔵は少し戻っているがこれだけでは心もとない、あの場面ではなくあと一拍置いていたら良かったと後悔する。

「しかもあの場にはランサーが居なかったしなあ……」

あの場に居なかった存在に頭を悩ませる、完全に無傷の状態の『三騎士』が残っているのだ、戦えば確実に消耗するだろう。

「考えれば考えるほど本当に辛いな、あのキャスターの奴が大人しく負けてくれたらよかったのに……」

頬をかいて俺は呟く、幾らなんでも令呪を全部使つての足止めとか普通なら有り得な

いだろ。

「まあまあ、今は休養の時だね

家に放火とかする非常識な奴が居なかつたら籠城が一番楽だしね」

燕姉がそんな事を言ってくる、流石にそこまでする奴はいないだろうけど万が一という事態も考えて欲しい。

誰も彼もが常識人ではない、タガの外れた奴が紛れ込んでいてもおかしくはない、あのキヤスターだってそんな奴だろう。

結界で丸ごとこの家を囲んで爆発させる事で俺達を炙り出すなんて真似をしてもアイツだつたら違和感を感じない、むしろ当然とさえ思える。

「ただ背筋が冷たくなる事だけは否めないね、流石に脱落者が出たからかな」

良く見ると燕姉の手には汗が滲んでいた、自分の秘密兵器の手入れをしているのを見たら自分が前線に出る可能性も視野に入れているんだろう。

「しかしそれ使つたつてあいつらに効くのかな、キヤスターみたいに令呪使われたら意味なさそうだし」

俺は疑問を口にする、なんせあんなものを見たんだからな。

『最弱』と言われていたくせにあんなにも粘られるんだ、『最優』と『最速』が令呪で強くなると考えたら気が気じゃない。

「そこは相手に悟らせずに上手くやれば良いの

無策と無謀は相手に任せてこっちは賢く立ち回って楽しんで勝つ様にすればいいんだよ、前の失敗は次の成功の為の投資と思えば痛くないしね」

「結局は悟らせないように疲弊した奴狙いか……」

考えを聞いて感心すると同時に溜息をつく、前線で勝負をする事ができないのは窮屈なんだよな。

ケース・バイ・ケースで白兵戦の方がやりやすい奴なら白兵戦に切り替えるとかいう形でいきたいものだ。

狙撃だけではなく白兵戦もそれなりにできるから出てくる贅沢な悩みだけど、そういった確実な勝ち方を考えても罰は当たらないだろう。

「勝ちたければ正確に動いて敵を倒せるようにならなくちゃ、悩みなんてものを持ち込む必要はないんだよ、それが理由で負けたらやっぱり未練が残るでしょ？」

確実な一手っていうのは万全な状況、石橋を叩いて渡るほど慎重になつて耐え忍んでここぞと言う時に打つものだよ」

俺の溜息について言ってくる燕姉、きつと心の中は読まれているのだろう。

その意見は間違っていない、その考えは戦いの上でとても素晴らしい。

しかし俺にとってやはり悩みや感情というものは重要だ、それを無視する事なんて出

来ない、未練が残るにせよ人間味を持ったままでいたい。

「まあ、今までの様には溜める事は出来ないから前線に出る可能性は無いとはいえないね」

「そうだよな、やっぱり攻めてきてもおかしくないよな、あいつらとの勝負で使い切らないなんて難しいだろうな」。

「この後の戦いの事を考えて、氣力を節約する為にはどうやって相手との勝負を優勢に持ち込むか、それが大きく鍵を握っている。」

「威嚇して牽制をするか、拠点攻撃をするか、色々な所を渡っていき相手の索敵を攪乱させて闇討ちするか、少し考えてもこれだけ出てくる。」

「そして標的を選ぶ場合に楽なのは今の所情報を持っている三人のサーヴァントだ、あいつらを優先的に狙えばいい。」

「これから前線に出るならアサシンだな、あいつが脱落したら暗殺に氣をつけないで済むようになる」

「俺が一番楽でありながら残られたら厄介な奴に目を向ける、そしてそれ以外の実力者は潰しあっている所に乱入をして場をかき乱す事で上手に脱落させる狙いだ。」

「もし全員から狙われれば令呪を使ってでも逃走していく、もはやなりふり構っていない、俺は気持ちを落ち着かせて相手を苦しめる事を延々と考えていた。」

その様にアーチャーが頭の中で考えを巡らせる中、ある場所では不穏な空気が流れていた。

「貴様」ときがこの王に指図するか、騎兵」

王は齒を軋らせていた、あの狐どもとの戦いに赴こうとしていた王をライダーが止めようとしたのだ。

「いや、だってせっかく助かった命を無意味に捨てようなんてのはナンセンスだって奴だ」  
助かっていようと動かないのは死んでいるのと変わらない、だからこそすぐにあいつらを倒そうとしているのだ、何故それが分からない？

「あいつが消えたにせよ、このままでいるなど王には耐えられぬ」

あの狐達に恐怖して放置すればするだけ面倒なことになるのだと何故分からん？

だったら先に襲撃をしなくてはならないのだ、例え多少の傷を負っていてもな」

王の意見は普通なら無謀とも言える、しかしそれでもあの狐を放置すれば再びあのような襲撃が来る、ならば多少の無茶をしてもあいつを弱らせる、もしくはその首を取る。

「それで無駄死にならどうかするんだよ、あいつだって浮かばれないぜ」

奴の事を考えて無茶をするななど言うのは片腹痛い。

あいつなら勝てる可能性があるなら無茶をするのが当たり前だと大笑いするであろう、なぜならあいつは阿呆の極みであったからな。

お互いが睨みあい少しずつ空気が熱を持ち始める、熱気は少しずつ王達の頭を熱くさせて正常な思考を奪っていく。

こういう食い違う中でも言ってはならない言葉がある。

王としてそれは分かっている、しかし頭に血を昇らせてしまえばそのようなものは平然と踏み越える。

「言っておいてやるが王は貴様と組んでいるわけではないのだ、ここでその首を飛ばしても良いのだぞ？」

王は睨みつけてライダーへと言う、ライダーも引きつった笑みで俺に返す、お前もその様な顔をするのか。

いいぞ、来るがいい、足が多少使えずともお前を倒すぐらいは出来るぞ。

「言つてわからねえなら…：そうするか？」

そう言つてライダーも構える、なかなかの気迫を持っているな、これはますます面白い。

始めるか、あとで謝つてももはや許さんぞ。

そう思い、笑みを浮かべて衝撃波を出そうとした次の瞬間女の声が聞こえた。

「私たちが使っていた本拠地で暴れるのはやめてもらう、流石に見過ごせないと知りな  
さう」

まさに今放つ所だったと言うのに女が水を差す、やる気を無くす様な真似はやめてもらいたいものだ。

女がそんな事を言うのとライダーは苦い顔をして構えを解いて出口へと向かっていく。

「逃げるのか、随分と腰抜けのようだな」

構えを解いたのを見て王は溜息をつく、せつかく今からという時に解くなど拍子抜けにも程がある。

そのまま終わるのは気分が良くない、その為王は軽く挑発をして見る。

「俺は女を困らせる趣味はねえ」

だからここではやらねえし、俺はもうここを使わない、別の本拠地でも探すさ」

しかしその挑発に対する答えはいかにもこいつらしいものであった、これでは無理だ  
と思ひ王もこれ以上は挑発せずに放っておく。

そう言つてライダーの奴は王達がいる場所から出て行きそのまま消えていく。

別の本拠地と言つてもおおよそ川神院であろうよ、これであいつの首を取るのは一筋  
縄ではいかなかったな。

しかし連絡を取れなくなったためあいつともう一人の男との繋がりも多少は消した。これは一石二鳥とも言える。

例え意見が食い違ってお互いがこのような状況になっても王にとつてはそれほど問題ではない。

王にはあの狐を倒す方が重要だ、奴の顔を歪ませるのであれば危険な道も悪くないはずだ。

その結果として王が見るのがあいつらの苦悶の顔や絶望に染まった顔ならば十分それだけの価値がある。

こいつらの力を借りる必要もお互いが協力を快く出来ないのならばいらなからな、あのバーサーカーの時が偶然だっただけの話だ。

「では王達もここから去るか、王《オレ》も存分にこの戦いを楽しませてもらうぞ、全員この王の前に跪かせてくれる!!」

そう言つて王はこの場所から出て行く、これから敵が増えると言う実感に笑みを浮かべていた。

抑えようとしてもその喜びが漏れていく、そして少々離れた後に哄笑を響かせて喜びを爆発させていたのであつた。



## 『射手と槍兵』

あのセイバーから言われた協力の内容は俺からすればつまらねえもんだった、たかだか狙撃するだけの奴に勝つ為に俺の力が欲しいって俺をなんだと思ってるんだよ。

まあ、俺達に聖杯が渡るんならやらない理由なんざねえから別に良い、其れにあのライダーを倒す為に重要な情報も貰えたし満足してる。

目的地でもあるアーチャーの家の前で立って話し合いをする、この距離ならば狙撃しようにも姿を見せないといけない、俺の速度より速い狙撃が求められる時点でかなり条件は厳しいだろう。

「しかし引きこもりをどうやって上手く外に出すんだ、このまま家ごとやるってか？」  
俺は素朴な疑問を投げかける、一回でも攻撃または威嚇してたら話は別だが流石にいきなりやるのは面倒だから好きではないぜ。

「いきなりそんな事するわけないだろ、まずは相手の気持ちを揺さぶったりして余裕を無くしていく」

それこそ箆つてないで前線に出たほうが良いって思うようにな」

そう言うのとセイバーがロケット花火を取り出して火をつける、狙っているのは窓だろ

う。

しかしこんなに少なくても十分な牽制になるのかね、どうせ使うなら相手に警戒させる為に景気良くやっても良いんじゃないかねえの？

「まずは一発目だ、まあ、あいつがこの程度で動揺するような弱いメンタルだったら良いんだけどな」

窓に向かって放たれた花火は窓に当たると綺麗な音を立てて落ちていく。

そしてアーチャーがこちらに気づいた瞬間、既にセイバーが花火を取り出して次の準備を始めていた。

「次は爆竹だ、音と火花で動揺を誘う」

そう言ってセイバーが二発目の花火に火を着ける、そして一拍置いた後今度は窓に向かって放つのではなく投げていく。

投げた花火が再び窓に当たる、さっきのロケット花火とは比べ物にならないほどのけたたましい音が鳴り響いて落ちていく。

アーチャーの奴はそれでも動じずに居た、するとセイバーが微笑みながらさっきよりも多くの花火を取り出していった。

「最後にもう一回ロケット花火だ、さっきより火薬の量も多いから威力は高いし本数も増やした」

窓にヒビ位は入るだろうさ……無視した分も合わせて痛い目見やがれ!!」

少し意地になっていいのか、窓の向こうを見ながらセイバーは花火を放つ、窓に向かつて綺麗に放物線を描いて当てる。

さつきとは比べ物にならない火薬の威力について窓が悲鳴を上げたのか亀裂が走っていた、そしてセイバーは振り向いて俺に一言言うのだった。

「ランサー……こうなったらお前の技で窓を割ってくれよ

あそこまで徹底的に無視を決め込むなら、そういう方法を取っていかないと埒が明かないぜ

それにいくらから行動したんだ、これで『いきなり』他人を巻き込んだわけじゃない、気付いたあいつが出てこなかったから悪いんだ」

三回もやって無理だったから流石に痺れを切らしたか。

まあ、俺も一回目で無理なら『リング』とかするから人の事言えないけどな。

結構『気』を使うからできればセイバーに窓を破壊して欲しかったんだが、聖杯をくれるんだから言うことを聞いといても損はないしここは一丁やつとくか。

「いくぜ、『致死量』!!」

『気』を球体状にかたどって広範囲に放射する、まあ、一般人の家にまで被弾するが別にかまわねえや。

攻撃がところどころに直撃して景気のいい音が響いてやがる、こりゃあ良いな、まだまだやってみるか。

「おつ、割れたみたいだな、ガラスが散ってやがる……こいつで仕上げだ!!」

よく見るとアーチャーの家の窓が飛び散っているのが見える、いつの間にか当たっていたみたいだ、俺は腕に『気』を宿して輪の形へ変えていく、それをアーチャーの家に向かって全力で放った。

「いけよ、『リング』!!」

俺の放った一撃は綺麗な放物線を描いて家へと向かっていく、アーチャーがどんな反応をするのか楽しみだな。

『四神』が一つ 『白虎 虎砲閃』!!」

家に当たろうとした瞬間にアーチャーが速い動きでレーザーを出して『リング』を相殺しやがった。

なかなかいいもん持ってんじゃねえかよ、こつちとしては一回で終わらせるわけがないけどな。

「さて、もうこれで知らん振りは出来ない、どう出るんだ?」

そうセイバーが言った瞬間、窓からアーチャーとそのマスターが飛び出す、このままだと危険だとも思ったんだろう、なんとたつて一般人が居るんだもんな。

その考えは間違つてねえが俺が相手をするんだ、この世には逆立ちしても勝てねえ相手が居るのを教えてやんぜ。

「まさかこんな昼間から狙つてくるとはな、ちよつと予想外だな

一般人だつて居るんだから多少は技を控えると思つていただけだ」

アーチャーが怒りの顔を見せる、何を寝ぼけた事を言つているんだよ。

これは戦争だぜ、どんな手を使つても勝つたらいいんだ、その為に他人がどうなつても知つたことじゃねえよ。

「じゃあどうするんだ、まさか尻尾巻いてここから逃げ出すのか？」

別にそうするのは構わねえけど易々と俺が逃がすと思うなよ」

指を豪快に鳴らして相手に向かって笑顔で言つてやる、さて……どういう反応を返してくるのかねえ。

「逃げるのかつて、そりゃ逃げるだろ

こんな所じゃ他人を巻き込むしな、流石にここでやる訳にはいかねーだろ」

そういう反応かよ、面白くねえ奴だな。

そこはニコニコして『やつてやる』つてぐらい言つてくれよ、そうしたら実力差を見せて絶望させてやろうと思つたのに。

「他人を巻き込むのが嫌ならテメエだけそういう技を控えりや良い話だろが

俺は自分にとって大事じゃねえ奴なんかなどうでもいいのさ、知ったこっちゃねえ」構えた俺に対してアーチャーが憎しみを抱いた目で睨みつけてくる、既に戦いは始まっている。

理由をつけてこの状況を止めようとしても無駄な足掻きだ、俺は止まりはしないからそういうことは諦めたほうがいいぜ。

「言つとくがごちやごちや考える余裕なんざ、テメエにはねえんだぜ!!」

俺は叫ぶように拳を突き出す、アーチャーが氣を操って何か技を発動させる、さつきとは違う技のようにだが相殺するには遅い発動だ、このまま飛んでいきやがれ。

「四神が一つ『玄武 羅生門』!!」

力を込めた拳がアーチャーへ当たったが手応えが感じられない、衝撃を吸収でもしてんのか？

こんな小細工なんてしやがって……イラつくんだよ

「うぜえんだよ……クソツたれが!!」

しやらくせえ真似をするアーチャーに対して齒を軋らせて睨みつける。

それを何処吹く風というように俺に背中を見せて一気に逃走を始めやがった、それがいかに無駄な事かを思い知らせてやるよ。

「『致死虫』!!」

数で一気に攻め立てる、レーザーで消すことは出来るだろうがその次の瞬間に拳をぶち込んでやる、あの変な技も全身くまなくやったら逃げ場がねえだろう。

「甘い、四神が一つ『青龍』!!」

アーチャーが技を使うとあいつの体から出ていた『気』が変質していつて『雷』の属性でも手に入れたのか放電していた。

周りから爆ぜるような音まで鳴っていやがる。

それを体の中に取り入れて首を鳴らした次の瞬間一気に加速をしていき攻撃を避けて俺との距離を開かせていく。

本当に厄介な野郎だ、宝具の開放をする暇が有ってもこれじゃあ効果がいきとどかねえから無駄になっちまう。

「逃がさないとか言ってたけどこれに追いつけるか!!」

あの野郎、このまま人目のつかねえ所まで行く気か？

無駄だ、すぐに追いついてやるよ、『最速』に敵うわけがねえんだ、違いを見せてやる。「当然追いついてやるぜ、せいぜいみつともなくみすばらしく逃げるんだなあ!!」

俺は足に力を入れて追いかけて始めていく、この程度ならまだ追いつける速さだ、あの状態が終わった時にはお前はお終いだ、覚悟しておくんだな。

その間に後ろを振り向くと地味にセイバーが離されずに追いかけてきていた、鈍足

じゃなくて良かったぜ。

とりあえず追いつくというのもいいが追いかけている途中にも攻撃する機会はある、俺は一般人などお構い無しに攻撃をアーチャーに仕掛けた。

「喰らえよ、『星殺し』!!」

攻撃の余波で一般の通行人たちが吹っ飛んでいく、全く邪魔な奴らだ。

アーチャーの奴が必死な顔で屋根に飛び移って避ける、今の攻撃で何人ぐらい怪我をしただろうな、逃げなかつたらこんなことにもなつてなかつただろうよ。

「屋根を使つてまでなりふり構わず逃げるか、無様だなあ!!」

こんなものは所詮は消える時間を少し延ばすだけのつまらん小細工だ、最後に見る景色でも目に焼き付けておけばいいさ。

「ほら、喜べよ、追加だ、『リング』!!」

再び跳躍をして逃げていくアーチャー、屋根の瓦が何枚か壊れたみたいだな。

これなら避けられないような技を出せば良い、俺はもう一度アーチャーに向かって奥義を放つてみる。

「『致死虫』!!」

当てる為に範囲が広い技を出す、流れ弾で窓が割れたり壁が壊れたりして悲鳴や物音が響いている、良い気分だな。



しかしあいつには当たらない、段々と苛立ちが募ってきやがる、この怒りは追いついた時に存分晴らさせて貰うぜ、アーチャー。

数分後、俺はアーチャーに追いつく。

目的地についた瞬間こっちに振り向いて構えを取る、やる気満々みてえだな。

「ここのなら人目につかない……流石にこっちも今回限りは真つ向勝負だ、来いよ」

「ああ、いかせてもらうぜ、そしてテメエは後悔しながらとつとと失せるッ!!」

こっちらも構えて『気』を放出していく、放電したような状態はまだ続いているみたいだ。

まあ、さっきの技と違って普通に攻撃が通るんだつたらただ速度が上昇しただけだ、そこまで危険視しなくてもいいだろう。

「川神流『無双正拳突き』!!」

「四神が一つ『玄武 羅生門』!!」

こっちが先手必勝とばかりに踏み込む、一気に速度を最大にまであげて拳を突き出すとアーチャーは気を体に纏わせて守りの姿勢をとっていた。

その拳が当たった瞬間、アーチャーは当然といわんばかりの顔で受け流して悠然と

立っていた。

「またかよ……」

またさっきのように手応えを感じねえ、しかしこの技の正体は掴んだ、衝撃を吸収するんじゃないくて『氣』を使って全身に散らしていやがる。

「ハアツ!!」

こちらが技の仕組みに気づいた瞬間、アーチャーが回し蹴りを放ってくる。

腕を交差して止めようとするが受けようとした腕をすり抜ける、想像していたよりも遙かに速い一撃だ。

頭を振って避けるが僅かに頬が切れたのが分かる、頬から唇にかけて熱いものが垂れているからだ。

「シツ!!」

更に追撃の踵落とし、鋭くて速い一撃だ、俺は冷静に見切ってその攻撃を掴む、少し手に衝撃が有るが離さずにしっかりと持っておく。

「意外と徒手空拳でも戦えるのかよ」

俺は苦々しい顔でアーチャーに言う、『射手』のくせにここまでいい動きをするのは流石に予想外だ。

「ちっ!!」

アーチャーは受け止められた足を強引に振りほどこうとするが、俺はそのまま地面に叩きつけてやる。

「がっ!!」

アーチャーが苦しそうに息を吐き出す、固くて砂利も豊富な地面だからかなりダメージはあるはずだろう。

俺は笑みを浮かべたままその顔に向かって蹴りを放つ、するとアーチャーは必死の形相で転がっていき何とか追撃を逃れやがった。

全く……つまらねえ野郎だぜ、大人しく食らっておけば良いものを。

「今のは効いたよ……でも今度はこっちの番だぜ!!」

起き上がって深呼吸で息を整えて『気』を放出して纏い始める、アーチャーは構えて体を僅かに揺らしていく、その瞬間俺の手からは電気が走っていた。

「奥義『麒麟』!!」

そんな事を思っているとアーチャーが目の前から消える、俺はその姿を追うが見つかる事ができない、俺が目で追えない速度なんてのは初めてだ。

俺は背筋に恐ろしいものを感じる、とっさに防御の構えをして攻撃を待つ、逸つて打ち合いになれば見えない速度というのは面倒だからな、あいつの攻撃がやむのを待つのが良い。

「喰らえ!!」

そう言つて目の前に現れたアーチャーが俺に対して仕返しとばかりに攻撃を始める。

右中段蹴り。

右下段蹴り。

左上段突き。

右上段蹴り。

左中段蹴り。

そして最後に頭突き。

その攻撃は脇腹や顔にも入っていた、しかし受けをきちんとしているから攻撃自体を防ぐことは問題ない。

いくら苦しくなくてもここまでされたら腹が立つ、こつちもそれなりに仕返しをしないではいけない。

「オラア!!」

腹に正拳突きがめり込む、しかし腹に力を込めて衝撃を和らげる、そしてその攻撃を掴んで難を逃れる。

「あんまり調子に乗るんじゃないよ、ボケが!!」

欲張つてきた正拳突きを掴んで俺は詠唱をして宝具を開放する、仕返しの間だけ、

覚悟しておけよ、アーチャー。

「我、繋がりやを絶やさず添う者なり」

例え傷つこうとも、例え病めようとも、汝の命運が為に傍らへ馳せ参じよう

『愛バストリッソしき人との指輪』』

俺の宝具の能力はこの指輪の片方を持つている人間の所へ瞬間移動すると言うものだ、この場合は亜巳の居る場所である。

流石のアーチャーもいきなり瞬間移動をすれば動きが止まるだろう、それも狙った上での発動だ。

「なっ、これは……!?!」

案の定アーチャーは一瞬硬直する、さて…さっきの分を返させてもらうとするか。

俺は笑顔を浮かべて正拳突きを掴んでいる腕に力を込める、そして俺は一言アーチャーに向かって呟く。

「ここからは俺がお前に攻撃を食らわせる番だぜ、アーチャー」

そう言つて俺は蹴り飛ばして距離を作る、そこから間髪入れずに腕を大きく広げて息を深く吸い込み勢いをつけた腕をアーチャーへと突き出して『気』を放出した。

「喰らいな、『致死虫』！」

その突き出した勢いのまま何度も何度もアーチャーへと放つていく、弾幕を張つてあ

いつの行動を制限する。

レーザーで相殺するか上空へ逃げるしか避ける手はねえ、そこにこいつも放てばもう逃げ場なんてもんはねえ、これで詰みだろう。

「ちっ!!」

予測していた通りにアーチャーは跳んで避ける、余りにも想像通りだったから笑みを浮かべちまつたが気合を入れて追撃の技を放つ。

「そつちに逃げ場はねえぜえ、『リング』!!」

俺は手で輪を作り出してそれを無防備な状態のアーチャーに向けて放つ、これをどう捌くのか見物だな。

「四神が一つ『白虎 虎砲閃』!!」

するとアーチャーは『リング』を相殺するためではなく空に向かって放つ、その反動で一気に地面へと降りていきやがる。

そういつた捌き方も有るには有ったな、でもその着地を狙えばいいだけの話だ、一息つかせる暇も与えはしないぜ。

「こいつで終いだ、喰らいやがれ、『星殺し』!!」

「なっ!?!」

アーチャーは驚いた顔を浮かべたまま『星殺し』の光に包み込まれていきやがる、

あの『致死虫』の攻撃から何もかも思い通りだけ、最高の気分だ。

「ハハハッ、モロに喰らったぜ、こりゃ終わったな、やつぱりテメエなんかより俺の方が強いってわけだ!!」

俺は大声で笑う、抵抗してこの程度なんざ無様なもんだ、初めに逃げずにやられた方が良かったんじゃないのか？

「随分と笑顔だが良い事でもあったのか？」

後ろからアーチャーの声が聞こえた、どうやら『星殺し』を回避していたらしい、よく見ると俺の手から電撃がはしっていた。

なるほど、さっきの連打で俺の体に電気を纏わせておいて技で俺の方向へ引き寄せられたというわけか。

「いや……お前の声を聞いた時点で最悪だ」

俺はアーチャーの方向へと体を向ける、そして俺はアーチャーを睨みつけていた。

せっかく最高の状況だったのに水を差すなよ、散りざまでもせめて美しくしてやろうという俺の気持ちに分からないのか。

「そうか、じゃあその最悪の状況にこいつも追加だ!!」

体に向けた瞬間を狙っていたのだろう、アーチャーの膝が顔面に迫っている、飛び膝蹴りを俺に仕掛けてきているのが分かっていた、良いタイミングだ、素直に凄いと思う。

「無駄な足掻きだつて言つてんだらうがよ!!!」

しかしそれは俺の不意をつくには遅かった、俺でなければ逆転の一手にもなつていただらうに。

俺は腰を落とし、掌で膝を止める準備をして十分な余裕を持つて待ち受けていた。

「なにっ!?!」

俺はアーチャーの飛び膝蹴りを止める事に成功していた、腰をきつちりと落としていたおかげで踏ん張る事ができた。

これが仮に腰を落とせてなければ蹴り飛ばされて距離を取られていただらう、掌を出さずに額で受けていたとしても失敗してそのまま負けていただらう。

俺は最善の判断をしたという確信が有った。

「残念、アウトだ」

戻そうとする足をきちんと掴んで俺はアーチャーの方へと顔を向けた、アーチャーの言葉なんてもはや聞こえてない、俺は笑い声を上げながら離すまいと掴んだ腕に力を込めていた。

「グッ!?!」

離そうともがくアーチャー、無駄だぜ。

俺の力はお前よりも上だ、このまま離さずに勝負を決めてやるよ。



俺は足を持ったまま振り回してアーチャーをに投げる、そして俺は握り拳を作つて『氣』を集中させる。

俺は全速力で駆けて行きアーチャーが投げられた場所へと先回りをする。

『最速』の俺にとつて飛んでいる物体に追いつくことなど簡単だった、瞬く間にアーチャーへと追いつき、力強く踏み込んでアーチャーの腹めがけて地面へ叩きつけるように正拳突きを放つのだつた。

『無双正拳突き』!!!」

アーチャーは無防備な状態でこの一撃を受けて地面へと僅かにめり込む。

さてと、起き上がるまでに勝負を付けさせてもらおうか、全く手間かけさせやがって。

「かはっ……」

アーチャーは何かを吐き出すような仕草をする、しかしこっちはその間さえも与えずに拳を振り上げる。

ここで攻勢を弱めればまたこいつは息を吹き返すだろう、もう二度と吹き返せないように痛めつけてやる。

「オラオラオラア!!!」

『無双正拳突き』の連打でアーチャーを徐々に追い詰めていく、発動する暇を与えなければ衝撃を散らす技も使えないだろう。

およそ二十ほどは叩き込んだらう、しかしまだ終わらせはしない、さつき喰らった以上の攻撃を叩き込んでやるぜ。

「……あああああつ!!!」

痛さからくる叫びか雄叫びかわからないがいくら叫んでも無駄だ、このまま決めてやる。

アバラが折れたりする感覚をきちんと噛み締めておくんだな。

そう思つて俺は大きく振りかぶつて一撃を繰り出す、この次は大技で終いだ。

「がつ…!?!」

しかし次の瞬間、衝撃が腹へ衝撃が響いてきていた、その正体は浮き上がった膝だったのが突き飛ばされて距離を取った瞬間に分かる。

なぜならアーチャーが膝を突き出しているからだ、およそめり込んでいた最中に放電をしていて、気づかないように俺に纏わせていたんだらう、隙が僅かに生まれた瞬間をうまく狙つてくるとは……全く抜け目の無い野郎だぜ。

「叫ぶだけで終わるわけが無いだらうに、油断しすぎだよ」

起き上がりながら笑みを浮かべるアーチャー、結構やられていくせにやせ我慢なんてしてんじゃねえよ、今の行動は所詮お前の消える時間を少し伸ばしただけだぜ。

「まさか『余裕だぜ』なんて思つていないだらうな?」

こつちを睨んで冷たい声で怒りを示すアーチャー、別にいいだろうが、強い人間に許されたものだ。

それをどうこう言いたいなら俺と同じくらい強くなってみろよ、無理だろうけどな。

「まあ、そっちが強いのは認める、気の貯蔵がマックスでも俺じやお前には勝てないかもな……でも、『反逆』するには丁度良い頃合じやないか？」

そうアーチャーが言った瞬間『気』が放電をやめて少しずつ落ち着きを取り戻す。

しかし心なしか『気』の量が増えているのが感じられた、さつきよりも多くなっている。

「デメエ……何しやがった!？」

俺は疑問を投げかけた、手加減していた様子は無かったしそんな暇も与えなかったはずだ、そこから考えられるものは一つだが……

「私が令呪で『気』の回復を命じたんだよん、この分だと少しは戻ったんじゃないかな？」

俺の疑問の答えをアーチャーのマスターが言ってくる、やはりそうだったのか。勝負所を知っているにしても結構きわどい状況での判断だな。

もう少し速くにやっても良かったはずだろうに、一歩間違えれば悲惨な結果しかなかったんじゃないのか？

「気力自体が少ないからそんなに回復出来ないけどな……行くぜ、ランサー……」

そう言うときアーチャーが『氣』をバングルの中へと集約していく、更にそれを外して握りつづす。

『氣』が腕に纏うように放出されると、それから少しずつ腕から下っていき掌へと集まる、集中された『氣』は眩いほどの光を発していた。

『心猛りて吼える、技光りて冴える、体逸りて滾らせる

我は全てを尽くして汝を討つ者、氣にて天を割り光で汝を穿つ者

『逆賊の最期』!!!  
ラストリベリオン

なるほど、宝具の威力を底上げする意味合いが有ったのか……。

冷や汗が止まらない、もはや出し惜しみをしていたらこちらが終わってしまうと脳が警鐘を鳴らしている。

さつきまで放っていた俺の『星殺し』を凌駕する程の太い光線が俺に向かって放たれていく、俺も手をかざして迎撃をする事にした。

「……喰らいやがれ、『星殺し』!!!」

こつちも今使える『氣』を全てつぎ込む、勝ち負けが決まってしまう場面だ、俺は腰を落として歯を食い縛り力を込めて臨戦態勢を取る、そして相手に向かつてこちらも技を繰り出すのだった。

お互いが光に包まれていく、余りにも眩しい光に目がおかしくなってしまうようだ。

それに続いて爆発が起こる、俺は光に包まれるだけでは終わらず結構な距離を吹き飛ばされていた。

立ち上がる事はどうにかできるがボロボロの体が震えて上手く動けない、しかも頭の方もぐわんぐわんと音を立てていて状況の把握が全く出来ていねえ。

もしアーチャーの気の量があと少しでも多かつたらお陀仏だっただろうな、あいつ自身の『気』の少なさがどうにか俺の意識を留めたみたいだ

そんな事を考えながらアーチャーをよく見ると立つては居るものの肩で息をしてやがる。

持つてる限りでは最高の札を切ったんだろうがそれじゃ俺は倒せなかったってことだ、

しかしこつちもまだ足が前に進まない、こうなったら後はあいつに任せるのが良いな。

俺は一言息も絶え絶えにセイバーに一言言うのだった。

「デメエ、ここまでやったんだから…外すとかふざけた真似すんじゃねえぞ…」

ランサーが肩で息をしてオレに言ってくる、当然だ、ここまでやってもらって外す訳

がない。

本当に最高の状況だ、これなら絶対に決められるだろう、オレはそう感じて鞘から刀を抜いた。

「ああつ、絶対に外さない」

そう言つてオレは微笑みながら踏ん張つて刀を構える。

歯を食いしばつて腕と足にも力を込めて最高の一撃を想像する。

「ハアツ!!」

大きな声を出して気合を乗せる、そして今まで戦わずに溜めていた速度を解き放つ。

この一撃は外せない、そんな思いが詰まった一撃だ。

勢いがついたその一撃は見事に標的を捉えていた、深々と貫いているのがわかる、良い手応えだった。

ここまで深ければ霊核の損傷は免れないだろう、オレはこの作戦の成功を感じ取る。

安心したから頬が緩みそうになるがすぐに力を入れて真剣な顔へ戻す、オレは僅かに刀を捻り更に損傷を深くする。

オレは当初の目的を果たしたのだ、余韻を噛み締めながら刀を引き抜いて鞘に戻す。

息を吸い込み一拍置いてオレは言葉を呟こうとする。

その呟きを聞く相手は首を回して俺を見つめてくる。

その目には驚きがあった、無理も無い、予想していない状況から抵抗をする間もなく突き刺さったのだ。

「ッここで脱落だな……ランサー」

オレは刀を突き刺した相手に冷たく言い放ったのだった。

## 『槍兵は去りゆく』

ランサーはぐるりと首を傾けていった。何が有ったのかを確かめる、と言っても目の前にオレの顔が有れば一体何があつたのかは一目瞭然だろう。

「なんだ……おい……れ」

血を吹き出しながらオレを見るランサー、いくらオレの顔を見たところでこの状況が変わることはない。

今その胸に開いている傷もお前自身が感じているものも全て本当の事なのだから。

「見ての通りだ、刀でついさつきまでお前を刺してたんだ」

どうやら理解が追いついていないようだ。それとも決して痛みを感じない奴だから刺されたということに全く気づかなかつたのか？

「ふざけん……話が……ち……がう」

「えっ、話が違うって何のことだ？」

オレはランサーの言葉に首を傾げる、おかしいな。

オレはあの時の約束を思い出して一つでも間違いがあつたか頭の中で照らし合わせ



てみるが別に嘘を言った覚えはない。

つまりどこかをランサーが勘違いしているだけだろう、ライダーの事ばかり考えておざなりに聞いていたから話があまり入ってこなかったんだだろうな。

「お前……アーチャーのトドメをさすって……いったんじゃ……」

やはりあの同盟の提案の時の事か。

思ったとおりランサー自体が勘違いをしていただけのようだ、これはきちんと教えてあげないといけないな。

「確かにそう言ったよ、でも『誰の』なんていってなかったぞ、勘違いしている奴にこんな事を言うのも変だけどちゃんと話を聞いていたかい？」

オレはあの時に標的の指定などしていなかった、それをランサーが自分に都合が良くなるように解釈をしただけの話だ。

「聞いてなかったにしても普通ならそう思うはずだろ、もしかしてあの言葉も嘘だったのか？」

亜巳に聖杯を渡すのも……」

歯軋りをしながら憎しみを込めた声色で言葉を搾り出すランサー。

おいおい、流石に今のは人聞きが悪いな、まるでオレが常日頃から嘘をつくような人間だと思われるじゃないか。

「『止めを刺す』事も『聖杯を譲る』事も本気でいった言葉だよ

でもさつきも言ったけど止めについては指定してなかったし、聖杯はお前が居なくても渡せる

だからオレはお前をアーチャーと戦ってもらうためだけに動かしただよ」

オレはランサーに向かつて言い放つ、それに今回の作戦はお前だったから成功できたし上手くこつちも利用が出来た。

痛みを感じないであろう体。

時間が経つにつれて、逃げる選択肢が消えていく無謀な戦い方。

こちらの要求に得があれば食いつく欲深さ。

そして条件に関しても正直に信じてしまう愚かさ。

どれか一つでも欠けていたならこつちも考えて策を練っていただろう。

しかしここまで要素が揃ってたらもはや考えなんてものは必要じゃなかった。

「くそ野郎が……地獄に……落ちやがれ」

オレを睨みつけながら呪詛の言葉を吐き、そのままうつ伏せに倒れていくランサー。

辺りを見渡すといつの間にかアーチャーのやつは逃げていた、きつと令呪を使つたんだらう。

「そつちが思うほど憎まれ者は簡単に死なないものさ」

文句を言うのならば初めからオレを疑って提案を蹴るのが正しかったはずだ、それもせずに恨み言をいわれても困る。

オレは最後にランサーに一言いって、この河原から去っていくのだった。

俺は意識が混濁し始めていた、あいつに貫かれて血が流れただけじゃない。

霊核の損傷が激しいのだ、流石に戦う気持ちがあつても体が動かなければ何も意味を持たない。

「くそっ……あいつを追いかけないと……」

目もあまり見えていないが何とか体を引きずっていく、そんなときに亜巳の声が上から聞こえてくる。

「ものの見事にあの子達にやられたねえ」

声に悔しきは宿っていなかった、まるで当然の結果だというような声色だった。

俺は一瞬耳を疑っていたが次に聞こえた言葉で一つの確信を得ることができた。

「やつぱりこつちを嵌めるために私たちとの同盟を願ったんだね

情報を次々に出したのも『死人に口無し』だからか

まあ、きちんと約束を守ってくれればそれでいいけどさ」

亜巳はあの交渉の中にあつた穴やセイバー達がこういつた真似をするというのを事前に見抜いていたのだ。

それなのに俺には一言もその情報や危険性を伝えてはいなかった、俺はその事に愕然として言葉を搾り出していった。

「どうして……なんだ……」

こっちは信頼をしていたはずなのに亜巳は重要な事を俺に黙っていた、つまり俺は亜巳に信頼されていなかったんじゃないのか？

「どうして……むしろ何でも教えてもらえろと思つていたのかい？」

只でさえ少ないあんたへの信頼が壊れてた事にあんたは気づかなかつたんだろ？

俺はその言葉に答えずに苦い顔をする、確かにその様な事には気づいていなかった。

もし気づいていたのならこのような状況にもなつておらず情報を共有できたからだ。

「信頼が崩れた原因として決定的なのが天への暴言だ、それに重ねて自分勝手な行動もあつた、まあ、それ以前からもこっちの言葉を聞かないといったことはあつたけど」

あの時の言葉を聞き逃してはいなかったのか、そして自分勝手な行動と言うのは交渉の時の俺の行動だろう。

「それにあんなに甘い話だつたなら罠だと気づかないほうがどうかしてる、あいつらはあからさま過ぎたのさ」

そう言つて棒をくるくるとまわす亜巳、俺は一つ疑問に思つたというよりは余りにも無謀だと感じた事を聞いてみる。

「それなのに疑わなかつたのか、セイバーのマスターの事を……」

仮にあいつらが約束を破つたら一体どうするつもりなんだ、抵抗することも出来ないのに。

俺がそう聞くと亜巳は冷たい声で俺に言い放つ、その考えが当然だというように。

「何年も過ごしてきた家族とたつた何日かの人間のどつちが信用できるかは分かるだろう？」

それに天は私に逆らうような真似は出来ない、なぜなら怖いからね、約束を自分から取り付けたのに放り投げるような真似もしないさ」

「信用した結果が……これじゃあねえか……」

俺は歯を軋らせて地面をひっかく、信じた結果がこれだったなら何の意味もない。

こちらからすれば聖杯を手に入れるための駒にされたのだ、いい気もしないだろう。「まあ、今回は一本取られたね

それであんたがこうなつたつてのも分かるよ、でもそんな事はどうでも良いのさ

私とあんたは無関係に近いんだからね

そんな人間がどんな酷い目にあつた所で心は痛まないし、それで仮に幸せになれるな

ら安い犠牲だよ」

そう言って微笑んでいる亜巳を見て俺は背筋が凍りそうだった、こんな笑顔をするとは想像できなかつたのだ。

「……でもこのまま恨まれるのも後味が悪いし、少しは礼呪って奴で花を添えてやるよ」  
そう言って亜巳は手を掲げる、そして息を吸い込んで命令を言い始める。

「令呪にて命じる『傷を癒せ』

重ねて命じる『体力を戻せ』

そして最後に命じる事は……」

亜巳が令呪で俺に命じる。

するとさつきまで体に有った傷がなくなっていく、ぼろぼろだった体に力が入る。

最後に命じたことは聞こえなかつたが一体なんだつたのだろうか？

すると自分の手が少しずつ光の粒子になっていくのが分かる、そろそろお別れつてわけだ。

「速くあんたを待っている人間の所に帰るんだね、いつまでもぐずぐずしてたらそつぽ向かれて捨てられちまうよ」

俺はその言葉に苦笑いをする、これは痛い所を突かれた。

確かに俺にめそめそぐずぐずして暇はない、帰らなくてはいけない場所へ向かわな

くは。

俺は頭を振り雑念を払って、地面に手を着いて起き上がる。

「起き上がったんなら私とあんたの関係はお終いだ、達者でやりなよ」

そう言うのと亜巳は歩いて去っていく、そのまま俺の方を二度と振り向くことは無かった。

俺はその姿が見えなくなるまで見送っていた、そして見えなくなった後に亜巳とは逆の方向を歩き始める。

俺は体の全てが粒子となり意識を手放す時まで自分を待っていてくれる人間への思いを馳せるのだった。

聖杯戦争……七日目。

落ちたのは『最速』のサーヴァントであるランサー。

残りはセイバー、アーチャー、ライダー、アサシンの四人。

戦う者が半分となり戦いも佳境へと差し掛かる。

月光は戦うものを照らし夏の熱気がこれからの更なる激戦を予感させていた。

## 『蜘蛛と牙 前編』

朝日を浴びて起き上がり目を擦る、そして顔を洗いにタオルと歯ブラシを持って洗面台に向かつていく。

丹念に歯を磨き、顔を洗い、鏡で自分の髪を整えて口角を上げて一言呟いた。  
「誰にも安眠を邪魔されずに起きる、これぞ王の朝に相応しい」

あの阿呆のせいで数日の間十分な睡眠をむさぼる事ができなかった、そのせいか朝に弱いはずの王は速く起きる事に適応していたのだ。

それによつて今日は普段ならば決して起きることのできない時間に起きていた、そして何をやるにも暇だから身だしなみを整えていたのである。

「今日はこういった予定なんだ？」

「アーチャーの奴を倒しにいく、あのうるさい騎兵もないからな、王が止まる理由が無い」

あれから時間は過ぎて食事食べている風間から王に対して質問が浴びせられる。

ちなみに王は食事を食べずに立ちながら風間の質問に答える、あの狐どもはこの手で倒さねばならん、仮に誰かにやられていても止めはこの王がさす。



足は完全に癒えてはいないがあいつの実力に対して丁度いい具合に合わされているだろう。

「気になったんだがどうしてそこまでアーチャーたちを狙うんだ？」

「奴らはこの王を一度不意打ちとはいえ脅かした

その無礼の代償としてじきじきに罰をくれてやる、それゆえに狙っているのだ、風間よ」

続けて問いかけてくる風間の言葉に王は口角を上げて微笑む、たいした理由など要らない、気にくわないから狙うのだ。

「すげえ単純だな、でもその顔を見ると楽しそうじゃねえか」

風間がそう言つて王に笑いかけてくる、最初に『楽しむ』事を言ってきたのはお前だろうに、その言葉に応えてやるのもまた王である王をのつとめというものだ。

「そう見えるならそれでいいがな、速く出てアーチャーの場所に行くぞ、王の記憶が確かならばきつとあの場所だろうからな」

そう言つて王は風間と共に歩いてアーチャーを狙いに行く、当然記憶を辿つて向かつていく間に注意を払わなければいけない事がある。

まず見通しの良い所を基本歩かない、あつても人が多い所に紛れ込んでいく、狙撃を主体をしている奴が相手なのだから不意を突かれられないようにするのは当然だ。

あとは急いで動いて体力の無駄な浪費を抑える、これは王と風間が気をつけることとして一番のものだ、いきなり息を切らして闘うなどといった無様な姿をさらしたくは無<sup>い</sup>。

そう考えながら歩く事、実に三十分。

王の記憶に間違いは無くどうやら真つ直ぐにこの場所へとこれたようだ、しかしその道の途中の間で戦いがあつたことは一目瞭然だつた。

壊れた壁やひびの入つた屋根の瓦や道路が目<sup>に</sup>飛び込んでくる、これだけの破壊力のある攻撃が出来る奴は一人だけ心当たりがある。

それは王<sup>オレ</sup>に忠告を促した忌々しい騎兵か、もしくは知らない最後のサーヴァントであるランサーだろう。

「こりゃあ酷いぜ、一体何がこの近辺であつたんだ？」

流石の風間もこの状況に驚いている、こういつたものは慣れだからな、出来れば慣れるべきものではない、こういうものに慣れてしまつたら少しずつ常識が消えていくからな。

「大規模な戦いが起こつたか、もしくは逃亡した奴を被害を度外視して追い掛け回したかだ」

そうでなければここまでの被害は無<sup>い</sup>、そしてそんなに流血の跡も無い為後者の方と

判断する、それから考えた結論は戦ったサーヴアントはランサーだろう。あの騎兵ならば不用意に女を傷ついたり追い掛け回すような真似はしないはずだ。

「そうか、でどうやって相手に宣戦布告をするんだよ、やっぱ『アサシン』らしく後ろから行くのか？」

風間がこつちに質問をしてくる、確かにそれが一番やりやすいだろうし相手に攻撃が出来るだろう、しかしここは普通ではない発想で裏をかいてみるのも悪くは無い、だから王はこつち<sup>オレ</sup>が提案するだった。

「あえての真正面で驚かせる、まさか『暗殺者』が策も弄さずに真つ向勝負を挑むなど思ってもいないはずだ」

奴らの事だから籠城を決め込んでいるだろう、ならば真正面から赴いてやればよい、わざわざ裏口から入ったり窓を壊してなどと言った小細工はもしかすれば前の戦いで警戒されているだろうからな。

「騒がしい音を立てて入って行ってやるが良い、そうすれば多少は驚いた顔をこつちに向けてくるであろうよ」

王は風間に対してそう告げる、騒がせるのはこいつの得意分野だ、それに乗じて奴らに手痛い一撃を見舞う、最高の奇襲戦法だろう。

「任せろ、全力で楽しんでくるぜ!!」

そういいながら風間は勢いよく階段を駆け上がる、家の中の奴が気づいた所でもはや追いつくことは出来ない。

王はその風間についていく形で同様に駆け上がる、手に気を宿して既に一撃を見舞う準備を済ませておく。

「邪魔するぜ、答えは聞いてねえ!!!」

風間は豪快に扉を蹴破って入って行く、ちようつがいが音を立てて扉が歪む、扉は非力さゆえに吹っ飛びはしなかったが壊れていたせいでゆらゆらと不安定にゆれていた。

「なっ!?!」

アーチャー達は不意をついて入ってきた風間に対して驚く、その一瞬の間に王は逃さないで風間を押しつけて姿を見せる、するとアーチャー達は驚きが重なって一瞬硬直していた、この機会を逃さず一撃を叩き込んでやる、奇襲作戦はおおむね成功と言う所だろう。

「敵が入ってきているのに一瞬でもほうけるとはな、愚かな奴らだ!!」

そう言つて王は手を出し、アーチャーを女ごと一気に吹き飛ばして窓に叩きつける、そのまま窓は割られて地面へと落ちていく、王はその姿を見た後に降りていき対面した。

「くっ、こんな真つ直ぐに来るなんて予想外だぜ」

アーチャーが驚きながら言ってくる、どうやらアサシンというクラスにとらわれて王が不意打ちや暗殺行為で来ると思っていたのだろう、浅はかな予想だ。

「貴様と違つて王はそういつたものを好まんなのでな、それに倒す時は自分の目で相手の苦痛に悶える顔を見ておきたい」

王は口角を上げてアーチャーを見る、後ろからやつてしまうと一挙一動に揺らぐ顔は見れないからな。

揺らいだ顔は面白いものだ、強気な奴が歯の根が合わないほどに震えて歯を鳴らす時の恐怖の顔といえどもはや最高の一言である。

「そして喋っている暇などは与えんぞ」

再び王は手<sup>オレ</sup>を前に突き出して衝撃波を放つ。

絶え間なく放たれたこの一撃にアーチャーが苦い顔をする、相殺しようにも満身創痍の外見、更に見えない攻撃、この状況と一撃に対応するのはかなり難しいだろう。

「くっ!!」

飛び上がった一撃を何とかやり過ぎたみたいだが甘いな、その程度は読んでいるぞ。

無難な方法だがそれは愚策だったな、人は普通ならば空中で動く事ができない。

「愚かな奴だ、焦っているとはいえ王の領域に入ってくるとはな」

貴様に残された道はこのまま王の一撃を無防備に喰らうだけだ、再び地面へ落ちていくがいい、アーチャー。

「そのまま無様に墜ちてゆけ、痛みにもた打ち回る姿で王を満足させてみる!!!」

意地の悪い笑みを浮かべて俺は衝撃波をアーチャーに放つ、防ぎきる事ができずにアーチャーへ衝撃波は直撃する、すると重力落下に加速がついて一気に地面へ叩きつけられそうになる、王はその姿を見届けていた。

「くそっ!!!」

衝撃が襲う瞬間に受身を取ったか、その動きは少々面白みに欠けるな。

そこはあえて衝撃を利用して飛び上がって反撃ぐらいすればいいものを、それに『気』を用いた攻撃を放っていない。

余裕を出しているつもりなのか、それならば阿呆な奴だ。

「既に貴様が『気』の枯渇をし始めているのは見抜いているぞ、アーチャー」

あそこまで『気』を使う機会がありながら使わなかったのは違和感を覚える、あの奇襲の時に放ったレーザーを用いれば王に痛手を負わせることは出来るし、『気』で強化をすれば王の衝撃波を回避して手数で圧倒することも可能になるだろう。

「その無様な姿での消滅はこの王の考えにはそぐわん、せめて消える場所ぐらいは選ばせてやろう、王に牙をむいた者への手向けだ」

街中で暴れるのは王は好まない、楽しみながら戦う時に関係の無い人間の顔が悶えていたとしてもそれはただ目障りなだけで、それならば極限まで邪魔の入らないところで自分が決めた標的の顔だけを見て戦いたい。

「ならついできてもらう、丁度いい場所があるんだ」

その気持ちを感じ取ったからか王の言葉<sup>オレ</sup>をアーチャーは受け入れる、こちらから後ろから襲う真似はしないがあの手の方<sup>オレ</sup>に気を付けておこななくてはな。

「風間、間違っても先走るなよ、何をしてくるか読めていないのでな」

一応風間に釘をさしておく、牽制しておかないと勝手に窮地に飛び込みかねん、そうなったら折角今さっきやった不意打ちは何にも意味を成さないからな。

「分かっているぜ、あつちは俺が先に行ったら後ろから殴ってくるような奴らだつてのは分かっている」

普段の飄々とした顔ではなく真剣そのものといった顔だ、これならばいちいち釘をさす必要もなかったか、この戦いは最高の状態で挑むことが出来そうだ。

気を引き締めアーチャーが消えるべき場所へと向かう、辿り着いたのはおよそ一時間後。

その場所は採石場となっていて誰の邪魔も入りそうになく、消えるには最適の場所となっていた。

「なるほど、いい場所だ」

王は手を広げ指を曲げ伸ばししながらアーチャーに言う、これだけ広ければ王も心置きなく衝撃波を放てる。

そして今まで使ってこなかった技を開放する、全てを使って貴様を倒してやるぞ、アーチャー。

「……」

アーチャーは慎重になっているのか無言でこちらを見ながら行こうかどうかというそぶりを見せる、気が使えなければあの時みたいに活発な動きも出来ないのか、全く詰まらん奴だな。

「来ないのか、ならばこちらから歩み寄ってやる」

こっちは近距離で衝撃波を浴びせる事を考えていたため、慎重になっているアーチャーにスタスタと近づいていく。

まるで散歩をするように何食わぬ顔でこうするのが当然だといった顔で近づいていく、するとアーチャーは驚きながらも構えてこちらの足の動きを注視し始めた。

「ハアツ!!」

こちらがアーチャーの間合いに入った瞬間、呼吸を吐き出して叫ぶように腹めがけて攻撃を放ってくる、その攻撃には見覚えがあった。



あの阿呆が使っていた技ではないか、そしてそれよりも切れが無く速度も無い、となれば当たるかどうかの結果は火を見るよりも明らかである。

「その技で王をどうかできると思ったか!!」

障壁で弾いて一瞬後退した所に衝撃波を放つてやる、無防備な状態で喰らったアーチャーは一気に吹っ飛んでいき地面を何度も跳ねていった、あんなに跳ねたらそれはそれでなかなか爽快なものだな。

「がはっ……」

起き上がってくるアーチャーは苦しそうな顔を浮かべていた、さすがにアレだけ吹っ飛ばされてしまったら怪我が開くだろうな、だが容赦はしてやらん。

王は冷たい目と声でアーチャーに向かって一言言ってやった。

「もしアレが奥の手なら……貴様は目障りだ、散れ」

そして王は深呼吸をしてアーチャーを睨む、あの程度で倒れてくれるなよ、そのおもいあがりの代償として恐怖をその身に刻みつけてやる。

そう思つてアーチャーに向かつていこうとした時、女がいきなり手を掲げだした、一体何をやるつもりなのだろうか、もしさらに興ざめさせるような内容であれば貴様も塵にしてやるぞ。

「最後の令呪にて命じる『全てを尽くして戦え』!!」

なんと令呪の使用ときたか、傷こそ治っていないが力が漲っていくのが見て取れる、傷を治さなかったと言う事は回復手段をどこかに持っているのだろう。

「さて、これから第2ラウンドだよん、そっちのマスターは令呪を使わなくて良いのかな？」

女が風間に対して声をかける、王とアーチャーの戦いに対して邪魔にならないように距離を取っているみたいだな、いい判断だ。

「使う時になればアサシンがちゃんと言うんでね、もしくは危ない時でもないと使いませんよ」

風間がそう言つて女に返答をする、なかなか良い事を言う、王の判断に身を任せ危機があるときにのみ動く。

それが一番単純で強いやりかただ、お互いの考えが多少分かっておけば使つていい時と悪い時が自然と分かるからな。

「そうか、そういうやり方なんだ……、じゃああぶない状況に追い込ませてもらおうかな」

女がほくそ笑んで王達を見る、ずいぶんと大きく出たようだがその傷だらけの体で何処までできるか見せてもらおうではないか。

「やれるものならばやって見せろ、その言葉がいかに無謀か思い知らせてやる、貴様らは

跪く心の準備をしておくがいい」

王《オレ》は笑みを浮かべてアーチャーと女を睨みつけて殺気を送るのだった。

## 『蜘蛛と牙 後編』

令呪に続いての爆弾発言、あの女の顔を見るに嘘ではなく自信があるようだな、もし奴らが本当に王を危険な状況にさせる事が出来る秘策があるなら戦いが更に激化していくだろう。

そう王が考えてアーチャーの攻撃に対して備えようとした時に女が不意に言葉をお放ってくる、一体何のつもりだ？

「有限実行の為にここで本当の奥の手を出そうか、これを見たらさっきの言葉がどれだけ本気か思い知るよ」

女が微笑みながら後ろへ下がっていくと、それに連動するようにアーチャーが後ろへ下がって距離を取る。

するとアーチャーになにやら武器を渡していた、アレが奥の手のような、武器を組み立てていき腰に装着させて眩い光を発する。

「ほほう、随分と大掛かりな武器の様だが……見合うほどの物なのか？」

光が消えて姿が見えたとき目に飛び込んできたのはびったりとした黒のライダースーツを着て腕に機械の装備を施しているアーチャーの姿だった。

感想として言うならば機械部分だけで十分なのではないかと言う疑問とその格好のどこに意味があるのかと言う呆れが大半であった。

「そんなふざけた格好と装備で何が出来ると言うんだ!!、貴様の令呪は今無くなった

そして奥の手はそれだけ、どうあがいても詰んでいるぞ、アーチャー!!」

王は<sup>オレ</sup>やけになったとも取れる服装を見て笑う、科学に頼って勝とうと思うのは愚かなことだ。

まだ王も人間が相手であれば多少は生死について考慮するがこういったものには容赦しなくて済む、鉄塊にして終わらせてやるぞ、アーチャー。

「それはどうかかな？」

これは松永と九鬼の共同開発兵器、武神を倒す為の秘策だ、君を倒すにはうってつけだよ」

女が自信満々な事をいつているが王はその言葉に溜息をつく。

元々強い奴に使う物だからそれより弱いと思つてゐる奴にも通用すると感じているならば滑稽すぎる。

その機械の機能に対して王の技能が相性が悪く噛み合わなければこいつらの思つたような展開にはならず使つた意味は無くなるというのに。

「そんなにも自信があるならかかって来い、いかに無駄か思い知らせてやる」

王はその言葉に対して受けてたつてやると言うように手招きをする、そのしぐさに触発されたのかアーチャーが突っ込んできた、一体どのような攻撃が飛び出すのだろうか。

「上等、まずはこいつだ！」

「『スタン』」

機械が機能の言葉をいった瞬間電撃が手甲へと集まっていく、なるほど属性を付与させるための補助機能が豊富な武器か。

格好はいただけないが機能だけ考えればなかなか優秀な物だな、だが力を漲らせていても今のあいつが使ったところであつた意味は無い。

「はあああつ!!」

雄叫びを上げて王へ拳を振るう、策も無しに殴りに来るつもりだろうがその一撃を真正面から受け止めて現実を目に入れさせてやる、絶望するのだな、アーチャー。

「いくら力を漲らせても負傷している分ぬるいな、障壁で防げるような拳ならば属性をつける意味が皆無だ、無様に舞え」

障壁が目の前に展開されてその一撃は完全に止められていた、ヒビすら入らなかつたと言う結果にアーチャーが驚いた顔をしていたがこの結果は当然のものである。

王は感想を述べて衝撃波をアーチャーの顔に見舞う、顔がのけぞつた瞬間に腹へと放つて再び吹きとばす、さっきの様に跳ねる事は無かつたが相当強い衝撃が体を襲つただろ

う。

こちらも容赦せず一撃だけで済ませず畳み掛ける方向に切り替えていく。

「ちっ、今の俺じゃあ攻撃が通らないか……ならこいつしかねえ!!」

『リカバリー』

傷が直つていき僅かに『気』の充実を感じる、とは言つても元が少ないのか雀の涙程度の回復量だったのが分かった。

「ほほう、まさか回復機能を隠し持っていたとはな、思った以上に良い機能が搭載されているみたいだな」

構えて次のアーチャーの攻撃に備えておく、さあどのように攻めてくる?

「さっきより威力が上がっているとはいえ生半可だったなら再び弾いて手痛い一撃を浴びせてやる。」

「もう、余裕かましていられないぜ、今度はこっちだ!!」

『ファイアー』

腕に炎が宿っている、まさか別の属性まで持つているとは驚きが絶えない装備だ。

しかも使用しているアーチャーの速度もさっきよりも格段に上がっている、障壁を張って万が一に備えてバックステップの準備をする。

「ハアッ!!」

炎を纏った拳が障壁によって遮られる、しかし先ほどとは威力が高くなっているのが伺える、僅かにきしんだような音を立ててその拳を弾いていく、後ずさりしたアーチャーの拳があつた場所にはヒビが大きく入っていた。

「属性による一撃も回復機能もなかないものだ、しかしそれでも王の前には無力だそんなものは所詮弱者の足掻きにすぎん、これで確信したぞ

そのようなガラクタなど王にとつては障害にもならん」

王は自分の中に有る自信をアーチャーに向かつて吐き出す、あの程度ならば危険視をするような機能は一つも無い、強いてあげるならば回復機能ぐらいのものだろう。

「それに『気』は雀の涙ほどしか回復していないようだな、しかもその機能も多く使える代物では有るまい」

「さすがに見抜かれているか、それは当たっているよ、使えて後一回つて所だぜ」

感じた事が当たっていた事にも喜べるが、なるほど、それは良い事を聞いた。

それならばその目障りな機能だけでも崩壊させておくか、こちらからすれば厄介なところの上ない。

「その機能を破壊させてもらうか……おまけにいくらか一緒に壊れそうだがな」

王は一気に詰め寄る、手を背中の方へ向けて衝撃波を放ち、それを推進力へと変えていく。



あつという間にアーチャーの手甲にまで迫っていく、これで厄介な回復機能も壊せるはずだ。

「なっ!？」

「捕まえた……壊れろ!!」

アーチャーもこの速度の変化に反応することは出来なかったのだろう、驚きの顔を浮かべて無防備なまま手甲に衝撃波の一撃を喰らう、この一撃によつてきつと多くの機能が損傷したはずだ。

「くそっ!!」

回復した肉体でアーチャーが蹴りを放つ、至近距離で放てば当たると思ったのだろう、まさか障壁を張れないからいけるとでも思ったのか？

「はっ!!」

だとすれば甘い、さつきとは別の方法で避けることができる、阿須手を舌にして衝撃波の反動で空に浮かびそこから立て直して着地する、距離もきちんと完璧にとることができた、最高だな。

「まさかアレを避けるなんてな……」

アーチャーが睨んで呟いてくる、こういった場面で避けれる技量があるから強いのだ、さてさすがにあの武器の機能もかなり損傷したのだから終わりは近いはずだ、何を

仕掛けてくる?」

「現在使用可能な機能は…『ファイアー』、『スタン』、『フラツシュ』、『フィニツシュ』か」  
よく装備を見て機能を確かめているようだ、どうやらあの真剣な眼差しを見ると決定打としての機能はまだ残っているようだ、つまりそれは長く感じられたこの戦いにもどうやら終わりが近づいていると言うことだ。

「次の一撃に繋ぐ為にこいつだ!!」

「『フラツシュ』」

アーチャーが構えて大きな声でこちらに言葉を放つて来る、そして次の瞬間に目が光に包まれた視界を失ってしまっていた。

「目晦ましか、こっしやくな真似をー」

目が見えた時に距離が取られたのが分かる、どうやら予備動作の為にわざわざあのような真似をしたのだろう、どうやら次の一撃で最後にする気だな、そういった雰囲気は採掘場を包んでいる。

「さあ、これが最後だ!!」

「『フィニツシュ』」

アーチャーが叫ぶように言ってくる、そうか、それが最後の手ならば王も最大オレの技で返してやろう、勝利を更に確実なものとする為にな。

「王の牙の前に無力を噛み締めよ、塵芥!!」

足に『氣』を集中させながら王は助走に十分な距離を取っていく、十分な気がたまつたと感じた瞬間に一気に王は駆け出していく。

この勢いのある速度と思い切りの良さこそが際大の一撃を放つ為に必要なものなのだから。

さあ、いくぞ、ありつたけの声を振り絞って叫び齒を食い縛って全力で放つて奴を屠る一撃へと昇華させろ。

「征けよ『フアング』!!」

王は勢いのまま足を振りぬいて大きな一つの形ある衝撃波を作り出す、その一撃は気による圧力と振り上げた速度により風を切り裂いていく。

奴への手向けとしては上々の一撃であろう、それと同時に奴からの攻撃も放たれた。

しかし見えた瞬間光線の弱さに王は悲しみを感じた、王の牙に比べるとなんと脆弱な光線か、おおよそ溜めておくべき時より速く使ったのが理由であろう。

その光線は衝突したものの王の牙の威力を僅かに弱めただけであった。

そのまま牙はアーチャーを飲み込んでいき、地面を数メートル薙いでいった。

「奥の手も尽きたな、アーチャー」

王の言葉に反応したのか、倒れていたのにゆらりと亡者のように起き上がるアー

チャー、その目には光は無く焦燥していて、勝ちに対する望みは微塵も感じられなかった。

「まだ、やれる……ぜ」

そう言つて放つたアーチャーの余りにも惨めな一撃が王の頬を打つ、振りぬくことも出来ずに威力は無い。

これならば猫か赤子が叩いたほうがまだましなものだ。

「この程度の攻撃なぞ避けるまでも無い、そしてこの王に触れたこと……」

ただ、触れたという事実がこの王にとっては許しがたい事であり徹底的に息の根を止めさせる理由になつていく。

「万死に値する!!!」

もう一度避けられない間合いから『フアング』を放つ。

その一撃はアーチャーを容易く飲み込み吹き飛ばして地面に叩きつけて転がしてゆく。

見ていて爽快なものであつた、これを見れば王の苛立ちも晴れるというものだ。

「ぐっ……何でこんなにも強い」

地面に手を付いて王に憎しみと悔しさが混じつた視線を送ってくるアーチャー、王がただ強いだけでこれほどの差がついたわけではない。

この状況にはきちんとした理由がある、それは……

「貴様の敗因は己の考えを揺るがし詰めを見誤った事だ、アーチャー」

痛ましい傷跡が残っているアーチャーを見下ろして王が言う、きちんと自分のプランを練っていたのであれば一度失敗した時にしつこく追って王達を一人でも多く減らすべきだった。

それなのに一回籠城しようとした事で居場所が突き止められて己の札を何枚も切らされてしまった、つまり詰めの甘さがこれだけの差を生む原因になってしまったのだ。

「なるほど……じゃあ今度はこっちから聞くが何でこっちを狙ってきたんだい、わざわざ遠距離が得意な奴とやりあうメリットなんて無いはずだけど？」

確かにその疑問はあるだろう、疲弊している相手であったり近接距離が得意な相手にこの牙を食らわせれば事足りるのだ、それをわざわざ遠距離が得意な相手を優先したのか、その理由は至極単純なものだ。

「貴様が王を脅かしていた、そしてこのようにうろろされるのが目障りだったのだ、それが理由だ」

ただ気分を害した、それだけの事。

王を脅かすなど分不相応な事をやられたという屈辱である、傍が聞けば馬鹿らしいと思うだろう、しかし王の怒りを買うには十分な理由であった。

「なんだ、あのキャスターやライダー達のためかと思つたのに……」

理由を聞いた後アーチャーが苦笑いをして呟いてくる。

なんとも的外れな事を言う奴だ。

王は溜息をつき見下しながら冷たい声でアーチャーへと自分の考えを告げてやる。

「くだらんな、奴らの為になどありえない、王は王の為に動く」

常に戦いの勝者は一人だ、今回は例外でこそ有るものの普通であれば絆や思いやりというものは欠片も要らない」

力を伝え攻撃するのも地面に手を突き立ち上がるのも己である。

自分だけが良ければそれで良いのだ、他人がいなくては戦えないのは弱き者の証拠だ。

王はその言葉だけを残してアーチャーたちの目の前から去っていった。

俺は地面に座り込んで痛みを堪えて笑顔を燕姉に向けている。

「すまない、負けてしまったよ」

素直に謝罪の言葉を述べる、勝てる可能性を見せておきながらあんなにもあつさりとなげてしまったのだ。

「流石に限界だったようだね、あのランサー戦で札を切りすぎたのが悪かったようだしこつちも堪えて逃げに徹すればよかったと思う」

燕姉は負けた理由を冷静に言ってくる、確かにランサー戦で逃げたおけば今回のアサシン戦は勝てただろう、宝具まで使つてランサー一人に躍起になつてしまったのがいけなかつたな、きちんと全体を見渡して配分をするべきだった。

「そうだが……ランサーならあの性格上、速く逃げていたとしたらどこまでも追いかけてきてただろうな」

しかし俺は苦笑いをしてその考えを自分で否定した、家に爆撃してくるような奴が常識で計れるわけが無い。

「そうだね、あんな相手を計るのは間違いだよ、

そして話は変わるけど負けちやつたから『願い』は叶えられない、これから自分の力で何とかしないとね」

苦笑いした俺の気持ちを察してか燕姉もその言葉を肯定する、そして今有る結果を目の前にして落ち込むわけでもなく冷静に分析して自分の中で結論付けていた。

『聖杯』が無くてもやり遂げられそうだな、負けたことを引きずっていないし安心できそうだ」

その姿勢を見て俺は苦笑いを微笑みに変える、やはり思っていたようにたくましい人

だ。

これならば俺がいなくても、何かに頼る事が無くともやり遂げられるだろう、俺はその確信を胸にいだいていた。

「うん、心配なんかしなくてもいいよ、今まで頑張ってくれてありがとう」

褒め言葉を受けて俺は微笑んでいた頬を更に緩めて口角を上げる、負けはしたものの報われたのだと言う事、それをはつきりと感じ取れた。

「ああ、俺はただ祈る事しかできないが……応援しているよ」

俺は微笑を浮かべたまま激励の言葉と共に粒子となつていく。

強い奴らと戦えた事、策を張り巡らせて脱落させた事。

今回の戦いを思い返せば案外悪くない、むしろ楽しい戦いだつた。

『次』が有れば今度こそ負けない、その思いを胸に秘めて俺は目を閉じた。

聖杯戦争……八日目。

落ちたのは『三騎士』の一人でもあるアーチャー。

残りはセイバー、ライダー、アサシンの三人。



策謀を得意とする者と猪突猛進な者が残った。

知略で力を絡めとり聖杯をその手に掴むか。

力で知略の網を破って聖杯をその手に掴むか。

遂にこの戦争にも終わりが近づいてくるのであった。

## 『最後の休息』

アサシンがアーチャーを倒した夜から明けて聖杯戦争は九日目に差し掛かっていた。

全てのサーヴァントは息を潜めるかまたは己の深い傷を癒している、緩やかに時間が過ぎていく中、ある一つの陣営が戦いとは関係のない場所で朝から行動をしていた。

「ワン子ちゃん、疲れてねえのか？」

俺が今どこにいるのかといえば河原だ、そこで鍛錬をしているワン子ちゃんを見ながら俺は声をかけていた、タイヤを引きながらよく何往復できるもんだよな。

「問題ないわ、この程度で音を上げてはいられないもの!!」

そう言うワン子ちゃんの額には汗が浮かんでいる、努力する女の子って良いよな、ちよつと汗でびっちょり張り付く服がまたたまらない。

「しかしこんな夏の日の日差しじゃ満足に見えないな、少しでも弱ければもう少しはつきり見えるのに」

そう言つて俺は顎を撫でる、何も悩みがないというようにワン子ちゃんの前では振舞うがこの平和な状況がいつ終わるのかという不安は有る。

「残った奴が誰なのかも一切分からないんだもん……」

考えられる限り最悪なのはランサーとアーチャーの二人が残っている事だ、両方とも因縁があるから二人で来ることも視野に入れて考えたら不安になってしまふ。

素手の殴り合いではあの痛みを感じない奴は面倒だし遠くからの狙撃には対応が遅れる。

「……まあ、最悪のパターンになる可能性は低いからそこまで考え込む必要もないか」

不安を消し飛ばす為に前向きな言葉をいって気持ちを落ち着かせる、悪い方向にだけ考えてもワン子ちゃんにまで不安を伝染させるだけだ。

「ふう、朝の分の鍛錬は終了!!」

そんな事を思っているとワン子ちゃんがこつちへ駆け寄ってくる、さつきよりも汗が滴っているもはや服も透けそうなほどだ。

「お疲れさん、汗すげえぞ」

俺は眼福だと感じながらもねぎらいの言葉をかける、胸の不安はまだ晴れないが気を引き締めれば大丈夫だろう。

次の相手を予想してどう戦うべきか、宝具は今どれ程復旧できているのか、そういう事を考えて空を見上げる。

「ありがとう、どうせなら一緒にやれば良かったのに」

ねぎらいの言葉に対してお礼の言葉を返してくるワン子ちゃん、残念な事に鍛えても

強くなれないんだ。

「一緒にやつてたら止めたりする人いないからね、倒れないように見張るのが仕事ってことで」

そう言つてワン子ちゃんのお誘いを断る、俺は青く澄み渡る空を見上げて深く息を吸うのだった。

場所と時間が変わつて昼頃。

二人の男が起き上がる、前日の戦いの疲れもあつたのだろう、この時間まで彼らは久々の惰眠を貪つていた。

「イヤー、よく寝たよく寝た」

「うむ、体が軽いな」

王は風間に同調をするように言葉を放つ、こんなにもゆつくりした時間を過オレごすのはいつ振りだったであろうか。

「で、こんなゆつくりしているけど次の予定はきちんと考えているのか？」

風間がいつて来るが当然次の予定は考えている、この王をただ惰眠を貪るだけの奴だと思ふでない。

「騎兵かセイバー、相手取るのはどちらでも問題はない、速いか遅いかの違いだけだ

ちなみに一度も見ていない槍兵がいるが見ていないということも消えたのだろう

王は消えたかもしれない奴の勘定をするなど面倒でしかないから割愛しているぞ

当たればその時はその時だ、王が<sup>オレ</sup>ゴソゴソ逃げ回るようなやからに遅れをとる訳がないからな」

首を鳴らし笑みを浮かべて言い放つ、騎兵に対して宣戦布告をしていたこともあり、あいつの戦力を計算することに重きを置いていた。

しかしあのセイバーもまた厄介な男だというのは分かっている。

あのバーサーカー戦でとどめをさしたり強烈な一撃を食らわせた身のこなしや力は伊達ではない。

だから今になっては標的を絞るのではなく相手に対して対応していかなくてはいけない。

「二人とも武器を持っているがあのアーチャーのように武器を壊せばこわい物はなくなる

そこらにいる塵芥と同様だ、負ける理由は見当たらんし壊す事も別に難しくはない  
そこから考えたら勝つことは容易に考えられる」

笑みを浮かべて勝てることを確信する、戦う前からそういつた気持ちになれるのは大

変良い事だ、今までは服装がまともでなかったり力がまともでなかったりしたような奴らなのだからな。

「良いのかよ、そんな余裕かまして負けたりはすかしいぜ？」

「たわけ、負ける理由がないから余裕を出すのだ」

王は笑いながらいつてくる風間の言葉に反論をする、初めから負けることを考えるのは馬鹿のやる真似だ、そして王が負けることなどないのだから考える必要も無い。

この局面まで使つてこなかった『ファンング』をさらけ出した事で衝撃波では足りなかつた決定力の増強を図れた。

これが思つた以上に大きく響いている、そして足の怪我も完治しはじめているからこれからの戦いは万全な体勢で戦うことが出来る。

「ここで負ける事を考えていては何も始まらない、お前は楽しむ為にも常に前を見ればいいのだ誰が王の牙にかかり果てていくのか、しっかりとその眼に焼き付けておけ、風間」満面の笑みで俺は風間にいう、そして王の腕は確信と余裕に満ちているのか、無意識の内に気が集まっていた。

「奴らの呻くさまを見て悦に浸るまで秒読みの段階だ、王を散りぎまで楽しませてもらうぞ」

そういつたあと一拍置いて体が僅かに震える、楽しみでしようがないのだろう、奴ら

の顔が歪むさまが早く見たいものだ。

「あの二人は何処まで楽しませてくれるのだろうか、奴らならば王を失望させる事はないだろう、」

このような言葉が出てくるのはきつと今まで戦ったおかしな奴らと同じような奴らではないという気持ちからだろう。

それから一拍置いて王は部屋一杯に哄笑を響かせる。

カーテンの隙間から優しい日差しがしつこいくらいに差し込む昼下がりであった。

また場所と時間が変わって夜。

ある男性と女性がお互いにこれからについて話し合っていた。

「で、次の標的は誰なんだよ？」

マスターがゴルフクラブを触りながらいつてくる、次の標的は決まっている、アサシんだ。

ライダーならば最後に不意打ちが出来る、だから安牌として残したほうがいい。

出来る事ならば同士討ちになってくれるのが一番ありがたいがそこまでは望めないだろう。

「一応次勝てば王手なんだ、不安要素であるアサシンを狙う」

考えていることは伝えず次が重要だということとあぶない相手だということを簡潔に伝える、マスターは理解してもすぐに忘れてしまうから苦労する。

「なるほどな、で…勝てるのかよ？」

不安な気持ちから出た疑問ではなく純粋な気持ちで聞いてきたものだというのが声色で分かる。

勝てるかどうかでいえば正直五分五分といった所だろう、いかに接近できるか、またどれほど被弾せずにいられるか、それが重要なことになる。

「まあ、そつちが思うよりは悪いものじゃあないね、きちんと気をつけるところを押さえれば問題はないだろうさ」

その言葉が信じられないのか、少し怪訝な顔を浮かべるマスター。

オレはその顔を見て苦笑いを返していた、いくらなんでもあからさま過ぎる反応だな。

「確かに思っている通りあまり戦っていないけど態度に出すのは感心しないな」

「仕方ねーじゃん、今まで一対一で勝ってねーんだし」

まあ、マスターの言うとおり真つ向勝負で勝った勝負があつてないようなものでもない、バーサーカーなんて多人数だしランサーは不意打ちだった。



「でも勝っている事には変わりない、多人数でやっても不意打ちでやっても勝てば官軍つてな負けちや元も子もない」

ただ事実だけを見ればあいつらに勝っているのはオレだ、だったら勝てる可能性があると言つても大口を叩いているわけじゃないだろう。

「そういうもんか、納得したぜ」

こつちのいう事がむずかしいと感じたらあつという間に納得してくれるマスター、こういった話し合いでは楽なのだが出来れば作戦の時ぐらいは真剣に投げ出さずに聞いてほしい。

「とりあえずは勝てるように速度をなくしたり、衝撃波を軽減できる環境が備わってる場所を探すかな」

取り得を無くしてしまえば十分勝ち目を増やせるからな、その代わりこちらもトラップを使う機会が減つてしまつて真つ向勝負にもつれこみやすいのが難点だ。

「でもオレには刀がある、近距離でやりあえばそう簡単に負ける事はないはずだ」

鞘に収めている刀を撫でて呟く、アサシンならば近距離で戦えばいい、またライダーの場合はバイクの傷やタイヤを狙つて機動力を落としてたりして速度で優位に立つたら勝算が増えるだろう。

「あとはマスターを狙うのが有効だろうな、そこはそつちにもお願いすると思うけど頼

むよ」

二対一で勝てるのか思うほどの自惚れはない、仮にそんなものがあるならそれを捨てて堅実に勝つ事を考えていかなければいけない、油断は絶対にいつか身を滅ぼすことにつながるんだから。

「そういうのは任せとけよ、うちは頭は悪くても喧嘩するのは好きだから!!」

考えが一段落したあとに協力してほしい事を伝えると、こつちの要求に満面の笑みで答えるマスター。

さつきまでとは打って変わって生き生きしている、よっぽど暴れるのが好きなんだろうな。

「とりあえず言えることはこれだけ、明日からはまた戦うんだから体には気をつけてくれよ」

そう言ってオレは夜風に当たる為に外に出た、少し作戦を練っていたから頭が熱くなっていた分いいくらいだ。

「後少しで終わると思うと長いようで短い戦いだつたな、ハチャメチャな事だつたけど時々これくらい度が過ぎたのもいいかもしれない」

呟いた事は誰にも聞かれていないだろう、オレは微笑みながら家に戻っていく。

このまますぐに眠って明日の活力にしよう、相手も同じ様に蓄えているだろうから、

そして明日からは今までとは比べ物にならない激戦になるだろうから。

聖杯戦争……九日目。

各々が休息を取って明日に備える、そして全員が感じている。

これが最後の休息であることを。

明日起きればそれから此処に戻ってはこれない。

今まで以上に大きく押しかかる現実。

それを押しつけて各々の居場所に誰が戻ってくるのか。

月光が再び沈む時誰が消えるのか。

それは朝日が昇って始まる明日だけが知っている……。

## 『暗殺者と刀 前編』

聖杯戦争も遂に日数が二桁となっていた、朝日が差し込んで全員の意識が覚めていく。

戦いも大詰め、緊迫していく空気。

外は快晴、景色は朝露が反射して輝いていてもまばゆい。

あの時は協力し合っていた者同士が次は敵となって自分の目の前に現れる、まるで示し合わせたかのようにあの日一堂に会した河原に、あるサーヴァントは向かっていた。

一番先に来ていたのは金髪のサーヴァント、傍らにはバンダナをつけたマスターが一緒に歩いていった。

「来たのは良いが何にもねえし誰もいねえぜ、無駄足だったな、こりゃ」

風間が辺りを見回してそう呟く、確かに草や土だらけで人はいない。

どう考えてもこの行動は失敗だろう、流石の王も苦笑いで風間の言葉に肯定する。

「流石に戦いに関して何の考えも無しに此処に来ても意味がなかったようだな、いやは

や困った困った」

そう思っていたらじやりじやりとした音が耳に聞こえてくる、距離は分からないがそう遠くはないはずだ。

王オレ以外にもこの場所にきている奴がいたとはな、期せずして戦いが始まるか、なんと面白い事であろうか。

「おいおい、困ったと言った直後に足音が聞こえてくるとは運がいいぞ

そして相手も近づいてきているようだ、ここで出会うとはあまりにも出来すぎだがさて：誰が来る？」

衝撃波の射程まではおおよそ数瞬もすれば入ってくるはずだ、先にこちらが一撃を入れて主導権を握らせてもらうぞ。

「トウヲトウヲトウラー!!」

しかし予想とは裏腹に後ろから声が聞こえてくる、前から靴が砂を噛むじやりじやりとした音が聞こえているにも関わらずだ、その瞬間王オレは悟った、あの音は惑わせる為のものであるという事を。

「くそつ、まんまと騙されてしまったか!!」

そう言つて王オレは前方へ風間を吹き飛ばす、相手の狙いオレが王ではないのが分かっていたからだ。

風間は何とか体勢を立て直して不意打ちの攻撃による被害を最小限に食い止めていた、令呪で逃がそうにも完全に不意をつかれて最善の対処ができなかった。

しかし何故相手が後ろからやってきたのか、その答えは少し向こうに見える人影であった。

よく見ると遠くでゴルフクラブで砂遊びに興じている奴がいた、アレが後ろからやってきた声の主のマスターだろう、そして見覚えの有る男が目の前に現れていた。

「貴様だったか、セイバー……」

王は苦虫を噛みつぶしたような顔で睨みつける、いきなり主導権をとられているという事実、それはこの戦いにおける上下関係を表しているかのようなようであった。

「浅いみたいだけどその一撃は思った以上に効くぜ」

セイバーは避けさせた事で浅く済んだ風間の傷についていつてくる、随分と真剣な眼差しで攻撃した場所へ視線を向けていた。

王はその視線につられて風間の方を見る、すると驚く事がそこにはあった。

「なっ、これはっ!?!」

傷は浅く済んでいると思っていたのだが風間の足にはその予想よりも深く斬られた傷が残っていた、一体何が起こったのだろうか？

冷静に場面を見て考えられるのはただ一つ、セイバーが今持っている刀であった。

「貴様のその刀…宝具だな、しかも予想するに『人間』に対して攻撃力が上がるやつだ」  
 オレ 王は仮説を立ててセイバーに聞く、とはいっても正直これくらいしか不自然な点はない  
 のだがな。

「正解、オレの宝具である『えんしゅうてつ洲虎徹』はお前が予想している通りの能力だ、人間に対し  
 てこれは絶大な効果を発揮する」

セイバーは宝具の真名を明かす、あの騎兵や射手の様に言葉を言わなくても開放でき  
 る代物なのだろう、常時発動でなければ今よりも深い傷を負ってしまう、風間は安全な  
 所にいたほうがよさそうだな。

「なるほど、なかなか厄介な物を最後に隠し持っていたようだな、だがそれでは王には対  
 抗できないはずだが？」

ただ一振りの刀では對抗するのは物足りないはずだ、あの花火で目晦ましをしようと  
 も衝撃波では煙は吹き飛ぶ、光も少々では意味がない。

「確かに普通ならそう思うだろうな、オレ自身が遮蔽物の有る所でやろうと思つたぐら  
 いだ

でも冷静に考えたらオレにはこの刀があるからね、これが有れば衝撃波は防げると  
 思つた」

オレ 王が考えていた事はセイバーも十分に感じていたようだ、それに賛同する事を言いなが

らセイバーの奴は構えて笑みをこぼす。

随分とあの刀に自信があるようだがおろかな奴よ、所詮は王に今日壊される運命にあるというのに。

「その自信を壊して敗北を胸に刻ませてやるぞ、セイバー」

王はその笑みに対して笑みで返す、手を開いてだらりと下げて相手の次の行動を見極める。

「悪いけど自信じゃなくて事実を述べているだけさ、防げるから防げるといったんだ」

刀が光ってセイバーの顔を照らす、その顔は笑みが無くなって真剣な眼差しでこちらを見ていた。

なるほど、さつきまでと違って気迫が漲っているな、その言葉に偽りはないのだろう。

「そうか、ならば言葉通り防いで見せる!!」

王は衝撃波をセイバーに向かって放つ、戦いが本格的に始まった。

草木が大きく揺れている、砂埃が舞い上がってセイバーへと襲い掛かっていく。

「こうすればたやすい事だ!!」

刀を盾に突っ込んでくる、なるほどそういう方法か、随分と頑丈な奴のようだが果たしていつまでもつか。

「しかしこれは突破できまい!!」



王は目の前に障壁を張る、刀の一撃で壊せるようなやわな代物ではない。

仮に振り切って攻撃すれば即座に弾き返してそのままカウンターで衝撃波を叩き込む、これはどのように乗り切る気だ、セイバー？

「それならばこっちだ!!」

セイバーがそう言ってポケットから花火を取り出して火を付ける。

煙を巻き上げながら王の障壁に向かってくる、ロケット花火の威力はたいしたものではないだろう、つまり狙いはロケット花火による煙幕と言った所だろうな。

それに乗じて後ろから王を切り裂こうという算段の様だな、しかしそれを読んでいないとも思ったか。

「この程度のちやちな煙では意味がないぞ、セイバー!!」

障壁を解除して衝撃波で全ての煙と火花を吹き飛ばす、しかしその煙に乗じて後ろに回っていると思つた気配は無かった、一体何処に消えたのだ？

「上だ、アサシン!!」

風間が大きな声でこちらに言葉をいつて来る、その言葉通り上を見上げると飛び上がった状態で突き刺さると落下してくるセイバーの姿があった。

「くっ!!」

王はすぐさま障壁を張って攻撃に備える、まさか後ろから来ないで上とはな。

普通ならば衝撃波を避けられない様になるから選ばない道だが花火と合わせる事であえて挑んできた、だが結局は無意味に終わるな、セイバー。

お前の攻撃をいち早く察知して声をかけるマスターがいる、それだけでお前の攻撃は遮断できるのだ、一筋縄ではいかんと言う所を見せてやるぞ。

「残念だったな、セイバー」

障壁の前で着地をしたセイバーに王は言う、もし風間が遠ざかっていたならば今の一撃で致命傷を負わせる事が出来たであろうに。

「それは間違いだぜ、アサシン」

セイバーは悔しそうな表情を浮かべずに笑みを王に向けていた、一体何故だ？

お前の攻撃は今さっき全て遮断されてこの様にいらめっこをするしかないはずだ、そうだというのに随分と気丈な振る舞いをするではないか。

「何だと？」

少し首を傾げてこのセイバーの自信の素を考えて見る事にする、遠くを見据え可能性をいくつも考える。

そして一瞬脳裏によぎった事はこの状況において今一番冷や汗をかくことであつた。

「ヒヤッハー、がら空きだぜえ!!」

その冷や汗が背中を僅かに伝う瞬間後ろから気配を感じる、まさか自分の攻撃を囨に

していたというのか!?

これでは王オレの反応が間に合わん、後ろに張れない短所がここで王オレに牙をむいてこようとは!!

「ちつ、マスターが後ろから来てたのかよ!!」

そう言つて風間が後ろから向かつてきていたセイバーのマスターに蹴りを繰り出す、そのおかげで何とかこの場をやり過ごす事はできた。

まさか上と後ろからの二段構えの攻撃だったとはな、もし風間がいなければ今のやりとりで終わっていたかもしれん。

まったくこの男は油断も隙もあつたものではないな。

「小細工をしてくるとはな、少し肝を冷やしたぞ」

王は息を吐き出しセイバーを睨みつける、奴に気持ちを悟られないように努める。

こいつならばこちらの弱点を見抜けば的確に狙うほどの技量はあるだろうからな、後ろを取られ続ければこちらでも面倒になつてくる。

「まあ、マスターから遠ざけたつて考えたら最低限の事はやり遂げたつて所だな

そりゃあ、欲をいえば倒せればよかつたんだけど贅沢はいえないもんだね」

そういうセイバーは刀を構えてじりじりと間合いを詰めてくる、障壁を張るには十分な間合いだがさつきのような事があれば危険だ。

「どうするんだ、アサシン、もうマスターは近くにいないぞ」

セイバーの奴が間合いをつめながら言葉を投げかけてくる、さっきの時にマスターの援護があつて避けられたからそんな事を言うのだろう。

「阿呆が、あいつは貴様のマスターをすぐに倒してこつちに来る

その時に青ざめた顔を晒すのは貴様だぞ、セイバー」

王オレはそう言つてセイバーを睨み返す、今まで風間の助け無しでも避けてきた王オレには脅しにすらならない、それを教えてやるぞ、セイバー。

・  
・  
・

「オラア!!」

相手がゴルフクラブを振り回してくる、頭に当たればその時点で俺はぶつ倒れちまうだろう、アサシンの奴から距離を離されているからあいつをサポートする事もできねえ。

「くそ!!」

俺は悪態をつきながら蹴りを繰り返す、相手も喧嘩に慣れているのかひよいひよいと俺の攻撃を避けていく、速さでは負けてないんだろうけどきつい事は変わらない。

「最初の時以外ぜんぜん当たってねえぜえ!!」

笑いながらこつちに迫ってくる相手、年齢だけ見たら俺たちより年下みたいだがずいぶん凶暴な女の子だ。

こうなったらこのゴルフクラブを何とかするしかねえ。

「そいつ、真剣白刃取り!!」

俺は振り下ろされるゴルフクラブに狙いを定めてはさんでとりにいく、頑丈なら食らってから掴めばいいんだけどこつちの方がカッコいいだろうからな。

「なっ!?!」

相手も俺のいきなりの構えに驚いたのか一瞬速度が落ちる、よっしゃその速度なら挟めるぜ、きやがれ!!

頭に向かって一直線に振り下ろされる、タイミングを間違えたらやばいがもうここまで来たなら引き下がれねえぜ!!

「イエー、成功、成功!!」

俺は速度が少し緩んだ瞬間を見逃さずにながちりと両方の掌で挟んで、ゴルフクラブの攻撃を止めていた。

冷や汗が頭を伝ってくるけど成功して本当に良かったぜ。

そう思うと俺は成功した事に喜びを隠さずに叫んでいた。

「くそが、離しやがれ!!」

相手が振り回して俺の手からゴルフクラブを何とか離させようとするが無駄だ、挟んでいた状態からしつかりと掴んでいる、このまま奪い取って遠くへ放り投げてやるぜ。

「こいつ……離さないつもりならウチにも考えあるぜ!!」

そう言つて蹴りを繰り出してくる、ようやく武器を諦めたか？

さつきとは打つて変わつて優勢になった俺はゴルフクラブを遠くに投げ捨てて応戦を始めるのだった。

朝の日差しは完全に無くなり昼下がりに差し掛かる時間。

無関係な人々が昼の食事や仕事に勤しむ中に確かにある非日常。

終わるのはきつと夕焼けが川原を覆う頃になるだろう。

その時の勝者がどちらなのかは激闘を繰り広げる四人でさえも知る事は無い。

## 『暗殺者と刀 後編』

マスター同士の戦いが二転三転している間にじりじりとセイバーが距離をつめてこちらへと近づいていた。

応戦の為に手を前に突き出し王はセイバーを吹き飛ばす一撃を繰り出し、一気に距離を開かせようと試みる。

「とりあえず……王にそれ以上近寄るな、セイバー!!」

王は衝撃波を放ってセイバーに攻撃を仕掛ける、距離をとる為にできるだけ大きなものを飛ばす、仮に刀で防いできた場合はそれに合わせた対処法も当然考えているぞ。

さあ、どうくるんだ、セイバー？

「通用しないのは分かっているはずだ、無駄だぜ!」

再び刀で防いでこちらへ接近をしてくるセイバー、そのままこちらにまっすぐに向かってくる。

防ぐのは予想済みだった、その上であのような大声で切羽詰った感じを出したのだ、これで王は平然とお前の射程距離から逃れられるというわけだ。

「防いだその一瞬の間に反動で後ろに下がるようにすれば問題ない」

反動を利用して王はセイバーから離れる、これでさつきのような状況になる事はもうないだろう。

しかし次の瞬間王は予想できなかった光景を見ていた。

「残念だがこっちの方がお前より速い、向かい風のような衝撃波を一度逃れればこの通りだ」

なんとという事に目の前にセイバーがいたのだ、なんとと言う速度だ。

こちらの速度をはるかに凌駕するというのは流石に予想外だった。

王が衝撃波で手に入れたアドバンテージが、あまりにもあつさりと逃げていったではないか。

「そういうえば貴様はあのバーサーカーの時でもかなり速い動きをしていたか

貴様に作戦を立てさせる時間を与えないように距離を抑えたが……

目の前に来るほど速い所を見ると貴様も速度をあの時抑えていたようだな、しかし王の次の行動をよく読めたな、セイバー」

王は笑みを浮かべて余裕の表情を装う、ここで顔に出してしまえばこの距離ではセイバーの斬撃を対処するのが難しいというのがばれてしまう。

ここはあえて言葉のやり取りでこちらの危機的状況を知らせないようにしなくてはな。



「あの距離からなら衝撃波以外の選択肢はそっちに無い

そしてこれはあくまで予想だったが障壁と衝撃波は同時に使う事はできないと読んだ」

予想は当たっている、その通りだ。

王は障壁と衝撃波を同時展開することはできない、だからこそあそこは飛んで下がったのだ。

「あの大博打をきっかけに王の手を狭めて追い詰めるつもりだったと言うわけか」

睨んでセイバーを威嚇する、まさかあの煙幕から今までを一連の流れとしてみていたとはな。

王は攻撃を次々とやるだけでその様な流れは考えてはいなかった、それがこのような状況を生んだという訳だ。

「ああ、その通りだよ、あの無茶がどうにかここまで来る隙をくれた

普通なら障壁に阻まれて懐に潜り込む事もできないだろうからな」

確かに普段の状態であったならば王は堅実に障壁でセイバーの攻撃をやり過ごしていただろう。

だがそれができなくてもこの状況を覆す方法が無いわけではない、あのセイバーの武器さえ破壊してしまえば勝利の天秤は再びこちらに傾くだろう。

「だからどうしたというのだ、この王にお前の攻撃は通らん、そんな刀など押し折ってくれる!!」

そう言つて至近距離からセイバーの刀へ向かつて王は衝撃波を繰り出す、しかし次の瞬間王の目に飛び込んだできたのは信じられないものだった。

「何だ?!、何故壊れない!!」

一撃だけ、しかも遠い場所の衝撃波であればまだ頑丈だと考えられたが次に喰らつたのが至近距離であれば異常だと感じ取つてしまう。

セイバーはそんな王の叫びににやりとした笑みを浮かべて答える、一体どういった仕掛けを施していたのだろうか。

「残念だったな、オレの『えんしゅうこてつ洲虎徹』は何が有つても絶対に壊せないんだよ

そしてこの距離でオレは外さない、喰らえ、アサシン!!」

刀が勢い良く振りぬかれて王に迫ってくる、この一撃を喰らえばセイバー側に傾いている主導権が確実に取り戻せなくなる。

ここで王は距離を取るのではなくひらめいた一か八かの賭けに出る、今までの王ならば決してこの様な考えを持つことは無かつただろう。

あの無謀なマスターと一緒にいたことでこの様な思想が芽生えたのかもしれない。

もしくはこの真夏の暑さに浮かされたのだろう。

「唯で終わると思うなよ、王が倒れる時は貴様もお終いだ!!」  
賭けを始めろ。

伸るか反るかの大勝負、一歩間違えれば脱落もあるかもしれない危険なもの。  
王は手に気を宿らせて、放たれる一撃に備えるのだった。

氣迫十分に放たれた刀の一撃が描く放物線は顔を跨いで斜めに入ってくる、この一撃に對して王は手<sup>オレ</sup>を突き出して迎撃に備える、齒を食いしぼり、瞬きをせずセイバーの一撃を切り抜けようと尽力する。

「来るがいい、セイバー、この腕をくれてやる!!」

その代わり貴様は命をよこせ!!」

王が一撃を食らわせるために生半可な気持ちで手を突き出しているのは無い、言葉通り腕一本くれてやるうではないか、セイバー。

貴様のその一撃の勢いはもはや緩む事はない。

その振りぬいた次の瞬間に貴様へ全力で衝撃波を叩き込んでやる。

「もらったぞ、アサシン!!」

その罠に一気に食いついてきたセイバー、こうも真つ直ぐにもらつていくのは罠にかけている気がまったくしない、なんだか少し嫌な気分になつてしまふな。

しかしそれでも食いついたという事実は良いものだ、傷ならば令呪で治せるのだから

わざわざ今この時に気にする必要も無い。

この攻撃の痛みを次の瞬間必死に耐えるのが王オレにできる事だ。

「ぐあつ……!!」

犠牲にした腕と胸を僅かに斬られたがセイバーの腹に衝撃波を食らわせる、その一撃には確かな手ごたえがあつた、その証拠にセイバーの奴は後ずさりをしていく。

セイバーと王オレとの距離がかなり開いていた、王オレは微笑んでセイバーの方を見る、王オレだけが痛い目にあつたという事はなくなった。

始まつてからというもの今までセイバーの方へ傾いていた勝敗の天秤はうまく均衡を保つ程度にはなつただろう。

「……あの一撃をまさか令呪を使わずに切り抜けるなんて驚きだ」

セイバーを追撃できないのは面倒だが仕方あるまい、それに奴も追撃はできないのだ。

顔色一つ変わつてはいないが一撃の痛みは体を駆け巡っているだろう、やせ我慢だな。

二人とも痛み分けに終わったというこの結果を受け止める、なんとも締まらない結果となつてしまったな。

「堅実について貴様に勝てるなど都合がいいと思つたのだ

全く無傷でもおかしくないほど博打を打ったというのに：生意気な斬撃をくれたものだな、セイバー」

そう言つて笑みを浮かべてセイバーを見る、斜めから大きく切り裂かれそうだった所を胸と腕だけで済んだのだから結果としては悪くない。

しかし痛みが体を駆け巡っている事を顔に出さずに乗り切るには強がりな言葉を言わずにはどうしてもいられなかったのだ。

「はあっ……はあ……」

俺は息を切らして相手の方を見る、あれからずっとこつちも攻撃を仕掛けてアサシンに近づくように追い込んでいった。

「こつちまで食い下がってくんのかよ……」

相手は嫌な顔をしてこつちを見てくる、何回攻撃してもこつちがぜんぜん下がらずに来ているから面倒になってきているんだろう。

こつちは昔にモモ先輩の攻撃をめちやくちや受けているんだ、この程度じゃぜんぜん倒れないぜ。

「俺は諦めが悪いぜ、そつちが嫌がるほど食い下がるなんて当たり前じゃねえか」

俺は笑いながら相手の方を見る、相手は嫌な顔から呆れ顔に変わってこつちを見てくる。

ゴルフクラブが無くなった後も蹴りとかで俺に怪我を負わせてきている、正直俺の方が相手より傷が多い。

顔もちよつと腫れているし、足とかには痣がちよこちよことある。

「こうなったらためえが気絶するまでぼこぼこにしてやんぜ、オラー!!」

そう言つて蹴りを繰り返して腹を狙ってくる、腕を交差して受け止めるけど受けた腕が痺れてくる、こんな小さい体のどこにこんな力があるんだらうな？

本当に女つて不思議なもんだぜ、俺はそう考えながらアサシンに近づいていく。

ようやく始めの場所ぐらいまで近づいてきていた、これなら俺の声も届くだろう、この戦いが始まってから使つてなかったこの刺青みたいな奴を使つてみるかな。

「この距離まで近づいているしもうあつちの戦いもいい感じだ、使わせてもらおうとするかな」

俺は手を掲げて力を込める、願うのはこの戦いを終わらせる一撃をアサシンが放つ事。

距離を考えてみると相手とはめちやくちや近い、これなら相手の方だつて流石に避けられないだろう。

これで終わらせてまた楽しめる戦いを探そうじゃねえか、行くぜ、アサシン。

「令呪によって命じる『最強の一撃で打倒せよ』!!」

風間が勝負所を見抜いて令呪を使う、この距離で避ける事はできないだろう、良い場面で使ったな、ここで使わなかったら無能と言つて蔑んでやる所だったぞ。

王はそう心で思い、笑みを浮かべながら足に衝撃波を込めて振りかぶる、

「征けよ、『フアング』!!」

王は勢いよく振りかぶっていた足を振りぬいた。

この一撃でセイバーを打倒する為に、この戦いに終止符を打つために全力で振りぬいた。

この距離では例え後ろに飛んでも射程範囲内に捉える事ができるぞ、セイバー。王は貴様の一撃を避けたが貴様は王の一撃を避けられるか？

「ちっ、遅れたが……こつちも令呪を使うぜえ、『その一撃を切り抜ける』!!」

相手のマスターも令呪を使う、お互い初めての使用のはずだが使いどころを心得ている、もはやこれではどちらに勝利の天秤が傾くか分からない。

「はあっ!!」

セイバーの奴が氣迫のこもった声で命令の遂行に力を注ぐ。

フアングの一撃は土を薙いで煙を上げている、セイバーの奴が例え直撃を避けてこの場をうまく切り抜けられたとしても無傷では終われない。

「さらに命じる、『この一撃で決めちまえ』!!」

予想通り痛ましい傷を負ったままさつきよりも凄まじい一撃をセイバーの奴が繰り出してくる、その一撃に対して王も対応しようとする。

しかし体が動かない、『フアング』の後に起こってしまう障壁を張る事のできない僅かな時間、それを狙い澄ましたかのようなセイバーの攻撃。

これを避ける事はもはやできないだろう、王は足に力を込めて刀の攻撃を受ける準備をしていた。

「くっ!!、アサシン、『その一撃を避ける』!!」

風間がその一撃を避けるように令呪で命じる、王は体を振ってセイバーの一撃を回避するように努めていく。

しかしこの動きはあまりにも致命的な時間の差があったというのを感じる、なぜならばセイバーの攻撃はもうそこまで迫っていたからだ。

「甘い、わずかに遅かったぜ!!」

セイバーが避ける王を目で追い僅かに軌道を修正する、その一撃は体を振っていく王



を正確に追っていき、そしてその一撃は見事に王を捉えていた。

「ぐっ!!」

王は刀の一撃に反応してセイバーの方を見る。

反撃として衝撃波を叩き込む事を試みようとして動こうとする、しかしセイバーの方が早く動いていた。

「はっ!!」

セイバーは力を込めて刀を一気に引き抜き僅かな隙も見せずに距離を取っていた、見事な動きに笑みを浮かべながらは言葉を発していた。

「どうやら令呪を惜しみなく使っていたのが実ったようだな、王も使ったが僅かに届かなかったのだろう」

わずかに風間の令呪の使用がセイバーたちより遅れてしまったのだろう、胸に感じるこの感覚からして王を捉えた一撃は霊核を貫いているのだろう、まさかこの王を負かすとはな。

振り下ろす一撃や横に薙ぐ一撃ではなく最速の攻撃でもある突きだったのが一つの要因でもあるだろう。

負けていながら笑みを浮かべてこの戦いを反芻する、一つたりとも手は抜かなかつた、壊せると思ったから自信を持っていた、それが付け入る隙になったのならば仕方

るまい。

「何で負けたのに笑っていられるんだ、悔しくないのか？」

セイバーが王を不思議な顔で見ながらいつてくる、確かに傍から見ればおかしなものだろう、しかしきちんとした理由がある。

だからこそ笑顔浮かべていられるのだ。

「負けて何故笑っていられるか？、それは『楽しんでいた』からだ、負けても顔を歪ませたり言い訳をする余地もない戦いをしたのだ、だから満ち足りた顔を王はしている」

全部を出し切り楽しんでいた、何も残さないほど尽くしていた。

言い訳をして自分の全力を偽る気にはならない、それをしてしまえばこの戦いの時間も無に帰ってしまう。

「そういうものか、オレは必死にやってたからそんな感じはわからないな」

まあ、これ自体は今すぐに分かる必要のないものだからな、充足感に満たされている時にきつとお前は今の王と同じような感覚を覚えるだろう。

さて……あと少しだけ言っておく事があるから言わなければな。

「セイバー……あの騎兵に勝って聖杯を手に入れるがいい、王に勝つたのだからやれるはずだ」

王は笑みを浮かべてセイバーに言葉を放つ、多少は重圧を感じるかもしれないが貴様な

ら不可能ではないはずだ。

まあ、王<sup>オレ</sup>なりの激励という事にしておくがいい、セイバー。

「わざわざどうしてそんな事を言うんだ？」

肩で息をしながらも首を傾げるセイバー、そのような事を言う理由など簡単ではないか。

まあ、きちんとやっておいた方がいいな、お互いが息も絶え絶えの状態では聞こえにくいだろうし頭が上手く働かないだろうからな。

「何故こんな言葉をお前にかけるか？」

さつきもいったが貴様<sup>オレ</sup>が王に勝ったからだ、だからあの騎兵に勝てる<sup>オレ</sup>と率直な気持ちで言っている

セイバー、まかり間違っても無様な姿で負けるなよ」

そう言つて王<sup>オレ</sup>はセイバーの前から立ち去っていく、無様な姿を見られたまま消えていくなど一王<sup>オレ</sup>は嫌だったのだ。

立ち去る時に空を見上げると美しいほど輝く夕焼けが王<sup>オレ</sup>ではなくてセイバーを照らしているのがわかる、それを見た瞬間負けるのもやむなしと思えていた。

「お疲れさんだったな、うちも手の奴二回も使っちゃったぜ」

マスターは切り札である令呪を二画も使用していた、豪快な使い方ではあるが今回に限っては決して間違った決断ではない。

もしあそこで渋っていたらアサシンと立場は逆転していたかもしれないからな。

「ああ……疲れる勝負だった」

オレは息を吐き出して眩く、令呪を使用して全力を尽くした戦い。

相手は最後まで微笑を絶やさずに凜とした格好であった、勝ったはずなのに負けた気分になってしまう。

「まあ、とりあえずは聖杯に王手だ、それだけは素直に喜んでおこう」

刀を鞘に収めて深呼吸をする、最後の相手は既に分かりきっている事だ。

だからこそその相手に対して最大限の敬意をはらって全力で戦ってやる。

オレは心に強く思いを込めるのだった。

「やっぱりもう行くのか？」

風間が残っていた令呪を使い傷を癒し次の命令で王との契約を破棄する。

霊核の傷は治らないが深い傷ではないから消えるまでの時間に余裕はある、最後まで

いは自分の思う俣に動こうと思ったからこそ契約を断ち切ったのだ。

「ああ、最後まで楽しめたが別れの時だ、風間」

まあ、この様な事をしてはどうせ一日もしない間に消えるだろう、しかしこいつの目の前で無様な姿をさらして消える事はセイバーに見られるよりも嫌なものだ。

だからこそその姿を見せぬために王は最後の散歩に出る事にしたのだった。

「なかなかいい時間であった、全ての事柄に楽しみを見出すのも悪くは無かった、ではな」

王《オレ》はそう言つて歩き始める、風間の気配を感じぬように早足で振り切るようにして夕焼けに溶け込むように王は消えていくのだった。

聖杯戦争……十日目

遂に最後の戦いへ進む者が決まった。

令呪という切り札を使ったが、不滅の宝具を持つセイバー。

宝具を破壊されたが、令呪という切り札を温存しているライダー。

肉体は互いに満身創痍。

条件を総合すればどちらにも勝つ可能性は十分にある。

どちらが勝つてこの戦争が終わるのか、それは次の夜の帳とぼりが落ちる時に分かる。朝日が昇れば最後の戦いの日となり眺める景色も全て最後に眼に焼き付ける景色となるだろう。

## 『刀と車輪の舞踏 前編』

セイバーとライダーが残った最後の戦いの朝。

セイバーは刀と花火の準備をして立ち上がる。

セイバーのマスターはゴルフクラブを振り回して生き生きとしている。

ライダーとライダーのマスターはスパarringsの相手をしてお互いの体を解して戦いに備える。

全力で戦うための準備を惜しまない、最後の戦いの場所にお互いの陣営は真剣そのものの面持ちで向かっていく。

互いが向かうのは初めて共闘した場所でありこの聖杯戦争において激戦を繰り広げた河原。

先に来たのはどちらなどと言う事はなくお互いが向かい合う形で同時にその場所に來ていた。

そして向かい合いながら言葉を先に発したのはライダーであった。

「俺とお前が残ったのか、セイバー」

俺は目の前の相手に向かって言葉を発する、正直な所まだ実感が沸いていない。

俺は警戒しながら問いかける、その問いかけに対してにセイバーは真剣な面持ちで答えてきた。

「その通りだ、ライダー」

普段とは違う雰囲気になやりとしながらその言葉をかみ締める、こいつは俺が体の調子を整えている間に他のサーヴァントをあの手この手で倒したってわけか。

「初めてだ、この戦いで真っ向から勝負をするのはな」

刀を抜いてセイバーが構える、俺もそれに合わせて構える、確かに真っ向勝負つてものはお互いしなかったな。

バーサーカーの時なんか四人がかりだったし、策を張ったら真っ向勝負なんてできなくなっちゃう。

「そうか、最後だからそっちも本気ってわけか」

こっちは距離をとって刀の一撃を避ける準備をする、拳を使う奴が刀と真正面から戦つても勝ち目なんて薄すぎるからな。

ここは一撃を避けてからカウンターを叩き込んで主導権を握りにいかせて貰うぜ。



「そういう訳だ、行くぜ!!」

踏み込んできて一気に決着を付けるかのような一撃を放ってくる、こっちの目が速度に慣れない間にやろうなんてせっかちな奴だぜ。

「ちっ!!」

俺は何とかしてその一撃を避ける事を考える、なりふり構ってはいられない。

もし距離がもう少し詰まっていたらと思うと冷や汗が流れ落ちる。

「おお!!」

転がってそのまま後退していく、距離が欲しかったからこれが最善の選択なのだろう。

しかし本当に今のは危なかったな。

「残念だった、もう少し反応が遅ければよかったのに」

セイバーが顔をしかめてこっちへ言ってくる、確かにあと一瞬でも遅れていたらあの一撃で決着か致命傷を負わされていただろう。

「お前の攻撃は速いがこっちも避けるのは得意でね」

そう言うが正直ギリギリだった、令呪を使ってこなかったり目くらましをしてこなかったおかげだろう。

もしくは警戒して構えておいたおかげで備えられたからだ。

「思う事だが本当に面倒な相手だな、避けられる程度の速度もあって、食らっても頑丈だし逆転できる火力があるんだから」

セイバーが構えてじりじりと間合いをつめながらこっちの目を見て言ってくる、何とか速度だけでも上げて少しでも武装によるアドバンテージを消さないといけない。

「とりあえず頑丈な体に感謝して足を速くして、やってみるかね」

セイバーへの対抗策としてスキルを使つて攻撃に備える。

耐久力なら自信が有る、深く斬られない限りはさほどのダメージはないだろう。

しかしセイバーが持つつ刀の特殊な力次第では俺に耐久力があつた所でさほど意味を成さないかもしれない。

それだけが今気がかりな事だ。

「身体能力の強化をされたら楽に攻撃を通せないな、やりようは有る」

突きで体のあらゆる箇所を問わずに狙ってくるセイバー、速い動きで翻弄されて速い攻撃で畳み掛けられる。

身体強化をした所でセイバーの方が速いのだろう、長所を活かしたとんでもない攻撃の数だ。

「ちっ!!」

蜂の巣にされそうなほど激しい突きの連打を腕を盾にして防ぎ距離をとつてやり過

ごす、こつちが一撃をセイバーの体に当てたらそれだけで勝負が決まるのだがそうは簡単にいかない。

セイバーは攻撃を一度繰り出した後に下がっていく、それを繰り返して自分の距離を保ち続けている。

これは厄介な状況だ、こちらが躍起になって突っ込んだらカウンターで手痛い斬撃が見舞われるだろう。

「ワン子ちゃんは後ろにいるから被害は出ないけどまずいかもな……」

セイバーの目くらましを考えたり相手のマスターの眼を見たらワン子ちゃんと俺を分けさせる事は十分に考えられる。

そうなったらかなり面倒な事になっちまう、これなら今の間に令呪を使って万全な状態にしておいたほうがいい。

「ワン子ちゃん命じてくれ、『私を守れ』ってな!!」

瞬間移動で駆けつけるんじゃないじゃなくて恒久的な願いの分、効果は薄まるがこの一戦の間だけなら守り続ける事は不可能ではないだろう。

「うん、分かったわ!!」

令呪によってあなたに命じる、『私を守って』!!」

ワン子ちゃんの言葉を聞いて俺の体に何かしらの力が芽生えたような、漲ってくる感

覚があつた、これで残り二画。

最後の戦いとしては問題のない切り方だろう、セイバーの奴は一体どう対応してくるんだ？

俺は眼差しを向けたまま、思索していた。

「守りを固めてきたか、もつとガツガツ攻めてくると思っていたんだけどな」

セイバーが一旦動きを止めてこつちの出方を伺いながら言葉を発する、確かに今まで攻めて攻めて攻めまくるような戦いをしてきたからな。

相手がよつぽどとんでもない奴でもない限りこのスタンスを崩すつもりはねーよ。

「お前に不用意に突っ込んでいこうにもその前に不安要素は取り除かないとな

お前なら隙を見てワン子ちゃんを襲撃するなんて余裕だろ？」

俺はセイバーに対して問いかける、過剰なほど警戒心を持つておかねーといつとんでもないものがくるか分からない。

「警戒しすぎだぜ、ライダー、相手にばれてるやり方で勝てるわけがないだろ」

セイバーは構えたままこちらに答えを返してくる、こんなに警戒しているんだから柔軟に攻めてくるというわけか。

どちらにしても面倒なんじゃねーか、こつちも使わない頭捻つて対応するしかないのかよ。

俺は頭をかいてワン子ちゃんを守りながらの戦いに向けて気を引き締めるのだった。

「まさか守りに入ってくるなんて予想外だったな」

オレは刀を構えて内心思った事を口に出す、ライダーの戦闘スタイルから考えればあの場は突っ込んでくる。

オレはそこを花火で目くらましをしてその隙にライダーの後ろを取る予定だった。

あいつ自身が頑丈でなおかつ身体能力の差が顕著に出てくる、そんな相手なら真つ向勝負を挑むにしても小細工は必要だ。

警戒しすぎとは言ったが今までの行動のせいだろう、今回はライダーがマスターと近いから後ろを取らない限り攻撃はできない。

しかも令呪で万全の状態にされたから自動的にライダーを延々と攻撃しなければならなくなった。

「結構厄介な場面ではあるが……そこまで悲観するようなものじゃないな」

逆にあいつはマスターから必要以上の距離をとる事はできなくなったというわけだ、それならばマスターをあの場合に釘付けにさえしたら機動力は大きく失われる。

「マスター、あっちのマスターの相手を頼めないかな？」

ここで一手を打たなかったら意味がない、今まで通りの方法で一気に勝ちを引き寄せよう。

真つ向勝負は真つ向勝負だ、オレとライダーという一点においては。

それ以外の蚊帳の外で行われた戦いで支障をきたしたとしてもオレは言葉を裏切つてはいないのだから問題はない。

「任されたぜ、やってやるよ!!」

マスターはゴルフクラブを振り回してライダーのマスターに向かう為に足へ力を込める、これでオレはライダーに専念できる。

「さて、ライダーの宝具をどう打開するかだが……」

やっぱりヒビいつている場所を狙っていくのが一番やりやすいかもな」

ただ単純に延々と斬りつけるだけではライダーに決定的な損傷を与えるのは苦労する、まだ耐久力が低かったり筋力が乏しかったらいくらでもやりようはあるんだが。

まあ、今のところは大きく動こうにもマスターの同行が確実だから単独ではまだまだやりようはあるだろう。

「とりあえず視覚を奪うのが最優先だな、そら!!」

火をつけて何とかマスターをセイバーのマスターへ近づけるように誘導する、段階を踏んでいきながら少しずつ勝ちの方向へ手繰り寄せていかないといけない。

優勢な状態をこちらが保つても攻め所を逸したら瞬く間にライダーが引き寄せてくるだろう、そう考えると背筋に冷たいものが走ってくる。

「本当に厄介な奴を最後に残してしまつたぜ!!」

その背筋に感じた寒気を心のどこかに追いやつて笑いながらライダーへ花火を放つてそれと同時に駆け出す。

煙が目の前を覆つていく中、ライダーの気配を感じ取る。

こちらの足音と同時にじやりじやりと音を立ててこちらを探つてきている、突っ込んできてここちの斬撃をカウンターで叩き込める距離だ。

どうやって煙を克服して優位に立つのか、オレのペースをどのように突き崩すのか、それが今一番興味深く考える事で最も警戒しなければならぬ事。

「はあっ!!」

「なっ!?!」

ライダーの拳が一瞬見える、勘だけでこいつはこんな的確に殴つてきたのかよ!?

風を感じながら何とかして避ける、冷や汗が首を伝うがこの反応は流石に仕方ないことだ。

その拳を驚きながらも避けるとその伸び切った腕が無防備過ぎる、この場面で狙わずに一体どこで狙うというのか。

無言で腕に向かつて鋭い突きを放つ、強烈な一撃を放つ腕を壊してオレが優位な状況へ持っていく、無言なのはもし声で方向を特定されてはたまつたもんじやないからな。

「俺の勘からして……そこだあつ!!」

突きを放つた直後にライダーの声が聞こえて大振りな拳が迫ってくる、何でこうもの確に攻撃の方向があたるのだろうか？

とてつもない運がこの状況を生んでいるというのならそれは仕方ない、しかしもはやオレの突きは止まらない、そんな隙だらけの攻撃なんて避けながらこのまま壊してやるぜ。

……隙だらけの大振りだと？

「まさかつ!?!」

よく見るとバランスを崩しながら攻撃してるじやないか、こいつの狙いはオレに当てることじやない、この攻撃を避けるためにあえてこんな大振りの攻撃を選択しやがったんだ。

そう考えている間にも勢いのついたライダーの拳はオレの顔を通りすぎていき、そのまま大きくバランスを崩していき、転がりながらオレの一撃を最小限の被害に収めていた。

「あれだけのピンチをあんな方法で回避したか、やってくれるな」



掠っただけというあまりにも割に合わない収穫、せめて肩口を負傷するぐらいはして欲しかったな。

「よく言うぜ、無傷だったのにそれ以上望んだらお互い贅沢いつてるようなもんじゃねえか」

ライダーが笑いながらオレの目を見てくる、マスター同士は向こうで戦いあつて、薙刀とゴルフクラブなんて変な取り合わせではあるがかなり白熱しているようだった。

「はあっ!!」

私は勢いよく薙刀を振り下ろす、相手はゴルフクラブで受け止めたかと思つたら薙刀に絡めてきていた、この動きの目的を見抜いた私はすぐに行動へ移していた。

「武器を奪つていくつもりね、そうはいかないわ!!」

一気に後ろに下がって射程から逃れる、それでもしないとあのゴルフクラブ捌きは厄介だ。

いつ薙刀を絡め取られてもおかしくないほどの捌き方だ、警戒していかないといけない。

「甘いんだよ、『天使の様な悪魔の蹴り』!!」

ゴルフクラブでの攻撃ではなく鋭い蹴りが側頭部に飛んでくる、名前こそ長いものの速度はかなりのものだ。

避けようにも距離が距離だったから私はその蹴りを薙刀で受け止めてやり過ぎず、しかし襲ってきた衝撃は想像以上のものだった。

「ぐっ!!」

細い足からは想像の付かない威力で僅かに横薙ぎに飛ばされる、幸い頭にダメージはなかったもののこのマスターは強い、そう私は感じてもう一度構えを取って相手をしっかりと見据える。

「見ても来なきや何の意味もねーんだぜ?」

セイバーのマスターが笑いながら私にそう言ってくる、不用意に突っ込んだら武器を奪ってくるんだから慎重にならなくちゃいけない。

しかしじっと見合うこの感覚にむず痒さでも感じたのかセイバーのマスターは苛立った顔でこっちへ攻撃を仕掛けてくるのだった。

「もう一丁くらいな!!」

セイバーのマスターは頭に攻撃を繰り返してきていた。

同じ場所への連続の攻撃と大振りな一撃の為、さつきとは全然違って冷静に対処する

事ができていた。

さらにここでこつちが攻勢に転じる。

「狙いは筒抜けだし大振りすぎるのよ、その隙に…川神流』!!」

技を繰り出す、相手の攻撃が終わった所で放っているから相手の反応は遅れている、これならば間違いなく相手の体に当たるだろう。

「ぐあっ!!」

大振りの隙を狙われた分、セイバーのマスターは避けきる事ができずに肩口に攻撃が当たって僅かに飛んでいく、残念な事に技が上手くできなかつたのか、思ったような事にはならなかつた。

そう思っていた所セイバーのマスターが体勢を立て直す、その時に私を睨みつける目は怒りに満ちていて仕返しする気満々のものだった。

「ぜってえにてめーの頭をこいつで叩いてやるからな……」

そういつて何かしらのものを口に入れていく、目に力が異様に宿っていくのは寒気がした。

「ヒヤツハー、エンド・オブ・ワールドだぜえ!!」

そう言ったセイバーのマスターは構えてぎらぎらとした視線でこつちに向かっていった、私はそれに対抗をするために構えて腕や足に力をこめるのだった。

お互いのマスターまでもが白熱しあう最終決戦。

今の所どちらも決定的な機会を掴めてはいない。

どちらが口火を切って勝利の糸を手繰り寄せるのか、この戦いにおける優勢か劣勢の天秤がどちらに傾くのか。

それはきつとあと少しの僅かな呼び水があれば答えは出るだろう。

四者四様に構えて攻撃をする為に駆けて行く、再び戦いが始まるのだった。

## 『刀と車輪の舞踏 中編』

俺の拳を避けて斬撃を繰り出してくるセイバー、その速さには舌を巻くしかねえ。

避ければその方向へ即座に繰り出し距離が遠いと見るや突きでこつちを追ってくる、箆手で防ごうにも的確に壊れているヒビの場所を狙ってくるから迂闊に頼るわけにもいかない。

「人の事を厄介だつて言っていたが自分もそう思われている事に気づいてないのかよ」  
苦笑いを浮かべてセイバーとの距離を取る、ワン子ちゃんから必要以上に離れられないからあいつからしてみたらヒット&アウェイの戦いをするには格好の的だ。

あいつを掴んでこつちの一撃を直撃させられたら何とかなるんだけどな、どうしたもんかね。

「やっぱり行き当たりばつたりでやるしかねえな」

難しい事は頭の中から放り出してセイバーの動きを目で追っていく、強化の付けが回ってくる事を考えたら速くあいつを掴むなり何なりしないときつい。

一気に距離を詰める事でセイバーの懐を狙う、速さで負けていてもぶつかっていくようにいけば距離は確実に縮まっていく、

「まるで猪みたいな突っ込み方だな……」

セイバーの呟きが風に乗って耳に届く、そりやあ迂回したりしてたらお前は瞬く間にこつちの攻撃の射程から離れていくだろう、だったら馬鹿にされるような方法でも速く着くのが得策だ。

「おらあつ!!」

俺は突っ込みざまにセイバーの顔面へ攻撃を放つ、捉えきるためにまずこの一撃を避けられる事を前提として逆の拳に力をこめる。

さて、この攻撃を大きく動いて避けるかそれとも小さい動きで避けるか、どっちだ? 「ふっ!!」

セイバーが息を吐いて攻撃を回避する、しかし顔を僅かにのけぞらせただけだ。

よし、この距離ならばまだ当たる、俺は強く踏み込み再びセイバーの顔面へ思い切り拳に力を入れた一撃を放っていた。

「なっ!?!」

まさに当たると思ったその瞬間俺の視界からセイバーが消える、視線をずらしていくとそこには懐に下から潜り込んでいたセイバーの姿があった。

こちらの大振りを距離が詰まってから今に至るまで待っていたかのような動き、ずつとこのような瞬間が来る事を狙っていたのか!?

そこからの攻撃も滑らか過ぎて反応が僅かに遅れていく、拳を戻して攻撃に転じる事もできそうにないのは分かっていた。

「ようやく一撃だ!!」

そう言つてセイバーが刀を横に難いでいく、俺はこの刀の一撃を回避しようとして後ろに下がるがそれ以上に速い剣速が避ける俺の腹を捉えて切り裂いていく。

何とか必死に下がって致命傷は逃れられたが体から痛みによる汗がまるで間欠泉のように噴き出していた。

致命傷を逃れることはできたがそれでも今の一撃で血が多くはないが確かに流れている、このセイバーにとつて優勢な状況をひっくり返すために俺は柄にも無く歯を食いしばつてセイバーの方向を睨んでいた。

「はあつ、うまくやられたな……欲張つたのが悪いかも知れないけどな」

嫌な汗をかいたまま俺はそうつぶやいた。

汗をかいているのはばれていいるだろうが大して問題ではない、今できるのは痛みに耐えてあいつに一撃を叩き込む事だ。

「でも苦あれば楽あり、機会到来つてわけだ」

その機会を活かす為にも俺は苦笑いから笑顔に変えて痛みを押さえつける。

このままセイバーを懐に入れさせたままに俺は戦い続ける事を考える、元よりこつち

が懐に入ろうと考えていたのだから、相手から入ってきてくれたこの状況は良い事だ。

セイバーの腕を掴めばこっちが攻撃に転じて同じほどのダメージを与える事ができる、そうなれば傷ついた体に鞭打つても大きな見返りにはなるはずだ。

しかしそれをするという事はもしもこのやり方で下手を踏んだ時はセイバーの攻撃次第でこのまま決着が付く場合がある。

しかしこのままいけば負ける可能性が高いのも分かっている、つまりどちらにせよ今ここで行動を起こさないと意味がないのだ。

そう思った俺はすこし笑ってセイバーを見ていた、策を多用していた先入観もあつてか真つ向勝負で追い詰められそうになるなんて思わなかつたぜ。

でもこの状況は本当の事だ、今から気を引き締めて必死に勢いを戻さないとな。

足に力を込めて腹の痛みを堪える為に奥歯を噛み締める、そしてこの距離での戦いを始めるのだった。

ようやくお互いを通して会心とも言える一撃を叩き込む事ができた、オレが先に叩き込めたのはあいつが僅かに欲張った事も有ったおかげだろう。



刀はライダーの脇腹から胴にかけての道を通って切り裂いていく、この手応えからしてライダーは致命傷ではないもののかかなりの痛手を負っただろう。

オレはこのまま後ろに下がって優位なこの状況を手放さずにいけばいい、そう思つて距離を開けるために後ろに下がろうとした。

「はあっ!!」

拳を振つてオレに攻撃をしようとするか、反撃を考えているのか、ライダー？

あの一撃を頑丈さと気合だけで乗り切つたにしても確実に痛手なはずだ、速度も格段に落ちている今のライダーならば恐れる事は無い、再び後ろに下がつての攻撃を繰り返していつて堅実に勝ちの芽を摘んでいくだけだ。

拳を振る腕を斬りつけて攻撃を回避しながらも確実に相手の戦力を削ぐ、後ろに下がろうとするがライダーはそれを許そうとしない、次は逆の拳を振つて攻撃をしてきたのだ。

「ちっ!!」

斬りつけずにしゃがんで回避をするがライダーの攻撃は止む気配がない。

左拳の攻撃が終われば右拳、その次は蹴りや頭突きとこの距離を保たせるためにただひたすらにこつちに攻撃を繰り返す。

「ハの……いい加減止まれよ!!」

オレは攻撃を避けていき斬りつけていく事で着実にライダーへのダメージを積み重ねていく。しかしライダーは奥歯を噛み締めて痛みを堪えている、そしてそれと同時に疲労の色を見せないようにがんばっているのだろう、いつになればこの我慢が終わるんだろうか。

正直避けてはいるがこの距離ならば敏捷性も何も無い、いつ当たってもおかしくはない。

そして一撃を当てられた場合、ライダーが腕力を上昇させていればこちらの耐久を大幅に超えてしまい、傾いていた状況をひっくり返されてしまう一撃が放たれるだろう。

「本当に綱渡りだぜ」

一撃が当たれば危ないという事実にも精神面も僅かに削られていくこの場面でオレは何とかなできないかと考える、足を斬るのも良いがそれで蹴りを出されては元も子もない。

「もう一度大振りを狙ってその隙に霊核に攻撃を加えて終わらせる、血を流しすぎたライダーが倒れるという時までこのような事を繰り返すのはごめんだ」

とりあえず方向性を固めてライダーのまだ止む事のない攻撃の嵐を刀で受け流し避けていく事にする。

「らあっ!!」

蹴りが飛んでくるが霊核を防御できる腕が自由になっている為、この攻撃に対しての反撃はしないほうが良い。

拳だけに狙いを定めておいて大振りが来たその時に最大限の攻撃を放つ。

「しっ!!」

アッパーが顎を狙ってくる、わずかに後ろに上がって回避をする、振り切らずにそのまま構えなおして距離を詰めてくる。

回避の時に大きく下がってもこの距離ならばライダーのスキルで詰められてしまうし、もしその分で硬直する時間があれば隙を無駄に見せる事になってしまう。

「……つくづくここが屋内でなくてよかったと思うよ」

屋内ならば壁がある、これだけ連続して攻撃されていたら壁まで追い詰められていただろう。そうなれば自由に動けずライダーの攻撃をもっと早くに受けてこのような場面にはなっていなかったかもしれない。

「フンツ!!」

前蹴りが迫ってくる、後ろに下がっても良いがこの勢いそのまま踏み込んでくるだろう、それならば刀で受け流したほうが良い。

「かっ!!」

刀で受け流して距離を読んでみる、後ろに下がった場合は拳ならば十分だ、蹴りなら

ばその後の動きを悪手にしないように心がけないといけない。

とは言っても今この時間まで延々とこれだけの連続攻撃を仕掛けているのだから、そろそろこつちの希望の攻撃が来てもいいはずだろうとは思う。

「オラツ!!」

そう思っていたらライダーが顔面を狙うためか、ようやく息が苦しくなってきたのか、こつちが待ち望んでいた一撃を繰り出してくる。

顔面ないし急所を壊すための大振りな一撃、ここを逃したとしてまた待ち続けるわけには行かない、オレは拳を避ける体勢に入った。

「はっ!!」

首を僅かに動かして迫ってくるライダーの拳を避ける、体を大きく動かしてしまつたら防御する時間を相手に与えてしまう事になるからだ。

拳を避けきつた分、ライダーの霊核を貫くための場所が無防備に晒されている、あれだけの痛手を負つても倒れないのであればこの場所を破壊する以外にもはや手立ては無い。

「ちっ!!」

ライダーが舌打ちをするがもう遅い、このまま霊核へ向かつて一直線に突きを繰り出す、それでこの戦いが終わる。

そうオレは思い力をこめて一撃を放った。

「二回も急所に当てさせるかよ!!」

オレが霊核へ突きを放った直後そう言って必死の形相でライダーは体を捻っていく、直線状に放たれた拳は横なぎにオレの顔に襲い掛かってきていた。

オレは当たらないように速く頭を下げて回避していく、手ごたえを僅かに感じながらその拳が通り過ぎるまで頭をかがめておく。

オレ自身がこの攻撃を避けていたとしてもライダーへの攻撃が思い通りの箇所へ成功しているかどうかが重要だ、オレは頭を上げると同時にどの箇所突きが刺さったのかを確かめるのだった。

「くそっ……捻ったから逸れてしまったのか」

ライダーが捻った分、体の位置が変わり突きは霊核ではなくその前にある肩へと突き刺さっている。

霊核でなかったのは残念だがこのまま上に斬ればライダーの腕は使い物にならなくなる、これでさらに磐石なものにしていけばいいんだ。

「…それはさせねえよ、今度はお前が堅実さを捨てたみたいだな」

別に霊核を狙わなくても俺の体を斬る事はできたのに突きを使うなんてよ」

しかし肩の筋肉が斬ろうとする刀を締め付けているのだろうか、刀がうまく上に上が

らない。

抜いて体勢を立て直そうとすると腕が握りつぶされるようなほど強い力を感じる、よく見てみるとライダーが真剣な顔に笑みを浮かべながら両手で必死にオレの腕を掴んでいた。

片手だけの力は肩に攻撃を加えているから楽なのだが両手となるとやはり辛いものがある。

現に振りほどくことも刀を力任せに引き抜く事もできない、そしてライダーはそのとてもでもない力でオレを自分の方へと一気に引き寄せてきたのだ。

「なっ!？」

あれだけ腹から血が吹き出たし良い手応えまであったのにこんな強い力をまだ出せる、この事実には驚愕を覚えずにはいられない。

正直な所と言えばもう掴むのも困難なほど腹に痛みを感じているんじゃないかという予想をしていたくらいだ。

「せっかくお前の刀を封じたんだ、もう離さねえぜ……セイバー」

背筋が冷たくなる、今から繰り出されるだろうこいつの一撃をオレは受けきる事ができるだろうか？、オレはこいつの攻撃が終わった時まだ優位な立場でいられるのだろうか？

この状況をどのように対処するのかをオレは頭の中で必死に考えていた。

ようやく掴んだこの機会、切り裂かれた脇腹から血が吹き出ている、この機会を逃してもう一度身を斬られては勝ち目がなくなるだろう、速く全力で連続攻撃をするしかない。

「オラッ!!」

両手を掴み万力のような力で締め付けている、だからセイバーが逃げる事はできない、しかし俺も拳でセイバーを攻撃する事ができない、だったらどうするのか？

俺は鼻面めがけて勢いを付けた頭突きをセイバーに繰り出していた、拳や足だけが武器じゃねえ、この石頭だつて立派なもんだ。

「ぐっ!!」

セイバーは首を動かして頭突きの軌道から逃れようとする、迫ってくる俺の石頭に恐れをなしたのか？

「でも、それだけでまったくの無傷というわけにはいかないだろう?」

よく見ると頬が僅かに切れている、頭の質量と風圧でやられたんだろうな。

俺は続けて前蹴りを腹に向かって放つ、引き寄せながら避けさせない速度で重さもあ

る一撃、いくら頭が避けられるくらい動いても今の状況なら上半身はろくに動かせるわけが無い。

「ちっ!!」

セイバーが舌打ちをして前に踏み出してくる、こいつ一体どこまで冷静なんだ。

普通に今まで通りに後ろに下がって威力を殺すかと思ったら、前に突っ込んできて威力が乗る前につぶしに来るなんて。

お前と戦っていたら驚きがいっぱいだぜ。

「仕返しだ!!」

そう言うのとセイバーの頭が顔にめり込んできた、こいつやつぱり速いな。

衝撃で一瞬腕の力が緩んでしまう、セイバーの刀が少し抜ける感覚があった、それで一気に意識を戻してセイバーの方を睨みもう一度掴みかかっていく。

「片方だけでも十分だ、今度は離さない……」

今度は片腕しかつかめなかった、でもこれを離さずに刀を抜かせない、その為にさつきとは違い片腕が自由になっているんだ。

「おら!!」

片手で引き寄せてもう片方の腕で殴りに行く、顔だろうが腹だろうが確実にダメージを与えていけばいい。



「かあっ!!」

左の頬に拳が当たる、振りぬかずにもう一発繰り出していく、セイバーはその隙に蹴りを繰り出して俺に攻撃を加えていこうとする。

大方蹴りで俺が飛んでいく勢いを活かして刀を引き抜く気だろう、さつきとは状況は違うが、抜くまでには絶対にお前の肋骨や足を折って痛い目にあわせてやるぜ。

「はっ!!」

俺は蹴りを使ってセイバーの足を壊しにいく、拳だけの単調な攻めでは蹴りを貰って抜かれてしまう可能性がある、それならば交えていって相手の対応を遅らせていく。

「ちっ!!」

しかし相手もさるものだ、こっちの蹴りに対しては前進をして勢いを殺すか、足を上げてきちんと防御をしている。

「そらっ!!」

しかもこっちよりも速い攻撃を繰り出してくる、蹴り以外にも時折刀を奪われる危険を犯しながら拳を突き出してくるし、距離が狭まればさつきのように頭突きを放つてくる。

「はあ!!」

攻め合いならば負けられない、俺は持ち前の頑丈さであいつの攻撃を受けていく、そ

して腕力であいつに着実にプレッシャーとダメージを与えられるように情況を作り出す。

俺が今の段階でやれるのはさっきまでであいつがやっていた様な事だ、このままこっちの攻撃を延々と受け続けていたらあいつは確実に劣勢になっていく。

そこからダメージを多く与えるために痺れを切らして何処かで防御を疎かにする時が絶対に来るだろう。

「しっ!!」

顔めがけて拳を突き出す、セイバーの奴にペースを渡すわけにはいかない。

上半身を攻める方がいいのだが、少しでも顔に当てておくかちらつかせて相手を揺さぶっていかなくては勝つ事は難しい。

「そんな顔面ばかりだったら見え見えだぜ!!」

また平然と避けて蹴りを繰り返してくる、蹴り同士の相殺も下手をすれば刀が抜けるから防ぐ方へ徹さなくてはいけない。

「掴んでも依然気を抜けないっていやなものだな…」

冷や汗が伝うとか気持ちを張りつめて我慢比べって言うのはどうも性に合わない、単純に殴りあうとかいう方が俺は好きだ。

「てめえのせいで普段まったく使わないもん使わされてるんだぜ、セイバー!!」

速く終わらせてこの雰囲気や状況を消し飛ばしたい、そこで俺は一気に力強く踏み込んで顔面に拳を放っていく。

これを一気に振りぬいてしまえば威力や衝撃でセイバーの手が離れるから、そうなればこっちはセイバーの攻撃に気を使う必要は無くなる、そしてそのまま終わらせてしまえばいい。

この戦いに終止符が打てるように拳をさらに強く握り締めた。

「欲張りは痛い目を見るんだって事を学習しようぜ!!」

しかしそうは上手くいくものではなかった、セイバーがそう言うと同時に俺の拳を紙一重でよけてさらに俺の腹に前蹴りが入る、勢いが着いた分をカウンターで返されたからかなりの威力になっていた。

そのせいで俺は地面をこする形で後退していく、まだ確実に優勢といえる状況ではなかったんだから速く終わらせようなんて焦って前に踏み込むものじゃないな。

「セイバーの奴のアバラを折るつもりなのに折れてしまいそうだぜ…」

俺は痛みを噛み締めながら気を引き締めていく、どうやらさっきの蹴りでまた僅かではあるが刀が抜けたようだ。

俺の体勢もくの字になり気味で決して良くは無い、しかしこんなに劣勢で無防備な姿を晒したのが功を奏したのか、それを見たセイバーが一気に攻勢を強めようと腕を振り

上げて勢いをつけようとしていた。

「おらあつ!!」

雄たけびを上げてセイバーが攻撃を始める、俺は微笑を見えないようにしていた、故ならばようやくこの瞬間がやってきたからだ。

セイバーの腕は攻撃を始めて下がっていつているとはいえ、未だに無防備に脇腹を晒している。

ただ、やはり計算されている、こつちが首を動かして避ければ刀をもう一度両手で力強く掴んで蹴りを使い引き抜く気だろう。

それをさせない為にもこの重要な機会は喰らっても良いから絶対に逃すわけにはいかない、俺は力を込めて脇腹へ拳を放っていた。

「攻撃するのは良いけど……がら空きだぜ!!」

「がっ……!!」

俺の拳の一撃に気づいたセイバーは攻撃を止めて防御をしようするが、間に合わずに脇腹に俺の拳が突き刺さる。

セイバーが息を吐き出すと同時に最高の手応えが拳に感じられる、この戦いが始まってからようやく全力でぶち込めた拳だ、喜びもひとしおってもんだぜ。

「……いい加減返しやがれ!!」

セイバーが痛みで発する呻き声ではなく怒りの声を出して俺を蹴って後退させる、そしてその勢いを活かして一気に刀を引き抜く。

刀を奪うために肋骨が犠牲になってしまったのは辛い筈だ、なんせ肋骨の折れた本数が手ごたえから考えて一本や二本とは違う。

もしこれが効いていないのならば、もうセイバーを倒すには霊核にヒビを入れて壊すしかない。

「ぐぐぐ……」

苦しい表情を見せないようにするが無理ってもんだ、肋骨が折れたんだから踏み込んだり腰を捻ったりといった行動に痛みが付きまどってくる、今だって動いたから痛みが体を駆け抜けたはずだ。

「おらっ!!」

「くっ……そんなの貰うわけないだろ!!」

俺は接近してセイバーの機動力を奪うために足へ蹴りを繰り返す、しかしセイバーの奴は痛みを堪えて蹴りを避けやがった。

まさかあれだけ折られてるのに痛みを押さえつけるつてのは恐れ入るぜ。

ここで蹴りが当たっていたらそのまま足を押し折ってさらに戦力は削ぐ事ができたのに残念だ。

「なんとかこれでお前の射程からは逃れたぜ、ライダー」

セイバーは俺の蹴りを避けるとそのまま大きく後退をしていき息を荒げてこつちに言葉を発してきた。

刀を構えて迎撃する準備は万端にしている、俺はその姿を見て苦笑いしながらセイバーに向かって一言言つてやる。

「まあ、お前の射程からも外れたけどな、セイバー」

俺のけりや拳が届かない分、あいつの刀も俺には届かない、結局はまた接近しあつて攻撃を繰り出していく事になる。

お互いの距離が開き射程から離れて互いに三回目となる次の激突に備えていく、きつと終わりはもうすぐだろう。

俺達がこんな戦いをしているがマスター同士の戦いはどうなっているのだろうか、それだけが気がかりだった。

「川神流奥義『大車輪』!!」

ウチが菓を飲んだのにびびったのか相手が攻撃を仕掛けてきやがる、見た感じは薙刀と一緒に回つてこつちに向かつてきやがる大技だ。

この場面で使ってくるって事は確かに攻撃そのものは速いし勝つ事ができる技なのかも知れねえ、でも今のウチにはあまりにも遅く感じてしまう、ウチは笑ってその攻撃に対応する事にした。

「ウチの目には止まって見えんだよ!!」

ゴルフクラブでさっきまでなら受け流してたが今なら完璧に見切ってこいつの攻撃を最低限の動きで避ける事ができる、この状態なら横にちよいと動けばそれだけでおしまいだ、簡単なもんだぜ。

迫ってくるが今の間にゴルフクラブを振り上げておく、着地と同時に叩き込んで驚かせてやんよ。

まあ、先にこんな少しの動きで避けられた事に驚いちまうんだろうけどな!

「はああああつ!!」

雄たけびを上げて着地をしていく、手応えが無いからうちが避けたのは分かっているはずだ。

ここだよ、きよろきよろ見渡してるがお前の真横にいるんだぜ、横を向いたな。

そのまま顔をこっちに向けてみるよ、面白いもんが見れるぜ。

「なっ!?!」

ウチを見つけた相手は驚いて体が一瞬硬直しやがった、本当にこっちの想像通りの反

応してくれやがって笑っちまうぜ、笑わせてくれた分きつちりとお返ししねえとな、受け取ってくれや!!

「折れちまいなあ!!」

から空きな足をゴルフクラブで思い切り叩いてやる、そのまま振り切つてマスターの足を壊しながら一気に決めるためにふっ飛ばしていく。

思つたより技が速かつたのはびつくりしたがさつきまでのウチでも無かつたらそんなもんはあたらねえよ。

「これでめえの足は折れてるはずだ、痛いだろ」

ウチは笑顔でマスターにいつてやる、ここまでやられたら精神つて奴が参っているはずだ、そう思つて距離をとりながら顔を覗いてやる。

「痛いけど、まだ腱が切れたわけじゃないし薙刀を少し支えにすれば問題ないわ……」

すると相手のマスターがまだ負けを認めないつて顔でこつちを見ながら、膝を付かずに片足と薙刀で巧い事立ちやがる。

むかつく顔しやがつてこうなつたら両足をきつちり折つてやるぜ、お前じゃウチには勝てないつて事を教えてやんよ。

ウチはゴルフクラブを構えて、にやりと笑つたままどのように相手を壊してやろうかと頭に思い浮かべる。



「芋虫みてえに這いずる事しかできねえ様にしてやるか」

ウチは相手のマスターに接近する、足はヒビが入ってるんだしこのまま腕と一緒に折っちまえば芋虫みたいになる。

それを好き放題滅多打ちにすればストレス解消にもなるし面白いだろう、そう思つて足に力を入れてウチはテンションをあげながら近づいていくのだった。

全員の戦いは最終局面が刻一刻と近づいている。

セイバーは肋骨が折られる一撃を見舞われた。

ライダーは腹部を大きく切り裂かれて意識が朦朧としてきている。

ライダーのマスターは足にヒビが入って戦いに支障をきたしている。

セイバーのマスターはそんなライダーのマスターへ止めを刺すために向かっていく。

この戦いの最高潮まであと僅かだろう。  
クライマックス

終わつた時に立っているのはいったいどちらの陣営なのだろうか。

聖杯は決着を今か今かと待ちわびるように強く輝きを放っていた。

## 『刀と車輪の舞踏 後編』

あれからオレはライダーの射程距離から離れて刀を構えなおして、再びこちらに流れを引き寄せるために足へ力を込めていく。

肋骨が折れたせいでちくちくと痛みがはしってくる、マスターは優勢な中こっちは互角つてのはいただけいな。

「お前との勝負にそろそろ決着をつけないといけないな、ライダー」

踏み込む前に決意のようなものを呟いて気合を入れる、痛みを我慢するという事も含めた行動だ。

「こっちも同じ事を考えていたぞ、セイバー」

ライダーは腕を顔の前に持って行って防御の構えを取る、多分これは形だけのものだろう、片手で白刃取りなんてものは普通はできない。

さつきまでの殴り合いから刀以外のものを警戒している場合もあるが、流星にお前の土俵で何度も戦う気は無い。

オレは刀で攻撃をして、お前の間合いに入らないように戦っていく。

そして突き刺す攻撃をやめる、お前にもう掴ませるつもりは無い。

「確実に勝つ為にお前の勝ち目を失くしていただくだけだぜ!!」

踏み込んで斬撃を繰り出す、狙うのは突き刺した事であり動かない肩の方だ。

死角となった場所からの対応はどうかんばつても一拍遅れてしまう、このような戦いではそれは致命的となる。

「はっ!!」

ライダーは息を吐き出し勢いよく体を捻って避ける、追撃をしようにも無茶な動きはこちらにとつても良い事ではない。

「しゃら!!」

捻った勢いを活かしてライダーが頭をめがけて回し蹴りを放ってくる、さっきの斬撃のせいで腕を上げて防ぐ事はできない、頭を屈めて避けるのが精一杯だ。

「ふっ!!」

頭の上を足が通り過ぎていく、速度が乗っていたのか風を切る音が聞こえていた、もし当たっていたら意識を失っていただろう。

掠つたりも無く冷静に対処できてよかった、今居る距離も近接といえるようなものではないからライダーの追撃に注意を払うことは無い、オレは冷静に距離を開いて構えなおした。

「ちっ、避けたか」

舌打ちをしてライダーが言ってくる。

そんな大きな攻撃を何度も食らうほどこっちも間抜けじゃないからな、避けて自分の距離を保つ事に専念する。

二度とお前にペースを掴ませるような真似はしない、お前の攻撃も防御もうまく捌いて何もさせないようにしてやる。

「でも、今のお前さんに素早い動きはできねえ、追い詰める事は難しくないだろ」

血は流れているがああのやり取りで気を持ちなおしたのか、鋭い眼光を放ちながらそう言ってくる

ライダーの言葉に苦笑いで返す。

後で下がってしまうデメリットはあるけれどこいつは強化できる分こちらとの差を多少埋められるからな。

ただ、それを使うにしてもコンディションとしてはあいつの方が悪いだろう、いくら強化をした所で意識が朦朧とし始めている以上完全な効力は発揮できないはずだ、そんな状況でやすやすとオレは捕まえられない。

とは言ってもこっちだつて肋骨の痛みで激しく動いたり難しく、少し深く呼吸をするだけでもちくりとする。

だからこそ油断をせずには戦い続けなくてはいけなかった。

「……」

無言でじりじりと間合いをつめてくるライダー、刀の距離を考えての接近なのだろう、ぎりぎりまで接近してから一気に詰めて殴ってくるはずだ。

「でもその前にこちらが踏み込んだらそれは意味がなくなつて痛手を負うけどな」

その踏み込みに合わせて斬撃を放せば良い、今までのやり取りでもあつたが相手の攻め気をうまく利用して一層強い攻撃を加える。

それを成功させてきたからこそ今のこの状況が生まれている、とはいっても自分も攻め気をうまく使われて肋骨がやられたのが少し残念ではあるが。

「来るものなら来いよ、ライダー……」

構えて息を整える、僅かな動きも見逃さないように集中力を高めるのだった。

「とりあえず攻めてから物事は考えるか」

じりじりと間合いを詰めながらセイバーの策について考える、何も仕掛けないというのも考えられるが警戒はしておくに越したことは無い。

花火による目くらましもまだ手としてあるし、こつちが猪みたいに突っ込んだらまた

痛い目を見るだろう。

じりじりと突っ込んでいきギリギリの所でフェイントを仕掛ける、突っ込むと見せかけて刀を振り下ろしきった所にぶち込みに行く。

「うまくいくといいけどな、こういうのより単純な比べ合いの方が楽だ」

駆け引きとかそんなのはやりたくは無い、ましてや男となんざなおさらだ。

女と心を読んで言葉とか引き出しあったりする方ならやってみたって思うけどな。

「おらあ!!」

一気に大きな声と同時に勢い良く振り下ろされていく、僅かに後退をして間合いを取りに行く、この一撃を避ければ懐までは一直線だ。

「じゃあ!!」

避け切った、これでこっちは大きなチャンスを手に入れた事になる、流石にこのシチュエーションならば拳が当たる、そう思って逆の方の脇腹に向かって拳を放ちにいこうとした。

しかし次の瞬間背筋を冷たいものが走り向けていく、俺はその原因であろうセイバーを見て刀の行方を目で追っていく。

すると振り下ろされていたはずの刀が途中で止まっていたのが分かった、そしてその刀を持つ腕が一気に動き始めて、当たるであろう俺の一撃を牽制するようにその一撃は

放たれていた。

「ふっ!!」

息を吐き出しながら、鯉が滝を昇るようにまつすぐに上へと俺の喉から頭をを切り裂く斬撃が襲い掛かる。

仰け反る様に回避して難を逃れたがこういった間合いとか考えてのやり取りは、やっぱりこいつの方が一枚上手みたいだな。

「今、確実に刀を振り切ったと思ったのによ……」

正直そう思えたからこそこっちも攻撃をしたのだ、フェイントに対してフェイントを交えて攻撃をするなんて普通は無いものだと思ってたんだけどな。

「何もしてこない訳が無いと思っていたんだよ、そんなじりじりと動いて間合いに入ってる状態なのに探るようにしてたらばればれだ」

そういつてちやつかりと距離をとって構えるセイバー、少しでも綻ぶような状況があれば勝てるんだらうけどな。

「無いものねだりとかしてる場合じゃねーな」

もう一回攻撃するために俺は構えて相手の間合いに注意深く近づいていくのだった。

しかし次の瞬間目を覆ったのは大きな火花だった、再びセイバーの技術が放たれるのだっ

た。

「さて、勘が鈍ってたら良いんだが……」

そういつてオレは石を拾い上げて今のライダーの勘を試すために投げつけてみる、これで防いだらその時は砂を巻き上げたり、もう一回石を投げるなどして気配を感じ取る集中力をそいでやる。

「ラアッ!!」

拳を突き出して石を割っていくライダー、これで今のライダーの勘を探る事はできた、相変わらず冴え渡っている、面倒なものだ。

「でもこれならどうだ、騒音で足音も探る事ができなくなったら流石のお前でも無理だろう?」

そういつてオレは爆竹を取り出して握り締める、さらに拾い上げた石を投げる構えをして俺を感じできないように準備を整える。

オレは足音を聞かれないように、そしてライダーに大きなダメージを与える為に一つの手を打つ、その準備として足に力を込める。



万全を期しておけば攻め気を感じ取られても痛い目を見る可能性は少ない、ましてや今の距

離から考えれば失敗したとしても、こちらは大きな精神的アドバンテージはもらえる。

ライダーがこの方法を警戒して攻めを緩めたら失敗しても十分価値はあるものとなる。

「それっ!!」

そう言っつて爆竹に火をつけてライダーの足元より手前に滑らせていく、石を顔面付近に投げて爆竹の方に意識をいかせないようにする、そして投げた石がライダーへと迫る瞬間にオレは飛び上がった。

「また石かよ、ふざけ…!?!」

怒りをあらわにした声でライダーは石を砕く、だが次の瞬間言い終わるよりも先にけたたましい音が鳴り響いていく、爆竹の音に顔をしかめていくライダー。

三半規管までいかれていたらバランスを崩すんだが、流星にそんな都合のいい事は起こらない。

いよな。

「それでもこいつで終わりだ……」

狙うは脳天。

飛び上がったいたオレは落下の勢いをそのままライダーに突き刺しに行く、これが当たればこの戦いは終わる。

しかしここでライダーがここで計算外の行動をし始めていた。

「ふっ!!」

こんな土壇場でまた勘が働いたのだろうか。

ライダーが息を吐き出しながら頭を振って僅かに脳天から軌道がそれる、一目も上を見ずに避けるなんて驚きだ。

鋭い勘があったにしてもことごとくそれが良い方向へ作用するとはどこまで運がいいのか、腹が立ってくる。

しかしどうあってもこのまま落下していくだけだ、そのあとに距離を取って射程から離れば良い。

「はあっ!!」

その決意をしたオレは構わずに落下してライダーのこめかみから頬にかけて大きく縦に切り裂いてゆく。

刀に赤い血を纏わせながらオレは着地をして、予定通りそのまま距離を取る為転がっていく。

「があっ!!」

ライダーが叫ぶと同時に、転がった先の横を大砲の弾が通り過ぎたかのような錯覚に見舞われる。

風圧まで感じる所を見るとつもない蹴りを放ってきたんだろう、もし突っ込む形の斬撃ならば当たっていたかもしれない。

「こっちの攻撃を食らってでも相打ちにしてくるか、流石にいい加減倒れてくれないかな……」

溜息をついてライダーを見ながらこっちは追撃の用意をする、こめかみから流れる血が目に入った瞬間が勝負だ。

息を吸い込み、つま先に力を入れて決定的な隙ができるその瞬間を今か今かと待ち望む。

「……………くっ!!」

待っていて、力を入れた足へ靴越しに砂利が食い込んで痛みを覚えた時、ライダーのこめかみから垂れ落ちる血が目に入ろうとしていた。

しかしその次の瞬間、ライダーが拳でその血を拭って目に入るのを防ぐ。

残念ながら目に入りはしなかったものの、その一瞬を見てオレは好機と取り、一気に懐めがけて踏み込んでいく。

オレは踏み込む最中に頭の片隅でマスター達の勝負の事を考えていた、目を向ける事も許されない状況だから尚更どうなっているのかを考えてしまう。

一体どちらが優勢なのだろうか、危ない展開になっていないだろうか。それがオレにとっては気がかりな事だった。

「ぐっ……」

私は足を引きずりながらも相手の攻撃を何とかやり過ごしていた、相手は大振りで私に止めを刺そうとしてくるのでそれが私を救ってくれていた。

「くそっ、チョロチョロ逃げてんじゃねえよ!!」

空振ってよろけながらもセイバーのマスターが怒って言葉を放つ、そんな簡単に無防備に喰らうほど私も馬鹿じゃないわよ。

「こつちが攻撃をしないと思ったら大間違いよ!!」

振り子のように大きく体を揺らしてその勢いを活かして攻撃を放つ、自分の体が完全な状態ならこの場で『大車輪』を放って勝負をかけるが、片足のダメージは深刻なものでそれは難しい。

「だからそんなもんは通用しねえんだよ!!」

セイバーのマスターが薙刀の柄を蹴ってこっちの攻撃を止めてくる、その蹴られた時の威力で押し戻された事を利用してこっちは一つの奥義を繰り出す。

「川神流奥義『蛇屠り』!!」

足を這うような一撃、足を薙刀で払う技だ。

バーサーカーの時にも使った技が徐々に火を噴く。

「くそがつ!!」

蹴って流した分、相手の足の動きに遅れが生じているのが分かる、セイバーのマスターの動きを止めないと今の押された状況はどうもできない。

事実、セイバーのマスターに攻撃が当たり足へ大きくダメージを与える事ができた、私のようにヒビや折れたりしているわけではないが多少の機動力は削れただろう。

「もう一発といきたいけど……」

追撃を考えるけども相手の目のぎらつきがこっちに対して危機感を抱かせる、私は一旦止まって冷静に相手を見てみた。

すると次の瞬間飛び上がって頭へとゴルフクラブを振り下ろしてくるセイバーのマスターの姿があった。

「わわっ!!」

私は転がって距離をとって薙刀で再び支えて立ち上がっていた。

深くない傷とはいえあんなにも軽快に動けるなんて、飲んでいた薬の力は凄いいたいね。

「やってくれるじゃねえか、でもそんな状態だったらウチにはかてねえよ」

にやりとして獰猛な笑みで私を見てくる、そういつて腕を掲げて令呪を見せてくる、ここで奥の手を使ってくるってわけね。

「このまま、うちもセイバーも両方全部出し尽くして終わらせるだけだぜえ!!」

セイバーのマスターが息を吸い込んで大きな声で最後の令呪を使う、なぜ最後なのかわかったかといえば明らかに減っているのが見えたからだ。

「令呪によって命じる『己の全てを出し尽くせ』!!」

そういつて眩いほどに令呪が光る、セイバーがどうなっているのか私には分からない。い。

でもこちらと同じ様にやらなくてはいけないというのは肌で感じ取っていた。

「……こっちもやるしかないわ、この勝負が最後なもの、出し惜しみはなし!!」

私も大きな声で令呪を使ってライダーに告げる、この場面で使わなければ負けてしまう事は分かっているからだ。

「ライダー、あなたを令呪で応援するわ!!、『全力で戦い抜いて』!!」

そういうと令呪が輝いていく、これで二回目の使用だ、私も頑張るからあなたも頑張つてという思いをこめる。

相手が再び攻撃を叩き込むためにゴルフクラブを構えて、睨みつけながらじりじりと近づいてくる。

私は気持ちを下ろち着かせて相手を見る、正直相手が重点的に足を攻撃していたらこんなにも粘る事は出来ない。

相手が大振りの攻撃、もしくはは頭を懲りずに狙つてきているからそれを避けているだけだ。

「いいからちゃんど頭を打たせろよ!!」

何度目になるかわからない頭部への攻撃を私は回避する。

相手が叫びながらこつちの回避に難癖を付けてくる、気持ちはわかるけど喰らつたら負けるのに突つ立っているほど間抜けじゃない。

ただいつまでも避けてばかりじゃ勝てる訳がない、こちらから攻撃を食らわせないといけない。

相手に動揺があればこの状況は変わるかもしれない、しかしそんな簡単に起こるものではないだろう。

もしあるとすればサーヴァント同士の戦いが決着するか、または相手と私のどちらか

がこの長期戦で出てくる疲れや緊張感で崩れていくぐらいだ。

そう考えながら相手から手痛い一撃を貰わないように動きに注目して構えるのだった。

「お互い力が漲ってくるな、セイバー」

俺は大きく構えてにやりとしながら言ってる、お互いの肉体の損傷による痛みや能力の減退はほとんどなくなったのだろう、完全に近い状態での仕切り直してわけだ。

押し切る事も不可能ではないんだから、このまままで通りやっていけばいい、変に頭を捻ったらセイバーにやられちまうだろうからな。

「ああ、こうなれば決着が着くのも速いだろうさ、ライダー」

そう言ってお互いが駆け出す、かと思ったらセイバーがポケットに手を突っ込んでいた。

花火を取り出すとするのを感じて、ポケットから突っ込んでいた手を出した瞬間に蹴り飛ばしていく、まったく油断も隙も有ったもんじゃねえ。

「流石に今の場面でそれをやられたら負けちまうわ」



いくら能力が戻ったり痛みがなくなってきたとしても、今の仕切りなおしたような状況で目晦ましを食らっていきなり斬られたらその時点で主導権を握られて終わってしまう。

こつちとしてもそんなやられ方は嫌なもんだ。

「手が痺れるような蹴りを平然と放ちやがって……」

セイバーが苦い顔をしてこつちを見てくる。

軽い牽制程度の蹴りだったら意地でも取り落とさないだろうからな、確実に落とさせるにはそれくらいきつくしないと駄目だろ。

「小細工無しで斬るか殴られるかって言う単純な構造にしたんだ、付き合えよ」

さっきのように花火で優勢を取られたりしないように釘をさす、相手が刃物を持っていてだけでも優位は相手側にある。

今の時点で言うっておけば相手も警戒をして、花火を使ってさらに優位な状況に持ち込まれる可能性は格段に減っていく。

その言葉にセイバーも仕方ないと思ったのか構えてこつちの動きを注意深く見ている、自分から攻めてこないあたり慎重だな。

おおよそこつちの怪我が治ってどれだけの力で攻撃してくるかを知りたいんだろう、そしてあわよくばそれを避けてカウンターで切り裂いて流れを掴みに来る算段だ。

「攻めずにカウンターを狙っているなら……お望みどおりやってやるよ!!」

だったらその考えを根っこから壊してしまえば良い、受け止めても飛んでいくような一撃を避けられない速度で放てば目の色も変わって少しは意識が変わるだろ。

腕がうなりを上げて拳はセイバーを捕らえようとする、

「速くても狙いが見え見えなら避けられるもんだぜ、ライダー」

セイバーの奴はこつちの攻撃を読んでいたのだろうか、体勢を低くして拳を避ける。

しかし俺も今回は頭を使ってそこまで読んだ上で次の行動をしていた。

「顔ががら空きだぜ!!」

しかし腹の探りあいや読みあいはやはりセイバーに軍配は上がる。

その蹴りを急ブレーキをかけて止まってやり過ごす、次の瞬間脇腹から胸にかけて切り裂くつもりなのだろう、場所がちょうどそれを思わせるポジションだった。

「シャアッ!!!」

予想通り鋭い軌道を描いてセイバーが攻撃をしてくる、それに対する処理は交代をして浅く済ませるだけだ、無理やりな避け方なら痛い目を見る可能性も十分にある。

「ちっ!!」

こつちが下がったのを見てセイバーは悔しそうな表情をする、タイミングが良かったのに回避されたのがそんなに嫌だったか。

「今度はそつちが隙だらけだぜ!!」

細かく当ててセイバーに僅かでもダメージを与えていく、刀の一撃で戦況をひっくり返される事を考えれば大振りでもいい。

しかしまだセイバーの刀の位置が振り下ろせる場所にある、そう考えるとさつきまでいいように相手にされている為少し慎重になってしまふ。

自分らしくはないが仕方がないとも言えるだろう。

こつちの大振りを見計らっているのが見えてくるほど、セイバーは狙いすましていた。

「大振りしてこないのか……」

細かく当てている中、セイバーが呟く。

確かに大振りでもないところらが流れを掴むのは時間がかかるし、セイバーの刀の有りを吹き飛ばせばはしない。

「何度も同じ轍を軽々しく踏む気はないぜ」

ただ、相手が痺れを切らしてきたらこつちの行動を無視して躍起になるだろう。

立場を逆転させる事を狙う、もしくは刀を即座に振り下ろせる距離で無くなった時にぶち込んで一気に引き寄せてやる。

「そうか、じゃあ……こういうのはどうだ？」

砂をこつちの目に向けて攻撃を仕掛けてくる際に巻き上げてきた。

セイバーの野郎こんな事までやってくるか、花火じゃなくても十分環境を利用しただけでペース掴めるじゃねえか。

「真正面から来て、やられにでも来たか！」

でもこつちだつてそう簡単にやられるつもりは全く無い、俺はセイバーの顔を狙つて拳を勢いよく突き出していた、まともに当たったら流石のお前もやられるだろう。

「そんなわけないだろ、砂のせいで少しのろい攻撃になっているぜ」

胴から横へ真つ二つにするような勢いで斬撃を繰り出していく、こつちの攻撃を先んじて止めて攻撃をしてくるか。

「甘いんだよ、一回避けただけじゃ終わらせねえ、次にやるのは肋骨を砕いた拳より強い足での攻撃だぜ!!」

しかしそう簡単に俺も一撃を貰うつもりは無い。

振りぬいた後に筋力を総動員して強引に体勢を整えると、勢いよく体に回転を加えて相手の斬撃に対して同じ軌道の蹴りを放っていく。

そしてそのまま刀の軌道に合わさった蹴りがこつちの斬撃と衝突を起こす。

セイバーは手が痺れただろう、俺は足に斬り傷をつけて、その威力と勢いのまま後退していく。

「お前は全力の一撃が出せる距離なんじゃないのか？」

「まあ、そうだな……でもお前もだろ？」

お互いに思いがけない形で距離をとる事ができた、この距離から踏み込んでしまえば一気に相手に大きな痛手を負わせる事ができる、相手を倒せる最大のチャンス。

それを互いに感じ取ったのか令呪の恩恵を受けた二人も徐々に傷が付き始めていた、だからこその距離で互いは全力を尽くせる攻撃の構えを取る。

戦いの終止符を打つにはふさわしい全力の一撃のぶつけ合い。

俺は拳を握り締めて霊核に狙いを定める。

セイバーはバツティングフォームを彷彿とさせる構え方で俺を睨みつけて目をそらさないようにしていた。

俺はセイバーよりも先に動く為に足に力をこめていく。

そして次の瞬間、足に込めた力を解き放ち、セイバーに向かって弾丸のように飛び出していくのだった。

「ようやく喰らいやがったな、まあ……頭じゃねえけど」

ウチは相手の足を押さえている姿を見て、やっとさつきまで避けられていた苛立ちを

少しを晴らす事ができた。

「くっ……足を狙ってきたのね」

相手も流石に痛めていた足をやられて苦しいんだろう、片膝をつきながら汗を流して歯を食いしばって必死に立ち上がってくる。

「随分とてこずらせやがってこれで終わりだぜ、頭かち割ってやる」

ウチは相手の方に向かって歩いていく、散々逃げ回ってくれた分痛い思いしてもらおうと思ったが一発で終わらせてやる。

「来るなら来なさい、まだ戦えるわ」

相手が生意気な口を聞いてきやがる。

そんなにやられたいならやってやるよ、死んでも文句は抜かすなよ。

そう思って歩いていたら、いきなり気持ち悪さが押し寄せてきて震え始めた。

「なっ、体がうごかねえ……」

体が震えてまともに体が動こうとしない、一体ウチの体に何が起こっちゃったんだ!?

目の前が霞んで気持ち悪くなっていた所に、立ち上がった相手がウチにこの状況を言ってきたがった。

「……あれだけ薬を飲んだらそうもなるわよ、簡単に強くなるなんてそんな事ないのよ

!!

川神流奥義『大車輪』!!」

相手も驚いた顔をしながらウチが何でこうなったかを言ってくる、そしてウチとの勝負を終わらせる為に攻撃を仕掛けてきた。

薙刀を構えて大きく回転しながら突っ込んでくる、スローモーションに見えていたはずの技も今だつたらぼんやりとした輪郭しか見えない。

くそつ、薬を飲んだからウチはこんな事になったのかよ……。

飲まなきゃよかったのかよ、でももう後悔してもこんなになら意味ねえじゃん。

そう思いながら技を食らったウチは地面に体を打ちつける、衝撃が強くて背中にジンジンと痛みが広がっていた。

「ぐう……」

その攻撃の痛さと気持ち悪さが混ざってウチはそのまま指を動かす事もできずに目を閉じる事しかできなかつた。

突っ込んできたライダーに狙いを定めてオレは踏み込んで応戦しようとする。

「んっ?」

今足を踏み込む時に僅かな違和感を感じた、ほんの少し痙攣でもしたのかいつもより遅れているのが分かる。

しかし、このまま振り下ろしてこの戦いに終止符を打つ、令呪によってステータスが底上げされているから今、止めを刺すことはできるだろう。

「長かった戦いもこれで終わらせる!!」

そう言って次の瞬間、さつき感じた違和感がオレから勝利の可能性を奪う凶悪なものと変貌して襲い掛かってきた。

「なっ……!?!」

オレの体が一瞬固まって僅かに対応が遅れる、ライダーの首をもう少しで取れると思っていた瞬間の硬直。

どうしてなのかはよく分かっていた、あそこに倒れている所から考えてマスターからの供給が一瞬止まってしまった。

それによってこんな大事な場面だというのに。

「俺の勝ちだ、セイバー!!」

そう言ったライダーの拳はオレの左胸を力いっぱい殴りぬける、勝ち誇った面です



んな事をいうんじゃない、まだ倒れてないんだ、終わっているわけがないだろう。「ふざけんじゃねえ!!」

オレはそれに一拍遅れる形となって思い切りライダーの胸を切り裂く。

いくら斬撃が放しても威力は魔力供給が途切れたせいで浅くなってしまうている、それに対してライダーの一撃は敗北を感じさせる手応えだった、きつと霊核に大きくひびが入っただろう。

貫かれたわけでもないから痛みを伴う事の無い消滅だ。

「おいおい、手応え有っても斬ってくるのかよ、結構深く切られたぜ、これ」

正直、貫くような考えは持ち合わせていなかったんだろう、ひたすらに殴って勝つという方法を取ろうとしていたのかもしれない。

最後に僅かに体さえ硬直しなかったらまだ刀で防いで長引いただろうし、頭から真つ二つにする斬撃だったから立場は逆になっていた可能性もあった。

「まだ……このまま終わるなんて思うなよ、花火があれ一つで終わりだとオレは言っていないぜ」

ずらりとオレは沢山の花火を服の裏地や袖から出していく、今からでも決して遅くはない。

花火と刀で最後に玉砕覚悟の戦いをしてライダーに目に物を見せてやる、まだ消える

には時間もある、何より諦められる状況ではない。

たとえ相手が頑丈でも一縷の望みを託すぐらいの価値はある。

「なにつ!？」

ライダーがこの光景を見て驚きの声を上げる。

初めてその飄々とした雰囲気崩して、常に余裕を持っている顔を青ざめさせたな。

「これだけの花火の量だ、最後の手段を喰らって貰うぜ!!」

そう言つてオレは花火に火をつけて刀を構えてライダーを見据える。

こつちと相手はほとんど零距离だ、そんな中オレは最後の賭けに出る、相手のほうが大きくダメージを負えばこちらより速く消える可能性がある。

そう思ったからこそオレは仕掛けていった。

「ぐっ……」

ライダーが呻いてじりじりと後退をしながらやり過ぎそうとしている、しかし花火が発する熱や縦横無尽に飛び交う軌道のせいで思うように動けないのだろう。

現にこちらに拳を振るおうとしたら花火が顔面に当たってしまった、動きが止まってしまつていてこつちの動きへの対処が遅れていた。

「おらっ!!」

ライダーに向かって斬撃を繰り出していく、対処が一瞬遅くなつていた分、完全には

避けきる事ができず、こつちに腕を斬られていた。

こつちにダメージがなくて相手にだけ攻撃を加える事が出来た事を、考えると捨て身の特攻としては悪くない展開かもしれない。

「お前の好きにさせるかよ!!」

低い蹴りをこちらに叩き込んできやがるライダー、反応しにくい攻撃だが後ろに踏み込む事でやり過ぐす。

「そんな少し下がった程度で止まるわけねえだろ!!」

蹴り足をそのまま踏み込む足にして再び距離を詰められる、そして拳を突き出して、もう一步余計に下がらないとこいつの射程からは逃れられないか。

「始めの時を忘れたのか?、むやみに突っ込むものじゃねえぜ」

ただし煙のせいだこつちの姿が見えてないのか、今回は勘が働かないで僅かに顔から逸れていった。

動いてしまえばこいつの事だから察知しやがるかもしれない。

「忘れちゃいないがそうでもしねえと、警戒心の強いお前はやってこないだろうが」

煙の向こうからライダーの声が聞こえる、おおよそ苦笑いか目を凝らそうとして睨みつけてるだろう。

「お前の攻撃喰らったら刀の分の有利とか吹き飛ばされるからな」

率直な意見を言う、だつて肋骨を問答無用でへし折るようなパンチを出す相手にこれ以上不利な間合いで付き合うメリツトも理由もない。

「本当につれない奴だな、てめえはよ!!」

ライダーが轟音と同時に煙を吹き飛ばすような一撃を放ってくる、こういう一撃だけ出してくれるなら真正面で避けて斬りつけられる。

初めの時は紙一重でやり過ぎしていたけど精神面が磨り減るのならやり易い方がいいに決まっている。

一撃を喰らえば致命傷に普通につながる、だからカウンターの戦法を取りながら火花や砂とか使つてやり過ぎしていた。

「意外とそうでもないぜ、今の頭に血を上らせたお前なら真つ向からやれる」  
だからこそ今の状態ならば真つ向勝負が出来る。

オレは屈んでその体勢から頭を上げる時に勢いを付けて突きを放っていた。

「お前の懐に潜り込めたぜ、これでお前の一撃の威力は半減したな、ライダー」

突きはライダーに避けられて、距離こそ開いてはいるがまだライダーの全力の攻撃が出来る距離ではない。

「言つてろ、威力は何とかして補うだけだ」

ライダーが構えてお互いの距離が縮んだまま、攻撃が始まった。

頬を掠める拳と引き換えに足を掠める斬撃、もしくは横薙ぎの蹴りに対する上から振り下ろす斬撃。

時々掠めるだけではとどまらず顔や脇腹に当たったり、浅いとはいえ斬り傷が付く場面も互いにあった。

決定打こそ生まれないがきつかけ一つでそれが生まれる、緊迫感が張り詰めるぎりぎりの戦いだっただけ、

オレは消えていく実感を感じながらもライダーを斬りつけていく、お互いに決定的な一撃は生まれなかった。

しかしライダーは時折こっちの斬撃を避ける時に足をもつれさせて、喰らわないように何とか踏みとどまっている状況だった。

こちらはまだライダーの力に溢れた攻撃は刀の腹で受け止めたりする余裕さえあった。

「ずいぶんと疲れてるな、ライダー」

オーバーアクション気味で避けないといけなから無理もない、スキルかなにかしらも使っているだろうし、疲労度は肉体表と精神面共に大きなものとなつてのしかかつているだろう。

「人に言える立場じゃねえだろ」

こつちに対してライダーが言ってくる、確かに人に言える立場ではないだろう。

疲労度こそライダーと大きく差はあるが危ない綱渡りをしているため、精神的には焦りが見え隠れしている。

「人に言う前に自分の体の事を頭に入れておきな!!」

笑いながら突っ込んでくる、最後も近いのにそんな簡単に隙を見せるような事をしていいのか？

いや、こいつのスタイルなんだろう。

結局隙を見せて痛い目に何度もあっているのにこの今までの戦いの間、ここぞというときはこのやり方だ。

唯一慎重になったのもオレとこの最終決戦ぐらいだろう。

「オラア!!」

拳を乱射してくる、どれも威力が高く捕まえれば何発も叩き込まれそのまま倒されてしまう。

しかしさつきも思ったがそんな大振りで作って足をおろそかにしていたらバランスを崩す、この攻撃の次は足をもつれさせるはずだ。

「ほらな……ドンピシャだぜ!!」

予感していたとおり躍起になって連続攻撃を仕掛けたせいか、足がもつれてしまいこ

ちらに大きな隙をライダーが見せる。

その瞬間狙い澄ましたようにオレはライダーの右肩から大きく斜めに切り裂くように斬撃を放っていた。

「グアアアッ!!」

右肩に刃が食い込んで手応えが伝わってくる、この一撃から反撃するなんて流石に無理だろう。

しかし次の瞬間、目を疑うような光景と耳を疑うような言葉をライダーは言い放っていた。

「腕が斬りおとされて無いならこのままぶち込んでやるだけだ!!」

こっちの予想を裏切り、ライダーは右肩へ刃が食い込んでいくのもお構い無しでこっちへ攻撃をしてくる。

血はポタポタと絶え間なく落ちていく、血が吹き上がるにはこのまま刀を振りぬかなくてはいけない。

こちらが刀を振りぬくと同時に血を吹き上げたライダーが放っていた拳が、腹に突き刺さり息が一瞬詰まりながら大きく吹っ飛んでいった。

互いが攻撃をもちに受けて吹っ飛ぶ。

オレは拳を腹に叩き込まれていた、ライダーは力一杯の斬撃を右肩に喰らいその勢い

のまままたたらを踏み、しばらくして背中から倒れこんでいった。

すぐにライダーは立ち上がってこつちへ攻撃を仕掛けてくる、こつちが腹の一撃で動きが鈍くなっているというのにこいつは速さが変わらない。

大方スキルか何かで衰えないようにしているんだろう、とはいっても腕や足自体からは血が流れている、いくら痛みを消したり運動機能を上げたところでその血は戻らない。

さつきのように殴り飛ばせる威力の攻撃を放つなんて左腕でしかできないだろう、そこをくぐればこつちの勝ちだ。

「シッ!!」

蹴りを放ってくるライダー。

いきなり拳で仕掛けてはこないだろうが、これも危ない一撃だ。

「ふっ!!」

蹴りを避けて刀の射程距離を保つ、ライダーは蹴りの連射で勢いを緩めることも無くこつちの一撃を遮断しようとする。

だがこの蹴りが止んだ時が一番隙が出来て切り裂く機会がやってくる。

「これには対応できねえだろ!!」

攻撃をやって終わらせられると思った矢先、砂が目に入って動きが止まる。



さつきやられた事をやり返してきやがったか、突っ込んでくるだけじゃなくてこんなマネをしてくるのは驚きだぜ。

そう感じた瞬間風を切る音が聞こえる、砂を払ってみると視界に入ったのはライダーの拳が唸りを上げて脇腹に向かってきていた。

この箇所はさつき肋骨をあらかた折られた場所の反対側、やられたら呼吸さえも辛くなるコースだった。

「もう一回折れていやがれ!!」

もう避けられないと悟った以上したばたはできない、それならばライダーにとてつもない深手を負わせる斬撃を全力を込めて放つだけだろう。

「舐めるな!!」

大きな声で脇腹に拳が突き刺さると同時に胴から横に真つ二つにするような渾身の一撃をオレは放っていた。

脇腹に喰らって横に殴り飛ばされる、また肋骨が折れる鈍い感覚が広がっていた。

ライダーも血しぶきを上げるほどの大きな斬撃を喰らって下がっていき、オレの間合いから外れた場所で、今度こそ立ち上がれないように前のめりに倒れていった。

そしてようやくすべての煙が晴れていく。

お互いがこの数分の間のやりとりでどれほどのダメージを受けたのかがわかる。

オレは体中が火薬の火傷でダメージを負っていて刀を取り落としていた。

ライダーも渾身の斬撃を何度も受けていたからか、血を多く流しておりかなりのダメージを負っているのが分かる。

こつちに対して虚ろな目を向けたまま、膝をついた状態に体勢を変えて荒い息をついていた。

オレはごそごそと服やポケットに止めを刺せる分の花火が残っていないか探る、全てを使い切っていたのがしばらくして分かった。

その事実を受け止めてオレは苦笑いを浮かべる、もはや奥の手も何もかも尽きてしまった。

「……あの状況を最後まで耐えたか、ライダー」

血を俺より多く流しているライダーに対して言う、霊核にもう一押しとはいけなかったのが原因なのか。

意識は令呪を使う前のように朦朧とはしているがまだあと一押し分のこのちらに叩き込めるような力が残っているだろう。

「…流石に危なかったぜ、あんな奥の手を隠した状態だったなんてな…」

ライダーが言葉を絞り出してこちらの声にこたえる。

こんな姿を見ると惜しかったという実感がふつふつとわいてくる、出し惜しみをす

事もなくもう少し早くにこの奥の手を使った方が良かったのかもしれない。

そうすればこの感じから考えるに結果は逆になっていただろう。

ただ何故か晴れ晴れとした爽快感が残っている、その時オレはアサシンが最後に残した言葉を思い返してみる。

この勝負は全てを出し切った上の敗北だった、もう花火もなければ刀もろくに握れやしない。

少し心残りさえあるがそれでもこれだけ派手に最後にやらかしたんだと思うと、オレは微笑を浮かべてこの二週間の戦いの思いを空に向かってつぶやいていた。

「この二週間は慌しかったけど本当に楽しい時間だった

赤の他人と化け物退治やったり、痺れ葉盛ったり頭使って大物取ったりとか普段じゃ出来ない事もできた

まあ、最後にお前に勝てたら言う事無しだったんだけどな

じゃあな：ライダー、お前の勝ちだよ」

そう言つてオレは光の粒となって消えていく。

消失に痛みはなく安らかな気持ちで。

眠りに付くようにオレは手を下げて目を瞑るのだった。

こうして二週間近くにわたる戦いが終わった。

戦いの結果としては願いを持たなかった騎兵が勝者となった。

聖杯に願いを掲げるにはすべてのサーヴァントの消失を必要とする。

つまり今この瞬間、勝者が決まると同時にライダーとの別れの時間が訪れるのだ  
た。

『願いは無く、満たされた器はただひたすらに輝く』

勝者が決まり聖杯が私たちの前に現界をする、ついに願いを叶える時がやってきたのだ。

ライダーは笑顔で私にこういつてきた。

「叶えたい事を叶えりゃいいんだよ、ワン子ちゃん

ここでのさよならにもうよくよくよする必要なんで要らない」

そうなんだ、これは別れの時。

自害を命じるか、なにかしらの方法でライダーが死ななければ聖杯が満たされる事はない。

このままずっと一緒にいる事はできても、きつとそれは本人が望んではいけないだろう。

そう考えていたらライダーは自害については良くない印象があるのか。

それだけはしないように事前に釘をさしてきた。

「頼むから自害させられて痛い思いしたまま消えるのは嫌だから、契約破棄ってことで消えさせてくれ

その方法でも結果としては俺の魂が問題なく入るだろうから明日にはこいつが満たされているはずだ」

契約破棄で供給されなくても消えるのね、それじゃあそっちの方が良いわ。

今まで頑張つて戦つてきてくれた人に嫌な思いをさせてまで貰うのはなんだか悪い気がする。

「それで私はどんな事を命じたらいいの？」

どういった願いを最後に命じれば良いのかぴんと来ない。

ライダーが望む事を命じてあげないといけないと思つて私は聞いてみる。

「うーん、やっぱり体の傷治してくれよ、痛いから自害ほどじゃねえけどこのまま消えるのはちよつといやだし」

首をコキコキ鳴らして手のひらを何度か開閉して体の調子を確認してからライダーが言ってくる、もし体の調子が良かったら一体何を命じるように提案する気だったのかしら？

「最後に聞くけれど叶えたい夢ってなんだったんだい？」

「私の夢そのものは川神院の師範代になってお姉さまの補佐をすることだったの

でもそれは道具を使つてまで叶えてしまったら今までの努力が無駄になってしまう

それに今回実力差がある相手に向かっていった貴方や勇敢な人達を見ていたらね、私

はまだ死に物狂いで頑張っつてしがみつくと気迫が足りないって感じた。

だから今まで以上に自分を追い込んで夢を追いかけて見せるわ、それで今どうしても叶えたい願いは私には無いの、無くなつてしまったの」

「いやいや、謙遜するなよ、今までだつて十分頑張つているのが分かるぜ。」

それに死に物狂いになつたからつて体がいきなり強くなるわけじゃない、時には休ませてやるのも必要だ」

ライダーは私の言葉に同意しながら激励をしてくれている、笑いながら最後まで元氣付けてくれるこの姿には優しさと清々しさを感じてしまう。

「そうか、じゃあ今度呼ばれるのが速くなつちまうな」

とにかくやるか、命じてくれよワン子ちゃん」

呼ばれるのが速くなるという言葉に首を傾げる、なぜなのかは私にもわからない。

でも私は難しく考えずにライダーに最後の令呪を使うために片手を掲げて大きな声で言う。

「わかつたわ：『最後の令呪をもつてライダーに命じる、その傷を癒しなさい』!!」

そう言つたらライダーの傷が見る見るうちに治つていく、少し時間が経てば戦う前と全く同じ無傷な姿がそこにはあつた。

「体の傷が治つたのがはつきりと分かるな、そろそろ行くけどワン子ちゃん、達者で頑張

れ、そしてその願いを自分の力で叶えろよ」

そう言つて手を振つて去つていくライダー。

私はその後ろ姿に頭を下げて見えなくなるまででありがとうを言つていた。

「さて、感覚的にはあと半日つてところだがどうしようかね」

頭をかきながら俺はつぶやく。

あと半日の間にどう楽しむかを考えるが、先立つものが全くない今では全然思い浮かぶ事もない。

「金とかこつちの欲を満たすものを荒稼ぎとか、ハーレムの建設をこんな面倒な体でやる気は起きないぜ」

それにこつちの世界でやろうにも一回死んでからじゃないとできないのが個人的に納得できねえ」

不満げに思う事を口に出しながら俺は歩き始める。

そして歩きながらこの二週間のことを鮮明に思い出していく。

綺麗な姉ちゃんに会えた事。



その姉ちゃんの傍に居た無粋な野郎に喧嘩を売られた事。

そいつと戦ってたら女が戦いに乱入してきて面倒な状況になった事。

セイバーの奴に薬を盛られてもう少しで危ない目に合うところだった事。

そしてそんな薬を盛った奴と組んだり、成り行きとはいえ四人がかりでバーサーカーのような女と戦った事。

その後に奇襲をされてキャスターの奴に助けられた事、アサシンの奴と仲違いした事。

それからは体を休めて最後に全力を尽くした対決をセイバーとした。

思った以上に満足のできる日々だったな。

「こんなのだったらまた呼ばれてみるのも悪くないな」

思い返すとそう悪くはない時間だった気がする。

ワン子ちゃんに言った言葉の意味は『ワン子ちゃんが願いを言わなかった場合』に呼ばれるのが速くなるだけだ。

器が満たされたにもかかわらず使わなければ、聖杯は現界を維持する為に聖杯の中身は減っていくだろう。

しかし減ったとしてもごく僅かな量で、またすぐに聖杯は満たされてしまい、再びこの戦いが始まってしまいうだろう。

だから俺は最後にその可能性を考えて言ったのだ。

「ああ言つてたワン子ちゃんが使う訳がないだろうから可能性は高いだろうな

誰にもわからねえ所でゆつたりと眠つて消える時間が来るのでも待つておくか」

もはや楽しむにも時間も必要なものも足りていないのだから、最後は令呪で傷だけを癒すのではなく、体力も癒し、この戦いで疲れた心にも休息を与える様にする。

次に目覚めるのなら俺は自分の世界に戻っているのか、はたまたこの戦いの場所に間髪いれず呼ばれるのか、それはまだ分からない。

俺は過ごした日々に充実感を抱きながら目を閉じていく、その刹那に聖杯が満たされていく幻想を瞼の裏に見ていた。

そしてライダーが光の粒になった翌日。

聖杯は七騎のサーヴァントの魂によって満たされたが、願いは叶えられずそのまま満たされた状態で現界していた。

この状況を良しとしなかった川神院は聖杯を悪用される事がないように嚴重に保管した。

しかしまたこの『聖杯戦争』が始まった時、聖杯はこの場所から無くなり勝者の目の

前に現れるだろう。

その再び現れる時を待っているかの様に、満たされた聖杯は保管された場所で煌々と輝いているのだった。